

はその才夢にも通ひしゆゑならし。右大將源頼朝の、左遷人にて、後日本の臣となりしはその族の怨あればなり。あやしの民の、かく成り出でしは例あらじかし。  
 この世のことは見しも聞きしもまのあたりなれど、老いの僻覺ひがおぼえもあんなるべし。

卷一

長濱眞砂

- 乾 西北。
- あやしの民 賤しい人民。
- 二八ばかりの年 十六歳の頃。
- さすらへ 流浪して。
- 松下氏石見守 秀吉の仕へたのは松下加兵衛之綱で遠江國長上郡西塚に居た。石見守は之綱の子吉綱である。
- たづき たより、便宜。
- 川逍遙 河邊の散歩。また川の舟遊び
- 道の邊云々 道の邊にかくれてゐての誤りか。
- 清洲 尾張國清洲
- 蘆沓 蘆で作つたはき物。
- の、しる 勢ひの盛んな。

羽柴筑前守豊臣秀吉、天文六年丁酉に生まれ、後には關白に成り昇り給ふは、尾張國愛智郡中村とかやとて、熱田の宮よりは五十町許り乾にて、萱ぶきの民の屋わづか五六十許りやあらむ、郷のあやしの民の子なれば、父母の名もたれかは知らむ、一族などもしかなり。二八ばかりの年、只ひとり遠江國までさすらへ行きて、松下氏石見守とかやに仕へて暫くありしが、おもひ定まらざるにや、又もとの里に歸りぬ。其の頃尾張國の司は織田上總守信長主なり、いかにもして宮仕へばやと思はれしかど、かくいふべきたづきも更になりければ、いかゞはせむと念じ給へりし。信長川逍遙して歸り給ふ道の邊かくるて、「宮仕の望みあむなる。」と高く宣ひたまへば、「我に仕へむや、いかさま思ふ所もありなむ。」と許し給へば、やがて清洲に供奉して朝夕宮仕せり。信長鷹狩を好み日毎に狩に出でたまふに、一日も怠らず蘆沓を我ととりはく様にてもせしが、賢さ人に勝れぬれば、次第にときめき出で、從者ずからなどを持ちて、木下藤吉郎となむ呼ばれし。

其の頃、信長の心に叶ひの、しる柴田修理亮勝家、丹羽越前守長秀とかやいひしかば、



○永祿 正親町天皇の御時。  
 ○かつく ぼつぼつかたはしから。  
 ○佐々木承禎 佐々木義賢人道して承禎といふ。  
 ○観音寺城 近江國老蘇村。  
 ○甲賀 近江國甲賀所領の地。  
 ○我々に 各自に。  
 ○平治 平治の亂。  
 ○法皇 後白河法皇。  
 ○鳥羽 山城鳥羽の城南離宮。  
 ○しかり 同様である。  
 ○後鳥羽の上皇云々 承久の變をいふ。  
 ○鹿苑院 將軍足利義滿薨じ鹿苑院と諡した。又詔して太上皇を贈られたが、義時がこれをお受けしなかつた。  
 ○當時 そのかみ。  
 ○弓削の某 道鏡。

其の人の名字を一字づつ、賜はらむとて、丹羽の羽に柴田の柴を添へ、羽柴筑前守と改め給ひしとなり。後にはこの人々をも越え、よろづ信長の仰事をつたへ、勢ひ次第に加はりけりとなむ。永祿七年信長主美濃國を従へ、稻葉山の麓に移り、井の口となむいひしを岐阜と改め住み給ふ。其の折の美濃の主は齋藤山城守正利の孫龍興とかや云ひし、國人かつがつ背きければ、龍興主は越前に走り侍りぬ。永祿十一年四月信長江南へ軍を發し、箕作城を攻めたまひしに、秀吉先がけ城を破つて敵を退く。佐々木承禎、観音寺城を退き甲賀に落ちしかば、都までの道開けて信長都に入りたまふ。その頃畿内は國々知所を分けて、我に城構へしが、信長都に入り給へば、従ふもありけり、従はざるもありけり。従ふは懐け、従はざるをば悉く討ちけり。都畿内悉く信長計らふなるべし。保元の頃王道亂れ、都の中も靜かならず、平治に平相國清盛、信賴義朝を亡ほせしより、一門あまた司を得、我が身太政大臣に昇り、奢りを極め、法皇を鳥羽に籠め、上下の禮を亂りしより、源賴朝か一族を亡ほし、日本の總追捕使をあづかり、我が心を恣にし、頼家、實朝まで次いでしかなり。北條義時、後鳥羽の上皇を隱岐の島へ移し、人の道に背きし科のがれ難く、相摸守高時に至りて亡び果てぬ。足利尊氏、後醍醐の帝を南陽に移し、私の心に任せ將軍鹿苑院、太上皇などいひしこそ淺まし。耳も塞ぎつべし。當時孝謙帝、弓削の某太上皇になさむは宇佐の宮へ宣ひしを、神忿りたまはずや、かくなりもてゆくぞ心あらむ人は悲しび嘆

○源義輝 足利十三代將軍。  
 ○三好 三好長慶。  
 ○義昭 足利十五代將軍。  
 ○方人 味方。  
 ○賑はしく云々 よいよ時めき榮えて知る所 所領する土地。  
 ○江北 近江の北部。  
 ○浅井備前守 近江小谷の城主浅井長政先がけ 先陣。  
 ○姊川 近江美濃の國境に發し伊吹山麓から西流して琵琶湖に注ぐ。姊川の戦ひは現今の湯田村附近。  
 ○小谷 近江國小谷村の北嶺に城址がある。  
 ○虎ごせ山 虎御前山。近江國小谷山の南。  
 ○軍たて 陣たて。  
 ○刀根山 近江國柳瀬山を刀根越といふ。  
 ○無下に 全く。  
 ○朝倉義景 越前の領主世々一乗谷に居る。

かざらむや。明德應仁の亂など聞くも淺まし。源義輝三好が爲に討たれ、弟義昭織田信長を方人として都に入りしかど、信長と後隔てありて、毛利輝元を語らひ落ち行き給へば、足利の末爰に盡きぬ。織田信長、帝をあげ給ふ様なれども、政御心の儘ならず、なにくれのことも信長はからひ、下が上を従へる事五百年許りに及べれば今更いはむ方なし。筑前守秀吉愈世人に越え、賑はしくなりまさり、知る所多かりけり。元龜元年の夏江北浅井備前守、越前國主朝倉義景と一心にして信長を背き侍れば、軍を發し彼を失はんとし給ふ。筑前守秀吉先がけを望みぬ。信長許し給へり。勢も多かりけれど、猶彼に合はすべき程ならねば、美濃國人竹中氏、牧村氏、丸毛氏三人を具せばやと請はれしに任せ給ひしかば、彼等を相伴にして江北の軍に先がけし給へり。同六月二十八日姊川の軍ありける。竹中氏久作の某、其の折江北のみにあらず、あたりの國まで名を擧げし遠藤氏を討つべき事かねて云ひ語りしに、たがはざりしぞ不思議に皆人思へりとなむ。浅井が軍朝倉が扶けの兵、戦ひ破れぬれば、小谷城に辛うじて入りぬ。天正元年八月信長又小谷に軍を寄せ、虎ごせ山に軍だてし給ふ。浅井また越前へ助けの兵を請ひしかば、朝倉頼て兵どもを江北小谷に指向く。其の軍刀根山に行きしと聞きて、信長驅け向ひ戦ひしに、越前の軍無下に破れ、命を失ふ者多かりければ、續いて越前に亂入し、朝倉義景を討ちけり。かくせし程に浅井頼みを失ひ、同八月二十八日備前守父子自害しぬ。其の程のこと信長記にあれば漏ら



○知所 領地。  
 ○戊亥 西北。  
 ○海にそひ 琵琶湖に沿ひ。  
 ○古き城所 今濱城は永正の頃土坂泰貞が築いた。  
 ○石ぐら 石を疊んで作つた城壁。  
 ○殿造り 館を作る。  
 ○今濱 近江國にあつて北國街道の衝にあたる。秀吉封ぜられて長濱と改めた。  
 ○東播 播磨の國の東部。  
 ○仰がざり 君を仰いで従はなかつた。  
 ○東播半は過ぎ 播磨東部過半を領地とし。  
 ○家の子 家來。  
 ○輝元主 輝元殿。主は敬稱。  
 ○頼て寄せ云々 直に攻め寄せ戦はうとするが、兵が少ないから。  
 ○書寫山 播磨國書寫山圓教寺。天台宗。○やらひやり 追ひやり。

しつ。淺井氏が知所残りなく筑前守秀吉に賜ひ侍りぬ。同九月小谷城に移りたまひ年も暮れぬ。明くる天正二年の春小谷山は北境雲いと深く、近えまさる空のくるしみあり。三里餘の戊亥にあたり今濱とて古き城所あり。海に沿ひて雪淺く、舟の往來も便ありて、今信長の御座安土山へも程遠からねば、かふり仕ふるに煩ひなし。此處に住まむとて、堀を深くし石ぐらを打廻らし、殿造りして移り給ひぬ。今濱の名を改めて長濱となむ。

君が代も我が代も共に長濱の眞砂の數の盡きやらぬまで

誰人の詠みしといふ事も忘れにけり。天正五年十月播磨國を信長より秀吉に預け給へば、かの國へ行き向ひぬ。東播は皆従ひつきし中にも、小寺官兵衛は固より志深かりけり。西播、佐用、上月の輩などは仰がざりければ、かの輩に軍を向け、上月城を落し、其の外背くをば戒め、従ふをば近づけ、上月城には山中鹿之助といふものを居守らせ、江北に歸り給うて年も暮れぬ。明くる六年の春又播磨國に赴き、但馬、因幡二つの國を従へむと出で給ふ。播磨賀古川に到りし折節、別所小三郎といふ武士、東幡半ば過ぎて知り、家の子多勢ありて、三木といふ所に城構へありしが、安藝國毛利右馬頭輝元主を内々語りて秀吉を背きぬ。國人彼に志ある者もありとなむ。やがて寄せ戦はむを、勢少なければ、信長に使を馳せ兵を請ひてこそ寄せめ、其中何處か便よからむ所こそあらむ。」と小寺氏に問はれしに、「書寫山こそ僧坊も多く糧以下に富める處なれば、かの寺の僧共をやらひやり陣所

○更なり 僧に罪咎もない殺さぬのはいふまでもない。  
 ○下知 命令。  
 ○性空上人 高僧。京都の人。書寫山圓教寺の開祖。寛弘四年寂す。年八十。  
 ○結界 佛道修行の隙害を人らしめぬ地城。  
 ○居常の燈 常住不斷の燈明。  
 ○大江 毛利氏は大江氏から出てる。  
 ○輝元 隆元の子。  
 ○吉川 毛利隆元の弟元春。  
 ○小早川 毛利隆元の弟隆景。  
 ○後攻 應援の後陣。  
 ○催し加へ 召集し加へ。  
 ○太郎城之介信忠 信長の長子秋田城之介織田信忠。  
 ○おろか おろそか

に定め、信長の助け待ち給はむには如かじ。」と答へぬれば、さらばとて書寫山へ登りぬ。寺僧ども思ひがけざれば、あわて身一つ辛うじて逃げ迷ひぬることいへば、「更なり。寺僧に咎なし、殺すまじき。」と堅く下知し給ひけり。一條院の御宇永延二年に、性空上人此の山を結界の所にし、觀音をあがめ、居常の燈か、けそへ、法の花房手向け絶えず、女人の登ることを止めぬれば、佛もさぞ淨からんかし。かくめでたき靈地の、今武士に穢され亡びなむとするこそあさましけれ。兵は凶器なりとて、聖の御代には用るられぬこそ理なれ。かくせし程に毛利氏大江輝元、吉川、小早川、はらからの某を大將として、備前美作の主宇喜田氏直家を語りひ五六萬が程の軍勢にて西播に出で、上月城を幾重も圍みぬ。鹿之助後攻請ひければ、秀吉小寺氏など催し加へて向ひ、高倉山に軍だてし給ふ。毛利家大勢なれば、城を圍み、攻むるをばさし分け、秀吉に向ひ戦はむをば、その方に備へをなせり。かうくの趣、信長卿に早馬を打たせければ、太郎城之介信忠主を大將として、佐久間右衛門、瀧川左近など向けられ、信長も出で立ち給はむとありしを、この勢共明石高砂の邊にありて、高倉の表へは行きもやらず、剩へ信長卿の出で給はむをも折々止め、「高倉をば退きたらむに如かじ。」と信長卿にいひ送りしかば、「彼等がいふに任せ、筑前守、軍を退くべし。」とありしかば、心得ずながら力に及ばず、秀吉功あらん事を妬み、かく計らひなせるとなり。私の妬みをたて公をおろかにすること正しき道にあらざるべし。心あらむ



○城の思ひ云々 山中鹿之助以下城中に圍まれてゐる思ひを甦らせようぞ。  
 ○物具 鎧兜。  
 ○おり合ひ おり立ち出あひ。  
 ○野伏 山野にさすらふ山賊や流浪武士  
 ○後攻 應援のために敵の背後に廻る軍勢。  
 ○かうべ川 河部川備中の大河。伯耆に發し上流を高梁川といふ。  
 ○數まへられぬ身云云 人並に數へ舉げられぬ身だから如何でもあらうが。  
 ○しかなる かくの如くなる。  
 ○三木 播磨國三木城は釜山城といふ。  
 ○向ひ城 敵の城を攻める時それと對して築く城。  
 ○乾 西北。

人かくやはあるべきと人みな嘲りあへりとなむ。秀吉いかにもして軍して、城の思ひを甦らせむと心をもみ給ひしかど、大勢陣を堅くすれば、我が兵ばかりにてはせむ方なかるべし。或時毛利家の軍より野伏を伏せて、馬草取る下部を討ちぬれば、秀吉の兵共物具もしめあへず、おり合ひて野伏共を又討ちけり。毛利家より兵共又おり來にけり。秀吉の軍に尾藤氏、戸田氏などいふもの先がけ疵を蒙り、中村氏敵よく防ぎあへり。宮田氏命を失ひぬ。彼もこれも名を顯はし祿賜はりけり。かく軍に及ばば、秀吉の軍危からんと量りしりて、竹中某下知をなして其の日は暮れぬ。「戦ひを止め引退くべし。」と重ねく信長卿より使ありしかば、力なく高倉山を退きて書寫山に歸りぬ。城の中には後攻をこそ頼みしに、かく退きぬれば、せむ方なく毛利家に和を請ひ降りぬ。後備中國かうべ川にて失はれけるとなむ。秀吉聽て信忠卿の許へ往きて、「今度上月表へ旗を寄せさせ給はば、毛利家の根を絶ちて亡ほし失ひ、中國筑紫までも信長卿の御心の儘なるべし。秀吉は數まへられぬ身なれば、とまれかくまれ、鹿之助を棄てさせ給ひしは、西國のはてまでも御名を流し給ふ口惜しさ、佞臣の志、昔も今もしかなるにこそ。」と憚らずいきまく程なれば、信忠もけにさぞな。日移さず三木へこそは寄せめとて、軍の某共觸れ給うて、八月末つ方大勢を三木城へ遣はし、廻りをかこみ、向ひ城數多所、秀吉の居給はむ所は平山とて乾にあたるにや、堅く構へをなし置き、秀吉に渡し、信忠歸り上り給へば、秀吉の勢の外は殘る者

○軍だて 陣立。  
 ○一番の備への陣先陣。  
 ○秀長 秀吉の異母弟。  
 ○かけ負け 戦つて負け。

○手負 負傷者。  
 ○城之介信忠 秋田城之介織田信忠。城之介は秋田城を管理する官職。  
 ○心地惱み 病氣に悩んだ。  
 ○もて騒ぎ 騒ぎ。  
 ○棄の聖 名醫。  
 ○意りさま 病氣快癒の様子。  
 ○心ちさはやぐ 清満と気分よくなる。

あらざりけり。十月末つ方三木より軍を出して、正平寺とかやを中村孫平次に守らせける向ひ城に寄せぬ。秀吉も其の方に軍を向けしに、中村の向ひ城を打棄て、秀吉の軍だてして居給ふ陣を破らむと旗を進め刃を交へ、一番の備への陣を打靡かして競ひかけしを、次の陣秀吉弟羽柴美濃守秀長待ちうけいたく戦ひ給へば、遂にかけ負け、追ひかけ討たる、もの多かりけり。別所弟小八郎主を始め、久米五郎などといひ勇ある武士ども四人その外討たれ、辛うじて城の中へ引返す。かくて今年は暮れぬ。  
 天正七年の春、古田吉左衛門尉、神子田半左衛門尉、中西彌五作など守りし向ひ城のあたりを、三木よりも糧擔ひ、連夜に紛れて取入れむとせしを、三人の者共出あひ入れさせじと闘ひし程に、石野越中が射ける矢に、古田吉左衛門中りて討たれぬ、別所が兵ども手負數多ありければ、互に引きて軍はやみぬ。三月初めつ方三木の向ひ城程遠ければ近く寄せむとて、城之介信忠、兵數多引き具し播磨に下り、向ひ城ども寄せたまふに、大勢なれば城中よりも出逢ふべき程もなく、堀ほり堀ぬりて、秀吉の從者ども入れ置き、四月末つ方信忠歸り給ひぬ。秀吉卿の、わざ何事につけても、頼もしき人に思ひ給ひし竹中半兵衛主、例ならず心地惱みしを、藥の道識る人もて騒ぎけれど驗なかりければ、京にこそ藥の聖もあれとて上りしに、少し怠りさまなれども、猶心地さわぐ様にもなければ、播磨にて死なむこそ軍場に命を落すに同じかるべしとて、未だ惱みながら、秀吉のおはせし平



○劉禪 三國の時蜀の先主劉備の子。  
 ○孔明 三國の蜀の名將諸葛亮。  
 ○なでふことかあらむ 何ほどの事があらうか。  
 ○向ひ城 敵の城を攻める時それに對して築く城。  
 ○驅け合ひ 驅けて行つて敵に出逢ひ戦ふ。  
 ○小三郎 別所小三郎長治。  
 ○かたつかた 片一方。偏したる方。  
 ○この國を知らむ人 この國を所領する人。  
 ○但馬國人 但馬の國への誤りか。

山に行きて、六月中の頃遂に失せにしぞかし、秀吉限りなく悲しび、劉禪、孔明を失ひしに異ならず。されど城は日々に弱くなりゆけば、今なでふことかあらむ、同十月十日城よりも軍を盡して、谷大膳が守りし向ひ城に寄せ、息をも休めず頻りに戦ひ、大膳主討たれにけり。秀吉聞きて平山より討ち出で、救はむとしたまひしに、大膳は討ちつ急ぎ引かんとたゆたふところに、驅け合ひ戦ひしかば、別所が兵ひと軍にも及ばず、驅けたたてられて行くを、追ひかけ討ちしかば、別所が頼むところの一族郎黨、二百六拾餘人命を失ひぬれば、城中弱くなりはてて、今は軍すべき様にもあらで、籠にこめられし鳥の雲を戀ふ思ひなるべし。今年も暮れぬ。天正八年正月十日餘りの程に、別所が二なく思ひし岡村氏の者共、心變り秀吉に降り、還りて別所と戦ひぬれば、城を守るべきやうもなくて、正月十七日小三郎長治自害しぬ。伯父山城守家々に火を放ちて、腹搔切つて共に煙となりぬ。別所が一族悉く亡び、秀吉三年心を操りし仇を亡ほし、播磨國過半掌に握り勢ひ西國に響けり。頼て三木城を地を拂ひ家を改め、此處に住みなむとて從者共置くべき所々定め給ふ。小寺友兵衛申ししは「此處は播磨にとりてはかたつかたなり。我が住みぬる姫路こそ國の中にして舟の便もよし、この國を知らむ人は此處こそよかるべけれ。姫路に移り住み給ふべし。」と頻りに云ひければ、秀吉内々よかるべき所になむと思ひ給へりければ、姫路に移り給ひぬ。但馬國人赴き給ひしに、この國には支へて戦ふべき便りもなければ、皆從ひつ

○おしろ谷 播磨國明石川の水源押部谷か。  
 ○野伏 山賊や流浪の野良武士。  
 ○廣瀬 城址は播磨國安栗郡五十波村にある。  
 ○紹巴 連歌師里村紹巴。臨江齋又は半醒子と號す。南郡の人。連歌を以て秀吉の答願を受け有名になつた。慶長五年歿。  
 ○山名禪高 山名豊定の子豊國人道して禪高といふ。  
 ○知所 領地。  
 ○すさ 從者。  
 ○城さかしく 城が險阻要害で。  
 ○しむら 切つた肉。  
 ○このかみ 兄。子の上の義。  
 ○軍旅の事云々 論語衛靈公篇に、孔子對曰、姐豆之事、則嘗聞之矣。軍旅之事未之學也。

きぬ。おしろ谷とかやに野伏共集まりありしを少々討ち亡ほし、弟美濃守秀長を國の守りにおき、播磨國に歸り給ひぬ。西播磨廣瀬といふ所に、宇野の某といふ者城を構へ、秀吉に從はざりければ、兵を催しこれを圍み給ふ。この頃連歌に名ある紹巴、都より下りてありし發句に、  
 篝火に鶴の首みゆる廣瀬かな  
 となむいひ侍りぬれば、秀吉ほゝゑみあへりとぞ。宇野叶ふまじきやと思ひけむ、城を抜け出で西國の方へぞ落ちしを、荒木平大夫追ひかけ道にて討ちとめはべりぬ。それより因幡國にうち越え、山名禪高の踏まへし鳥取城を圍まむとしたまふ。此處は山名の某知所にてありしを、勢少なくて叶はじとて、毛利輝元の從者を加へて守らせけり。山名某は秀吉に志ありて城を抜け出でけれど、毛利がすさは猶殘れり。城さかしくてやすく破り難ければ、糧の盡きむを待つべしとて、城の廻りに柵を結び塀をぬりて城より外へ出でざる様に構へぬれば、出でて戦ふべき様もあらで、日を送り月を越しし程に、糧盡きて馬牛などを殺し喰ひしかども、それも程なく盡きぬれば、餓死にし人のし、むらを切り食ひ給へり。其の類の近きよりして遠きには與へず、子は親を食し、弟はこのかみを食しなどしけるさま、云ふもなかくなり。漢の世の亂れに赤眉の賊などこそ人を食ひしと傳へ聞くばかりなり。我が國にかかるためしやはありしと淺まし。軍旅の事未だ學ばずと孔夫子の宣ひし



○宗徒の者 重たつ者。

○奉行 直接にその事に預り處置する人

○掟を沙汰せさせ 法令や制度などの處置を取扱はせ。

○祿たび 戦功の賞を賜はり。

○天主 城の本丸にある物見櫓。天主閣。○いらか 瓦葺の屋根。

もけにさらなり。かくせし程に城より、「宗徒の者ども腹切り命を失ふべし。數まへられぬ者などを助け給ふべし。」と乞ひければ、さこそあらめと宥して、宗徒の者ばかり自害し、残れるはみな助けて出しぬ。久しく食を斷ちしを秀吉憐み、大いなる釜を据ゑ並べて粥を煮て、奉行を定め城よりいづる者共に、食はせられて志また懇なり。多く食せし者は忽ちに死に、少し喰ひしは恙なかりけりとなむ。かくして此處には宮部善祥坊は居て城を守らせ、因幡國の掟を沙汰せさせ、播磨に歸り給ひぬ。彼方此方の軍どもに疲れし兵、暫し憩はせ祿たびなどし年も暮れぬ。天正九年の春播磨國姫路といふ所を、秀吉の住むべき城を構へ給ふ。此處は小寺官兵衛久しく住みしを、國の中には此處なむよかるべき所なればとて、小寺氏退き秀吉に奉りければ、やがて石を疊みて山を包み、地を穿ちて水を湛へ、櫓ども數多造りつけ、天主とかやとて、家を組み上げて高く聳やかし、門々の構へ嚴しく、瓦のいらか軒を並べり。ある人の、  
住むからに千年住むべき高砂の松の齡ぞかねて知らる、  
かやうの事にてまた暮れぬ。

高松

天正十年の春、毛利輝元主を亡ほし従ふべき由信長卿へ申されしに、急ぎ向ふべし、信

○大江廣元 匡房の曾孫。源頼朝に従ひ幕府の公文所別當となつて政務を總理して實策する事多かつた。嘉祿元年卒。  
○吉田 安藝國吉田毛利元就發祥の地で公の廟がある。町の北に郡山城址がある。  
○元就 弘元の子。安藝の人。陶晴賢を討ち尼子氏を滅ぼして中國を平定した。元龜二年卒。  
○さかしき 才智あつて強い。  
○勢ひ猛 勢ひ強盛。  
○高松 備中國高松岡山の西三里。城址がある。  
○水攻め 水攻めは城を攻めるに用水路を斷つて城中を渴に苦しめる。水を湛へて城を水浸にする。ある。こは後者。  
○箕子 竹を編んだもの。  
○助けたべかし 助け給はれよ。

長卿も赴くべしとありしほどに、播磨、但馬、因幡三つの國の兵を引具し、備中へ越さむとしたまふ。その頃備前、美作の主宇喜多直家主、秀吉に志を合はせければ、彼を先がけとして出で給ふ。毛利輝元はその前因幡守大江廣元が末にて、安藝國吉田といへる所僅かに知りてありしが、輝元が父元就さかしき武士にて、敵を亡ほし、勢ひ猛になれり。今輝元が知所の國、備中伯耆を境して西は長門を限れり。備中國高松といふ城を堅くして守れり。秀吉の軍備中國に望みすぐも塚かは田が城などいふを時の間に攻め破りて、高松城へ寄せ圍みぬ。秀吉城を見給ふに、二方は山近く川流れり。この川をせきとめ、二方三十餘町に堤をつき水を湛へて、城の内餘るほどにして、水攻めになすべきとたくみ給ひ、陣を堅くし堤をつけり。ほどなく水の湛へること湖水に異ならず。城中の家々水底になりぬれば、高き梢に箕子を搔きて集まり居たり。龍ならねば水をも潜らず、鳥ならねば空をも翔りがたし。戦ふべき便りもあらねば、たゞ命を沈めむ外はなしと悲しびあへり。毛利輝元高松城を救はむとて、伯父吉川駿河守元春、小早川左衛門佐隆景主に八箇國の兵を添へ備中へ向けられけり。尺迦が嶺、不動が嶽に軍だてす。秀吉かねて心得、三萬餘騎をさして毛利が兵に向けられける。そのあはひ川を隔てて戦ふべき様にもあらねば、徒らに日を送りけり。城には日々水まさりゆき、梢も浸すほどなれば、筏を組み人を出して、城主清水の某はらから自害すべし。その外のもの數にもあらねば助けたべかし。」といひ送り







○立越え 行つて。  
 ○誓紙 起請。  
 ○こまなりぬれば 和睦が成立したから  
 ○天神馬場 今の攝津國高槻の地。  
 ○青龍寺城 勝龍寺城ともいふ。山城國新神足村の地で山崎以北の要害。  
 ○山崎 山城國山崎京都の南口防禦の險要。  
 ○寶寺 山崎の北、天王山の南面。今は寶積寺といふ。  
 ○加藤遠江 加藤遠江守貞泰。  
 ○久我駿 山崎の西北から東南久我に向ふ道。  
 ○先陣 先陣。

明知光秀と戦はむと思ひ給へりければ、毛利家の媒なかつち小寺官兵衛を呼び、「かうく、京より人來りぬ。兼ていひし如く、毛利家と平らぎをなすべし。立ち越えかくと計らふべし。」と宣へば、小寺急ぎ毛利家の陣所に行きてかうくと云ひ語り侍りぬ。信長自害を未だ毛利家に知らずやあらむ、やがて同心なれば、誓紙の誓ひを固くし、事なりぬれば、六月六日秀吉播磨に歸り給ふ。雨降り川水出でしをやうくにしてしのみ、其の夜に姫路に著き給ふ。軍兵おくれ明くる日に著くもあり、著かぬもありけり。九日姫路を立ち都に上り、明知光秀と戦ひを急ぎ給ふ。同十二日攝津國天神馬場に著き給ひぬ。

光秀は秀吉備中の軍を平らかにして上りぬと聞きて、青龍寺城に移り、其の勢を山崎の東に軍だてす。同十三日未明に天神馬場を立ち山崎に向ふ。中川瀨兵衛、高山右近、秀吉に志ありければ、山崎の宿の外れ寶寺を東に軍だてして、明知が陣に向ふ。秀吉の先陣多く加はりけり。未だ戦はざるに、秀吉の從者加藤遠江旗を進めて、山崎の宿の南川のはたを直に、久我駿を上りに後へ廻らむと進み行けば、明知が勢後を包まれじと色めき見えしに、中川、高山兵を進めてかゝりければ、明知先勢戦はむとすれど叶はず、御牧三左衛門尉などその場に討たれぬれば、我先にと落ち行きけり。或は丹波路、久我繩手思ひくりに落つるものを、追ひかけく討ち取る事數も知らざりけり。明知光秀軍破れぬるを見て、青龍寺城へ馳せ入りぬ。これまで圍むこと隙なかりしが、いかゞはしたりけむ、したしき

○坂本 近江國坂本光秀の城地。此の時その妻子が坂本に居た。  
 ○勸修寺云々 地理あはず六地藏を過ぎの誤りかといふ。  
 ○小栗栖 山城國醜間村。木幡の北。  
 ○野伏 山崎。  
 ○落人 逃亡者。  
 ○物具 鎧兜。  
 ○よしなし つまらぬ。  
 ○たけ昇り 高く昇り。  
 ○さらぬ體 その様な事もない様子をして。  
 ○慕ひ來 後追ひかけて來。  
 ○鞍覆 馬鞍。鞍の上を覆ふもの。布帛皮革で作る。  
 ○生捕ども 捕虜。  
 ○それを知らで 光秀が城を逃げ出た事を知らずして今かく吾々は捕虜になつた。  
 ○江西 近江の西部で坂本を指して急いだ。  
 ○明知彌平次 光秀の從弟左馬介光春。

從者五六人具して城を紛れ出で坂本の館へぞ落ち行きける。常に人通ふ道はおのづから答むることやと、道をかへて伏見の北の方、大龜谷にかゝり、山中にて物具をばぬぎ捨て、勸修寺を過ぎ小栗栖を通りしに、野伏共の聲して「夜更け馬の音するは如何様にも落人にこそあらめ、いざ物具とらむ。」といふ者あり。よしなしといふもありけり。水無月十三日月はたけ昇りぬれど、いたう曇りて暗かりけり。里の中道の細きを出で行くに、垣越しに突きける槍、明知光秀が脇に中りぬ。されどさらぬ體にて駆け通りて三町許り行き、里のはづれにて馬よりころび落ちけり。隨ひし者立寄り、「こはいかに。」といふに、「里の中の野伏の聲にて突き出せし槍中りぬ。それにて云はば野伏も猶慕ひ來べきと思ひ、さらぬ體にてこれまで過ぎぬ。今は行くべきやうにもあらず。首を切りて顔を深く隠すべし。」とて絶え入りけり。騒ぎけれどもせん方なし。いひしに任せ首を切りて、乗りたる馬の鞍覆に包み、道より一町ばかり傍なる藪の茂れる溝にかくし、死骸人の見知るべきにあらねばとて、道の少しわきに取りかくして、隨ふ者はそれよりおもひくりに落ち行きけり。青龍寺には、明知城を出でぬれば、兵どもこほれ落ちけり。取捲く勢にあひて討たるもあり、生捕らるゝも多かりけり。生捕どもに問ふに、「明知はまだ暮れはてぬ程に城を出でたり。それを知らでかくなむ。」と皆同口に云ひければ、さてこそ明知青龍寺を落ちけりとは知り。坂本にこそ行かめと軍兵江西へと急ぎぬ。明知彌平次は安土城にありしが、秀吉西國



○よしなし かひがない。  
 ○堀久太郎 太郎左衛門秀重の子秀政。  
 ○三井寺 近江國三井。天台宗寺門派の本山園城寺。  
 ○明知が落人 明知の軍の逃亡者。  
 ○藪くろ 藪のあざ。これなむ。これは光秀の首であること。  
 ○自然 光秀の次子。共して 引きつれて。  
 ○天主 天主閣。城の本丸の上に築いた橋。  
 ○焼きあひ 焼きあひか。  
 ○齋藤内藏助 名は利三。美濃の人。母は光秀の妹。  
 ○二なき者 ならびなき親しい者。  
 ○かた田 近江滋賀郡堅田。  
 ○穀田 死骸。  
 ○栗田口 洛東。東上。西。東國街道京都の入口。  
 ○唯任 光秀天正三年信長の命により明知氏を惟任に改め丹波に封ぜられた。

よりのほり山崎久我嘜にて軍に向ふと聞きて、「此の城守らむことよしなし。光秀と一緒にこそは死なぬ。」とて、十三日安土を立ちて山崎へと落ちしに、堀久太郎主、軍過ぎてより安土へと進み行くに、大津打出の濱にて彌平次が勢に行き向ひ、互に鎧を交へて戦ひ、彌平次が兵多く討たれにけり。されど彌平次八十餘騎許りを引き具して、湖水の汀を驅け抜けて坂本城に入りぬ。十四日秀吉三井寺に至り給ひぬ。明知が落人の首切りて方々より持ちきたる中に、小栗栖の里人、明知光秀が首を持ち來たり、「如何にしてかくぞ。」と問ひ給へば、「今朝里人の外に出で、落人ありやと方々見廻せしに、藪くろにして首を見つけぬ。物に裏みし様いかさま常の人にはあらじと思ひ、かれこれ見しほどに、中に見知りたる者ありて、これなむと云へば、急ぎ持ち來ぬ。」と答へぬ。秀吉悦び、「信長を討ちし報いはや來にけり。」と杖を持つて首を打ちたまひけり。彌平次は坂本城に入りぬれども、從へる者は皆おのがさまなく、に落ち行きて、城を守るべき様にもあらず、光秀が子自然といふを具して天主にのほりぬ。敵四方より近づきぬれば、自然を刺し殺し、天主に火をかけ焼きあけ、腹切つて失せけり。齋藤内藏助は明知が二なき者なり。軍場を遁れ江西かた田の井貝といへるものを頼み、身をかくさむとせしを、井貝搦めて秀吉へまらせけり。光秀が骸を求め首を續ぎて栗田口に磔にせられ、内藏助もその傍に然なり。京わらんべ落書をなせり。明知、氏を惟任に改む。明知と書けることは人皆知れば、悪を知らせむとにや。

○知所 所領の地。  
 ○弓をも云々 武藝の心得ある者は秀吉に從つて高松城攻撃に行つた。  
 ○伊吹 近江坂田郡美濃との國境。膽吹山。  
 ○山本 近江國朝日山の麓。  
 ○長濱城 秀吉の居城。近江國琵琶湖畔。  
 ○鹽津貝津 近江國鹽津。海津。共に琵琶湖の北岸。  
 ○長谷川 長谷川秀一、本名は貞長。  
 ○幼き子達 信長の幼き子達。  
 ○丹羽五郎左衛門 名は長重。父は長秀。  
 ○池田勝人 池田紀伊守信輝。入道して勝人といふ。  
 ○佐々陸奥守 盛政の子成政。  
 ○楯籠り 城に入つて防ぎ守る。

主の首切るより早き討死はこれたうばつのあたなるなりけり  
 諍ひに負雙六の齋藤は七目く、られ恥をこそかけ

例の人の癖なるべし。秀吉坂本より船に取乗り、江北長濱へ越し給ふ。此處はもとより知る所なればなり。北の方も未だ播磨に移らで此處になむ住み給へり。其の外隨ふ者共妻子も多かりけり。信長討たれさせ給ふ上は此處にも敵來るべし。弓をも引く程の者は備中に赴きぬ。年老いたる者など少々残れり。とても防ぐべき様にもあらねば、唯身を隠すにはしかじとて、伊吹の麓廣瀬といふ山の奥に逃げ迷ふ様思ひやるべし。散りく、に越しのく様淺ましなどおろかなり。その邊淺井郡山本といふ所に安土萬五郎といふ武士あり、明知に志ありければ、信長討たれ給ふと聞きしより、頼て長濱城に寄せ來ぬ。秀吉の從者は皆落ち失せぬれば、家々に残る器取り持ちておのが館に歸りけり。秀吉明知に勝ちて長濱に坐しぬと聞き、我が城にて叶はじと思ひけむ、城を出で鹽津、貝津の邊に舟を寄せ、敦賀の方へ志し湖水の汀に出で、舟に乗らむとせしを、里人追ひ來て首を切り秀吉に獻りぬ。長濱に二日逗留ありて尾張國に赴き給へり。かの國は信長生まれの國なれば、清洲に城を堅くし、長谷川が父に守らせ給へり。幼き子達も此處に集まり居給へばなり。丹羽五郎左衛門、池田勝入なども同じく尾張國に到りぬ。柴田修理勝家は佐々陸奥守越中國にありしを救はむとてかの國に打越し、越後の境小津といふ城に國の兵楯籠り、越後國より勢



○城中ぐして 城中の者打揃つて。  
 ○生害し給ふ 死し給ふ。  
 ○城之介信忠 織田信長の長子信忠正五位下秋田城介になつた故にいふ。  
 ○三法師 信忠の長子秀信の幼名。  
 ○柴田丹羽 この四字尾張國とあるべきか。  
 ○三介 信長の次子信雄の通稱。  
 ○三七 信長第三子信孝通稱は三七郎。  
 ○津島 尾張國津島町。  
 ○いもら 美濃國今尾舊名今毛か。  
 ○長松 美濃國大垣附近。  
 ○養子次丸 秀吉の養子秀勝。信長の第四子次丸又御次丸といふ。  
 ○木下 近江伊香郡木の本。長濱の北四里。  
 ○共して 作つて。

を加へてありしを圍みて戦ひしに、城中ぐして和を請ひぬれば、命を助け城を受取り、猶越後までも赴くべしやといふ程に、信長生害し給ふと告げければ、急ぎ越前にうち歸り、頓て京へと赴きしに、秀吉明知を討ちて尾張に到りぬと聞きて、同じく尾張國に赴きぬ。清洲に到り各對面しけり。「此處にて國の様をも定め給ふべし。」とて、城之介信忠の息三法師主を信長の後として、柴田、丹羽をば三介信雄、美濃國を三七信孝、かく定めて各國に歸らむとす。例の癖なれば、柴田勝家道に兵をかくし、秀吉を討つべきとひそかに告げければ、ひき違へ津島に赴き、まし江いもらの渡りをして、美濃國長松といふ所に一夜をあかし、夜をかけて此處を出でて、長濱城に到り給ふ。柴田勝家越前へ歸らむとするに、「長濱の際近く通らんこと危し。」と云ひ合へりければ、美濃の垂井といふ所にたゆたひて通り得ざりけり。秀吉聞きて、「討つべき謂れなし、恐れず通り給ふべし、おほつかなくば養子次丸を送らすべし。」とて出し給へば、勝家心落ちる、次丸を木下邊まで具して越前へ歸り、秀吉も上洛し給へり。

卷二

袖 露

○總見院 山城國紫野大徳寺境内にある附屬の坊。  
 ○御わざ 御佛事。  
 ○調經 聲をあけて經文を誦誦すること。  
 ○蓮臺野 京都千本通りの北端舟岡の西蓮臺寺邊の郊原。  
 ○火屋 火葬場。  
 ○れいがん 靈庵。屍を入れるひつき。  
 ○たう たふ(塔)か  
 ○秀長 秀吉の弟羽柴美濃守秀長。  
 ○奉行 事務を取扱ふ役。  
 ○瓔珞 球玉などを編んで垂れる装飾。  
 ○池田古新 池田輝政。  
 ○次丸 秀吉の養子織田信長の第四子。  
 ○鎖籠 掛眞、眞湯、眞茶、取骨、乗炬いづれも葬儀の僧の役名。  
 ○烏曇鉢 梵語うごんはつこの樹で花無くて果を結び三千年に一度花開くといふ。  
 ○長岡兵部大輔 細川藤孝。

同十月十日頃より信長卿の葬りのみわざ營まむ事を秀吉催し給へり。さきに先づ總見院といふ寺を都の北紫野に造り給ふ。信雄、信孝は云ふに及ばず、柴田、丹羽、池田などありけれども葬りの志なかりしに、秀吉かく執り行ひ給ふ。尊靈も欣び給ふべしとぞ覺ゆ。十一日より御わざ始まり、様々に尊き限り盡し給ふ。十刹の僧ども經を捧げ、諷經をなせり。十五日には野邊の送りの御わざ始まり、蓮臺野に火屋れいがんたうなどいかめしく作り、廻りに竹垣を結へり。大徳寺より蓮臺野まで道の警固厳しく武士共固めたり。弟美濃守秀長奉行をなせり。棺槨の装ひ金繡を飾り、玉の瓔珞を耀かせり。轎の先は池田古新、後をば次丸これを昇く。秀吉太刀を持ち給ふ。鎖籠帖雲大和尚、掛眞玉仲大和尚、眞湯明叔大和尚、眞茶仙岳大和尚、取骨竹間大和尚、乗炬咲嶺和尚大禪師、其の偈に曰く、

四十九年夢一場 威名説作塵存亡  
 請看火裏烏曇鉢 吹作梅花遍界香  
 後日長岡兵部大輔つらね歌をなして云ふ。



○聖護院殿 洛東神樂岡の西南にある聖護院の門跡たる法親王をいふ。  
 ○紹巴 連歌師里村紹巴。  
 ○昌叱 連歌師里村昌叱。  
 ○心前 連歌師里村女仍の號紹巴の子。  
 ○百のつらね歌 百韻の連歌。  
 ○寶寺 山城國山崎の北、天王山の南今は寶積寺といふ。  
 ○日本に志あり 將軍として天下に合する志がある。  
 ○平らぎ 和睦。  
 ○瀧川左近 左近衛將監瀧川一益。  
 ○勢北 伊勢國の北部。  
 ○知り 領地とし。  
 ○長島 伊勢國。  
 ○龜山 伊勢國。  
 ○峯城 伊勢國川崎村に址がある。峯氏の城址。  
 ○彌生も云々 三月の終り頃。

すみぞめのゆふべやなごり袖の露  
 玉まつる野の月のあきかぜ  
 分けかへるかけの松蟲ねになきて

藤 孝  
 白 紹 巴

昌叱心前その外一兩輩して、百のつらね歌をなせり。秀吉その頃山崎寶寺の上に城を構へ居給へり。されどもこの所思ひ定めざるにや、はかなくしく構へにもし給はざりけり。十一月末つ方三七信孝、美濃國岐阜におはして、日本に志ありて柴田勝家と心を一にして、秀吉を亡ほすべき企てありけり。秀吉聞きて急ぎ兵を催し、美濃國に赴き給ふ。岐阜城に寄せらる。信孝頼み思ひ給ふ柴田は越前國なれば、雪深くして人の通ふも輒からず、其の勢ばかりにては叶はじとや思ひけむ、戦ふにも及ばず平らぎをなすべきよし宣ふ。信長の御子なれば仔細に及ばずして、互に家の計らひ、岡本下野、高山彦左衛門など人質をとりて上り給ひ、年も暮れけり。天正十一年の春秀吉伊勢國に向ひ給ふ。これは瀧川左近とて信長の從者なりしが、勢北を知りて長島といふ所に城を構へありしが、秀吉に従はざれば討たむとのためなり。鈴鹿路分け過ぎて龜山城に瀧川が從者籠りてありしを時の中に攻め落し、數多頭を取り、それより峯城をば攻め給ふ。此處は城の構へよく、兵も多かりければ、安くは落さるまじきと計りて、竹束など云ふ楯をこしらへ、城に近づきけり。城中糧やう／＼盡きければ、平らぎを乞ひて城を落し渡しぬ。かくせし程に彌生もつきがた

○木本 木下とも書く。近江國長濱の北  
 ○三七信孝 織田三七郎信孝。  
 ○濃西 西部美濃。  
 ○大垣城 美濃國大垣。  
 ○余語の海 近江國余語村の西にある湖。  
 ○中川瀨兵衛 名は清秀。  
 ○高山右近 高山右近大夫長房。  
 ○手の者 配下。部下。  
 ○引きたらまし云々 本陣に退卻したらばよかつたらしいに  
 ○早馬を打たせ 急使の馬を馳せ。  
 ○戌のさがり 戌刻過ぎ。午後八時過ぎ  
 ○本の陣 本陣。大將の居る陣。

の頃、雪消え道の煩ひなかりければ、柴田勝家、佐久間玄蕃を軍の先とし、能登、加賀、越前の勢を盡して、江北の境中河内に軍立ちすと聞えて、伊勢國の軍をさしおき江北木本に赴き給へり。此處は山深くして道細く、谷に續きぬれば敵も味方も輒く驅け合はすべき様にもあらず、陣を堅くして互に日を過しけり。美濃におはせし三七信孝、柴田が軍發せしを、時を得たりとや思ひ給ひけむ、兵を集め催し給ふと聞きて、弟美濃守秀長に兵數多添へて木本に残しおき、柴田を守らせ、秀吉二萬許りの勢を具して美濃國に赴き、三七信孝と戦ふべしとて濃西大垣城に著き給ふ。秀吉美濃に赴きぬと聞きて、其の内いかにもして軍をせばやとおもひけるにや、佐久間玄蕃、同三左衛門、久右衛門はいかい徳山など具して、遙かの嶺を傳つて余語の海の際を廻り、中川瀨兵衛、高山右近が陣取るを落さむと攻め戦ふ。叶はじとや思ひけむ。高山右近は手の者ひき連れ、秀吉の陣所木下へ落ち行きぬ。中川瀨兵衛ひとりともまり、郎從をかけまし戦へども、僅かに柵一重の所なれば、大勢に叶はず討たれにけり。そのまゝ本の陣に引きたらましかばよかんめるを、兵共の疲れぬるにや、少し引退き余語の海の汀に勢をとゞめつ、木下より大垣へ早馬を打たせ、事の由を追ひ／＼告げしかば、秀吉聞きもあへず打出で、木下へは驅けられけり。馬をも早め息をもつかせざりければ、道に倒れ死する馬も多かりけり。その日の戌のさがりに木下に著き給ひぬ。佐久間これを聞きて、敵の著かざる内に本の陣へと志し、夜未だ明けざる程



- 福島正則。嘉明
- 加藤左馬助。嘉明
- 同肥後守。清正。
- 糟屋内膳。武則。
- 平野遠江。長泰。
- 脇坂中書。安治。
- 石川兵助。一光。
- 片桐市正。且元。
- 柳瀬。近江國。
- 先勢。先陣。
- 毛受勝介。名は家照。尾張の人。勝家の臣。
- 御名を穢し。柴田勝家名を偽つて。
- 紀信。漢高祖の臣。高祖滎陽で項羽の軍に圍まれた時、漢王の車に乗つて楚軍を欺き王を免れしめ、捕へられて殺された。
- 佐藤忠信。佐藤莊司元治の子。源義經吉野に匿れ追跡された時主名を名のつて義經を逃れしめ後京都に匿れ、遂に戦死す。
- ほめの、しり。喧しく賞歎した。
- 北の莊。越前福井尾山。加賀金澤。
- あやしめ。怪しき思ふ。

に越し方の山路を引退く。秀吉かねて定めしかば兵共襲ひかゝる。山の峯へ臨める程にて互に刃を交へ戦ふ。福島左衛門大夫早く敵の頭を取つて秀吉に奉る。加藤左馬助、同肥後守、糟谷内膳、平野遠江、脇坂中書、石川兵助、片桐市正七人先に進んで敵をなびかし名を擧ぐる中に、兵助はそこにて討たれにけり。落ち行く玄蕃が勢を思ひくゝに追ひかけ、頭を取ること千人に及べり。勝家は橋本の陣所柳瀬の村のはづれに軍の備へをなしてありしが、先勢玄蕃うち負くるを見て、「猶一戦せばや。」と云ひしに、毛受勝介といふ兵言ひしは、「軍兵や、落ちて失せぬ。戦ひ給ふとも勝つべきにあらず、敵に顔さらさせ給はむよりも、城に歸り自害ありて跡をかくさせ給ふべし。某残り留まりて御名を穢し討死すべし。」と頻りに諫めければ、實にとや思ひけむ馬をかへして落ち行きけり。毛受、柴田が印金箔おしたる御幣を取りて、我が際におしたて敵を待つところに、木下美作、小川土佐進み來れば、柴田勝家と名のり、思ふ程戦ひ小川が從者に討たれにけり。漢の紀信は滎陽にて、高祖に替り命を失ひ、我が國の佐藤忠信は義經の爲に吉野に残り留まりぬ。毛受が志これに同じと人皆ほめの、しりけり。越前國に入りて頓て北の莊城を圍むに、戦はむ兵もなかりければ、勝家天主に上り火をかけ自害しける。徳庵といへる法師、城中よくした、め腹切り失せにけり。佐久間玄蕃は軍破れてより、如何にもして我が知所加賀の尾山城に歸りなむとおもひ、山中に懸りて忍び行くに、山賊どもあやしめ搦めて秀吉に奉る。柴田息權

- 權六。柴田勝家の妹の子。勝家の養子名は勝久。
- 柴田伊賀守。名は勝豊。勝家の養子。越前丸岡城に居る。
- 佐久間玄蕃。盛政
- 二郡を知りて。二郡を領地として。
- 祝言せしめて。せんまての誤り。
- かはらけ。素焼の杯。
- 父なれば。勝豊には勝家は父だから。
- ついでたがひ。人倫の序が違つて。
- 越前加賀二郡。越前一國に加賀の二郡を添へて。
- 仕置きて。取締りの處置して。
- 郎從。郎等。家來
- 三七信孝。信長の第三子。

六も搦めきたりぬ。共に都に遣はし宇治川の邊にて頭を切りけり。柴田伊賀守、勝家の爲には養子なりしが、叛きて秀吉に心を合はししこと、如何にといふかしきに、勝家甥なりける佐久間玄蕃、加賀二郡を知りて尾山城にありければ、富みも少なからず、伊賀守彼にけおされて頭さし出でず、妬みありしに、或歳あらたまの春祝言せしとて、一族の輩集まり合せてけり。かはらけ持ちきたりければ、勝家取上げまづ玄蕃に差ししかば、伊賀守心得ずおもひて、「われならで誰かは飲むべき。」と玄蕃がつと出でむとせし袖を取つて引きとめ、かはらけ取上げ差受けぬれば、勝家言葉を出さず。玄蕃争ひて及ばずありければ本の座に居けり。これよりいよく二人のなからひ良からず、彼に従はむことを惡みて、勝家を背きけるとなむ。されど父なれば不孝の罪なかるべきにあらず、勝家子を次にして甥を愛せしも、ついでたがひて罪あるべしや。杯一そ、ぎの恨みに勝家軍に負け亡びぬること悲し。人の上たるはつゝしむ鑑むべきこと明らけし。それより秀吉加賀國尾山に到る。此處には前田筑前守利家を置きて守らせたまふ。彼は柴田と同敵にてありしかども、昔よりの好み深かりけり。内々秀吉に志を通じければなり。丹羽越前守長秀、若狭國にありしを、越前加賀二郡を添へて越前守になして移したまふ。秀吉北國をばかく仕置きて、美濃國に至り岐阜城を圍まる。三七信孝、柴田をこそ頼み給ひしに亡びにしかば、草木の根を絶たれし様にて、郎從ども皆落ち失せ、日頃惠みの深かりし者ばかり留まれり。三介信



- 信雄 信長の次子
- 城を出で 信孝岐
- 知田の宇津美 尾
- 事ども云々 死後
- 勢北 伊勢北部
- 長島城 伊勢國長
- 山城 山城乙訓郡
- 殿造り 館を作る
- ひた、けき っ、
- おきて 指圖し。
- ゆほひか ゆたか
- 堀江 難波の堀江
- 松平家康 本書徳
- 新田義重 源義家
- 清康 信忠の長子

雄、尾張の勢を具して城を圍み給ひぬ。使を走らかし、「尾張の方に御座せよ。」とたばかり給へば、城を出で、川舟に乗りて知田の宇津美におはせしなり。信雄の從者中川勘左衛門主を遣はし、「自害し給へ。」とありしかば、かねてかくこそとおもひしとて、靜かに事ども認めおき、手づから刀のやいばかき合はせ自害ありけり。勢北瀧川左近、頼みつる味方亡びぬる上はせん方なくて秀吉に降りしを、越前國大野といふ所にかすかの様にてすませ、長島城をば信雄知り給ひけり。秀吉素よりの從者ども軍のいさをしありし者どもに、所々數多與へ給ひけり。くだくしければ書かず。山崎も住むべき所にあらずと思ひ給ひければ、攝津國大坂こそ要害につけても、西國舟の出入の便、都にも遠からざれば、此處をなむ住所に定め、城構へ殿造りひた、けき程にし給ふ。北の方をも移し、人々住むべき様をおきて給ふ。ある人の、

ゆほひかに圍ひなしつ、君住めば今ぞ堀江に玉も敷かまし

何くれと過ぎ行く程に年も替りにけり。十一年の春織田信雄、松平家康を語らひ秀吉を亡ほさなど催し給ふ。家康は新田義重の末にして三河國松平といふところよりなり出でたまふ。祖父清康はやうやく三河國を知るばかりにてありしが、家康武士の道かしくよくぶよくおきて給ふ。後には日本を掌に治め知り、太政大臣までなり昇り子孫目出度かりし主なり。その頃は遠州、駿河、甲斐と三河に加へて四箇國を知り、遠江濱松に住み給ふ。

- すかし語らひ 誘
- 頼もし人 頼みに
- 池田勝人 池田信
- 討たせ給はむ 亡
- 勝人父子 池田信
- 賣間の渡 岐阜の
- 犬山城 尾張丹羽
- 居たり 到りし
- 森武藏守 三左衛
- 金山 美濃國金山
- 羽黒 尾張丹羽郡

信雄これをすかし語らひ、頼もし人にしたまふに、池田勝人攝津國にありしが、去年美濃國に移り住みしを語らひたまふに、初めは從ふ様にて駒をたがへけりとなむ。岡田長門といへるは信雄の從者ながら秀吉に心を通はしぬれば、これをまづ殺しなむと思ひ給ひ、長島城にしてさし殺したまへり。津河玄蕃、淺井多宮二人は岡田氏によしみありければ、同時に失せにしとぞ。此のこと日をかへ秀吉へ告げければ、信長卿の御子に向ひ軍すべきにあらねど、是非なく討たせたまはむこと如何はせむとて、兵どもを催し、急ぎ尾張に赴き給ふ。池田勝人父子かねて美濃國にありしを、軍の先に進め給ふ。秀吉未だ美濃に著き給はぬ先に、池田賣間の渡に打臨みて犬山城を窺ふに、其の頃犬山に信雄の從者中川勘左衛門といふもの城主にてありしが、長島に到るべき事ありて居たりしが、犬山に歸らむとする道のわたりにて、池尻平左衛門尉といふ者仇をなすべきことありて喪ひ、其の身を失せにけり。かくしつ、犬山に主なき折なれば、池田氏渡舟を求め、川を越えて城をやすく取りぬ。森武藏守といふは池田勝人が婿なりけり。東美濃三郡を知りて金山といふ所にありしが、池田犬山城に移りぬと聞き、兵共引具して羽黒といふ所に出でて軍だてす。かくの、しる程に、家康卿四箇國の兵を具して尾張に到り、信雄諸共に羽黒に寄せ來て武藏が陣を破らむとす。武藏守も軍に名ある者なれば、挑み戦ふと雖も、兵僅かなれば叶はずして、金山をさして引き行くを、追ひかけ討たる、者數多ありけり。軍終りぬれば信雄、



○此の城云々 犬山城を得てなかつたらうならば。  
 ○軍立て 陣の配置  
 ○樂田 尾張丹羽郡  
 ○小牧山 尾張。名古屋の北二里半。  
 ○羽柴堀左衛門督 堀久太郎秀政功を以て羽柴の姓を許され侍従兼左衛門督になつた。  
 ○羽柴孫七郎 秀吉の養子秀次。  
 ○凌 尾張國篠木。凌はあて字。  
 ○柏井 尾張。  
 ○野伏 山賊や浮浪武士。  
 ○長久手 尾張國長湫。  
 ○旗さし 戦陣で大将の旗を持つ騎馬の士。  
 ○落し 逃げさせ。  
 ○しごろ 陣立秩序なく亂れ。  
 ○返し合はせ 引返して戦へよ。  
 ○下知 命令。  
 ○ありし所 今まで居た所。

家康、清洲に歸り給ふとなむ。秀吉兵を大勢具して馳せ下り、犬山城に到りて、此の城を得ざらましかば、輒く川を越えて軍立てせむ事難かるべし。偏に池田勝入心を勵ましける故なりと感じ給へり。頓て樂田城に移り、それより次第に先がけの勢を出して陣所定め給ふ。信雄、家康は小牧山へ取上りて軍だてす。互に二十餘町を隔てて日を送りける。四月七日秀吉の方より池田勝入、森武藏、羽柴堀左衛門督、羽柴孫七郎秀次四人、二萬餘騎の勢を分ちて樂田より東の山に沿ひ小牧の陣を右にして、凌、柏井にかゝり三河國へ移り、後へ廻らむとして出で立ちける。岩崎の村を破りて野伏少々頭を切り、長久手といふ所に到りしに、信雄、家康二萬ばかりの勢を引具して、九日の朝日に向ひ兵を進め、競ひ來る孫七郎秀次にかけあふ。秀次、信雄家康の軍は先よりこそあるらめとおもひしに、思ひの外後より敵來たれば狼狽して騒ぐ。旗を倒して落ち行きぬ。秀次年未だ若ければとて、木下勘解由、同助左衛門尉二人を添へられたり。旗とりて地にさし、旗さしをば落して二人共に討死しける。其の次にありし羽柴堀左衛門督、鉾を進めてかけ合はせ、家康の兵を追ひ散らし、少々打取つて、樂田の方へぞ驅け通りける。家康勢には目をかけず通して、兵共を一つに揃へ、池田勝入、森武藏が陣にかけあふ。池田武藏が勢後に軍ありと聞きて、急に驅け返して信雄、家康に向ふとすれど、俄に驅け戻しければ、軍だてしどろなれば、戦ひ負けて森武藏守討たれぬ。池田勝入落つる味方を返し合はせよと下知して、ありし所を去

○太郎庄九郎 池田信輝の長子。  
 ○安藤帶刀 家康の家臣安藤直次。  
 ○森武藏守 長可。

○小幡 尾張國。

○未申 西南。  
 ○ふかつの 丹羽郡古知野か。  
 ○青塚 尾張國。  
 ○木村常陸 木村常陸介重徳。  
 ○小口入れ 軍勢を小區分にして順次に入れることか。

らず、僅か二三十人許りにて猶敵を窺ひしに、永井右近馳せ來て勝入を討つて頭を得つ。太郎庄九郎少し落ち延びしが、父討たれぬと聞きて返し合はせしに、安藤帶刀馬より倒に突き落して、即ち頭を得つ。森武藏守は鐵砲に中りその儘死にける。死骸は捨てておきければ頭を取りぬる者も確かに聞えず。彼等皆討たれにければ、戦はむとする者もなく、我先きにと落ちしを追ひかけ命をとむる事数知らず。辛うじて逃げのびぬる者、太刀も刀も捨てぬはなかりけり。軍破れぬと秀吉の陣へ聞えければ、敵軍に疲れたらむ、戦ひは利あるべしとて、樂田の陣を出で、馬の足を休めず、時の間に凌につきぬ。信雄家康、秀吉輕き武士なれば、寄せきたらむとかねてさとり、急ぎ小幡の要害に引入りしかば、秀吉なすべき様なくて、田中と云ふ村にその夜は宿りて、明くる十日樂田の陣にたち歸り給ひけり。池田武藏討たれぬれど、秀吉大勢なれば事ともせず、互に陣を堅くし日を送りけり。四月末の方犬山の未申なる奈良高田ふかつの村に城を構へ、羽柴長谷川藤五郎、稻葉右京を置いて守らせ、七月朔日の程にや、秀吉六萬許りの勢を小牧野青塚邊へうち出し、段々に軍の備へをして、二重堀の假の要害をひき拂ひ、此處には木村常陸、美子田半左衛門、小寺官兵衛、明石右近など入れ置き、此の勢二重堀ひき退きつれば、敵競ひきたりしを、細川越中が從者園部與市といふ者返し合ひて首を得つ。秀吉青塚に上り見下して感じ給ふ。さて軍の備へを小口入れにして犬山に到りたまふ。其の日の暮に美子田半左衛門は



- ふづくみ 憤り。
- 勤じ給ひ 勤氣さ
- 羽柴堀左衛門督 堀久太郎秀政。
- 加藤遠江 遠江守 加藤光泰。
- 各務 美濃國。
- おふた 太田た
- 先勢 先陣。
- かでなし 城でな
- 竹が鼻 美濃國竹 が鼻町。
- 簀子 竹を編んだ

秀吉の前にありしを、「今朝二重堀敵競ひきたりぬるを返して、討たざりけるこそいひがひなく不覺せる。」と宣ひしを、「勢を持たざれば何事も思ふ儘ならず。」と言葉を返しければ、秀吉ふづくみ、「汝初めて我を頼み來し時、十人の從者には過ぎじ、今が程までなせしに、なんぞかく云ふぞ。」と怒り、それよりして勘じ給ひしが、遂に失はれけり。樂田の要害に羽柴堀左衛門督、犬山に加藤遠江など残して城を守らせ、川を越えて美濃に歸り給ふ。各務の面より南へ軍をやりて、其の日はおふたといふ所に陣をなしたまふ。先勢かじの井城に寄りて圍みぬ。守りし者共此處は要害も堅からず、假初にたて籠れば五日ともありなむ程のかでなし、圍みの固からぬ先に、落ちなむにはしかじとて落ち行きけり。圍める者共これを聞きて追ひかけしに、半ばは討たれ半ばは落ち延びけり。それより竹が鼻の城へ寄せ圍みぬ。堀深く廣きに水を湛へ、城の外も沼川にて軋く近づき難し。如何あらんと思ふに、秀吉、備中高松の如く水をつけて攻めばやとて、城の廻り五十餘町に高く堤を築き上げ堰きかけしかば、程なく湖水になりて、城は僅かに島の如し。大木に簀子をかきて上り居、程なく水に沈み失せなむと見えしに、如何したりけむ、大和國筒井順慶が陣所の前堤崩れ、落ち行く水は高し、川の漲る音して、一夜のうちに乾きつきてもとの地とぞなりにける。崩れし所をつぎてまた水を湛へむとすると、城主不破源六父子、「城を明けわたし尾張に到るべし、命助けたまへ。」と和を乞ひしかば、その義に任せ、城を請取り、

- 瀧川左近 一益。
- 蟹江 尾張國。
- 神邊 伊勢國神戸

- 白子が浦 伊勢國
- さうなく しかく
- 玉薬 照藥。
- 木戸 城門。
- 川口惑ひし舟 蟹江の川口で船を迷つた舟。
- 平らぎを乞ひ 和
- はづかはし云々 恥かしく思つたのか
- 力なく せん方なく。

暫く兵を憩はむため、後に上りたまはむとて、美濃國大垣に到り給ひぬる所に、瀧川左近尾張の蟹江城に移りぬる由使あり。瀧川は去にし年、長島より越前十五ふ一といふ村に引籠りてありしが、軍に名ある者なればとて、秀吉呼び出して伊勢國神邊におかれける。尾張國蟹江といふ所の里の主、秀吉に志ありければ、「瀧川かの地へ越しなば猶あたりのものをかり催し、軍の手だてをなすべき。」と云ひ語らひければ、瀧川頓て心一つにして、白子が浦より舟にとり乗り、兵どもを集め乗せ、忍びやかに夜深に蟹江城に赴く。瀧川乗りたる舟はさうなく著きぬ。残りの舟鐵砲玉薬など入れたるはいかゞしたりけむ、蟹江の川口に迷ひてこと方に行きぬ。漕ぎもどし彼方此方せし程に夜は明けにけり。信雄家康に此の由告げければ、驚き給ひて、馬の鞍置きあへず、急ぎ蟹江に驅け行きける。遠からねば程なく到り著きぬ。瀧川はやうやく城にとり入り、未だ息をも休めざるところに、敵はや來つて木戸を破らむとす。瀧川が從者谷崎忠右衛門敵を拂ひのけ木戸を打つて固めぬ。それより左右なく敵寄せざりけれども、川口惑ひし舟どもはむなく本地に戻りぬれば、兵も糧もなくして叶ふべしと覺えねば、瀧川偏に平らぎを乞ひ、蟹江のなにかしを討つて敵に與へ、命を助かり、舟に取乗つて伊勢に戻りけり。はづかはしくや思ひし。京に上り丹波の方に忍びてぞありける。秀吉、瀧川を救はむとて大垣より急ぎ伊勢に行き給へど、瀧川早く城を遁れければ、力なくそれより京に歸り給ひぬ。家康も蟹江の軍終りぬれば、



○文月 七月。  
 ○桑名 伊勢國。  
 ○富田左近 名は信廣。伊勢阿濃津城主左近將監。

○しろしめし所 所領。  
 ○春秋いかに云々 大義名分を正して善惡正邪をいかに辨じて書くべきか。孔子が魯の記録を筆削して作つた春秋の書名によつていふ。

遠江にぞ歸り給ひぬ。文月も過ぎ秋もやうく近くなりゆく程に、秀吉又伊勢國に赴き給ひ、桑名の西永の山へとり上り、陣所を構へ桑名を見下して、軍の手だてまでし給ふ。信雄、長島桑名に向ひたまふ。秀吉、もと信長の從者なりし富田左近、津田隼人兩人をつけて、「信長の惠みを請け、いつくしみの深き事にしへにも聞かざる程なり。我明知光秀を討ちて信長の亡魂の怒りをやめ、亡き御あとを清めし忠義少なきにあらざれども、猶いつくしみに及び難し。信雄を始め奉り信長の御族は、いかでおろかに思ひ給はむ、我を仇として亡ほし給はむとし給へる上は力なく此の軍をなせり。更に我が本意にはあらず、一度平らぎをなし對面し給はむやと思ふ願ひなり。」と語り給へば、富田、津田涙を流し、「けにさぞ思召しなりぬらむ、さらば信雄のもとに行き向ひ、御心の中をも述べばや。」とて、頼てつれて桑名に立越え、かうくと申し合ひぬれば、信雄、「我もかくばかりなり。平らぎをなさばや。」と宣へば、兩人立歸り秀吉に告げ、日を隔てず事成りて、次の日桑名の南の河原に出で給へば、信雄も共におはして對面なり、秀吉膝を折つて手をつかね、詞を出されず、涙をすゝめ給ふとなり。祕藏して持ちし刀を進上し、本の陣に歸り給ふ。さてこそ兩軍泰平の歌をなし悦び合へり。尾州犬山城は素より信雄のしろしめし所なれば、返し遣はし、都へ歸り給へり。秀吉、信長の臣として信雄に従はず、刃をとぐ事その罪明らかし。信雄父の仇を討ちし秀吉を亡ほさむとし給ふ事、義にあらざるべし。春秋いかに筆す

○家の子ども 家臣等。  
 ○富田左近云々 富田左近津田を返されけりの誤りか。  
 ○けにさるべし 誠に尤もである。  
 ○大政所 攝政關白の母をいふ。秀吉の母。  
 ○遠江 遠江濱松。  
 ○二なく ならびなく厚く。  
 ○定まれる室 正妻。  
 ○なる震り 地震があつた。  
 ○記し置かれども 記し置いてあるけれど。  
 ○眼にあたり まのあたり。  
 ○わきて云々 せりわけ甚しかつた。  
 ○浦里 海濱の村里。  
 ○ひし伊 歴しつづれ。

べきや。愚心わき難きにこそ。その冬の頃秀吉卿、富田左近、津田隼人を松平家康へ遣はし、「元來家康遺恨互にあるにあらず、信雄卿とも平らぎをなせし上は猶しかなり。上洛し給ふべし。よろづ語り合ふべし。」と云ひやり給ふ。家康は、「秀吉卿偽りはあらず、上洛すべし。」と宣ひぬれど、家の子ども、「さる事あらじ、秀吉卿寄せ來り給はばこれにてこそ皆命を一つにすべし。」と同じ様に申しければ、家康その義に同じうし給ひ、富田左近、津田を通されけり。此の由秀吉聞き給ひて、「我を疑ひ給ふ事けにさるべし。母上大政所を質に下すべし。」と遠江に下し給ふ。家康、「この上は上洛異議に及ばず。」とて頼て上り給ひけり。秀吉卿に對面ありて、二なくもてなし給ふ。家康に定まれる室なかりければ、秀吉卿の妹を嫁し給ひけり。愈隔てなく心とけて何事も朝夕々々語り合ひ過し給ひけり。同霜月二十九日子の刻許りにや、夥しくなる震りけり。その様いはん限りなし。古もたびたび大なる震りけると記し置けれども、眼にあたりかかる事なん珍らかなる。伊勢、尾張、美濃、近江、北陸道わきてありけりとなむ。浦里などはさながら海へ搖り入れ、犬鷄などの類まで跡なくなりし所々ありとなむ。家などひしけし内にありながら、さすが死にもやらざりしに、火燃えつきて焼け死に、叫ぶ聲哀れなど思ひやるさへ堪へがたくなむ。この災に遭ひ國々里々命を失ふ者際限なかるべし。常のなるなどの震る事、明くる春二月まで絶えざりけり。恐れの中に恐るべきは地震なりしと書きしもけにと覺えし。昔の筆に譲り



てくだくしければ洩らしつ。

吹上濱

○根來 紀伊國根來眞言宗大傳法院がある。根來寺と稱す。  
 ○粉川 紀伊國粉河村に天臺宗施普寺がある。粉河寺といふ。  
 ○野伏 山城。  
 ○岸和田 和泉國。  
 ○中村式部少 下に輔又は丞の字脱か。  
 ○尾張ミ云々 織田信雄徳川家康と和睦が成立したから。  
 ○寺々 根來寺の附屬の僧坊。  
 ○物具 甲冑。  
 ○辰のをはり 辰の刻の終り。午前八時頃。  
 ○覺靈 肥前の人。俗姓は平氏。高野山に入つて眞言を修む。康治二年寂す。年四十九。根來寺の開山。  
 ○粉川 粉河寺。  
 ○太田村 紀伊國太田。和歌山市郊外。

天正十三歳の春、秀吉軍を紀伊國に向けたまふ。去年尾張に戦ひたまふ折から、根來、粉川法師紀伊國の野伏語らひ合ひ、和泉國岸和田の南に城三つ四つ構へ、岸和田に籠めおかれし中村式部少と戦ひぬ。尾張と平らぎなりぬれば、かの國平らけむ爲なりけり。諸の勢を先にし岸和田に到りたまふ。根來法師の守りし千石がいはやとかやを堀左衛門督、長谷川藤五郎など旗を進め攻め戦ふ。時をかへず靡かし五百餘人が首を切れり。この勢ひに恐れ、残れる城共圍みを棄てて散りくりに落ち行きけり。三月二十一日秀吉根來に移り給ふ。寺々はみな明け失せ僧俄に落ち行きたりと覺えて、器以下とり散らして置きけり。兵共寺々に入りみちてこれを取りしたゝめなどす。申の刻ばかりに何の寺ならむ、火出でて焔空に上り、黒煙おほへり。折節風も添ひければ、先々に燃えつき夥し。兵どもあわて騒ぎ、物具やうく携へて逃げ出でけり。軒を重ねて作りこみたる寺どもなれば、一つも残るはなかりけり。秀吉宿所せんしき坊にも火かけければ、上の山へ逃げあがり給ふ。明くる日の辰のをはりまで燃えあひけり。覺鑊上人營みし大傳法院ばかりぞ残りしなり。此の時粉川も共に焼かれけり。明くる日土橋といふ所に移り給ひ、兵ども太田村といふ所に

○鹿垣 竹木の枝で粗く結へた垣。  
 ○楯をかき 楯を垣の如くに立て並べ。  
 ○卯の花くたし 四五月頃の雨。  
 ○和歌 紀伊國和歌村の海濱和歌の浦。  
 ○玉津島 和歌浦和歌村の南にある。玉津島神社がある。  
 ○大和唐の歌 和歌漢詩。  
 ○扶桑 東海にあるといふ神木で、日本をいふ。  
 ○吟呻 うたふ。  
 ○吹上 和歌山市の西南から羅賀村に至る海岸。

さし向け城を圍み給ふ。時の中に攻めおとさば、兵多く死にうすべしとて、例の水攻にし給ふ。城の高さを計らはせ、堤を築きまはし、敵の出でざる様に、外に鹿垣を結びまはせり。水次第に湛へければ、浦々よりも舟どもとり入れて垣楯をかき、旗を立て並べ、四方より漕ぎ寄せ鐵砲をうちかくる事夥し。今幾程もこらへじなど思ふところに、卯の花くたし降りしきりて、いにしへの川の流れの所堤崩れて、湖水の如く溜りし水、時の間に乾けり。又こそ水を湛へめとて、崩せし所を築き調べせし程に、城より和談の事を乞ひければ、その城の長たる者つきく四五人生害させ、残る者どもをば助け出し給へり。紀伊國残らず従ひけり。和歌玉津島の眺望を見給はむとて詣で給ふ。由己法師とて大和唐の歌にすける者従ひし、玉津島にて發句に、

神代よりことのは涼し玉津島

名景扶桑此濱冠。白波綠樹盡吟呻。

靈光磨作玉津島。料得和歌第一神。

吹上

風すさぶ松のひききもうち添へて浪こもとに吹き上げの濱

和歌の浦

古の人も眺めの和歌の浦拾ふ貝こそあらまほしけれ



- 藤代 紀伊國內海村藤白浦。
- 美濃守秀長 秀吉の異母弟羽柴秀長。
- 蜂須賀彦右衛門 正利の子正勝。
- 黒田官兵衛 黒田孝高。
- 小早川隆景 毛利元就の第三子。
- 長曾我部 元親。
- すこしき 小さな
- 仙石越前 仙石越前守秀久。
- 佐々陸奥守 成政
- 津さいふ城 越後國直江津近傍郡宇郷と云った。
- 柴田修理 修理亮勝家。
- 前田筑前守 利家
- 後攻 後方の應援隊。

藤代にいたりて  
南紀壯觀藤代山。 徑廻石上接三林間。  
學頭滿眼海波穩。 乘輿來興不盡還。

わか山といへる所に城をこしらへ、桑山修理といへる者に預けおき、大阪に歸り給ひけり。七月秀吉公關白になりて姓を豊臣になり給ふとなむ。其の春四國へ美濃守秀長を大將として、蜂須賀彦右衛門、黒田官兵衛、小早川隆景、其の外軍兵渡し給ふ。土佐の國主長曾我部土佐國ばかり賜はり、「長く秀吉の從者となりなむ。」と詫びければ、赦し給ひぬ。その外國侍のすこしき者どもをば知所取りはなして、阿波國をば蜂須賀、讃岐は仙石越前、伊豫は福島左衛門大夫、戸田民部などに與へたまひけり。其の年の秋秀吉越中國に越し給ふ。かの國は織田信長公、佐々陸奥守主に與へ給ふ。越後の境に津といふ城に越後國より兵を置きて守らせけるを攻め從へ、陸奥守に與ふべきとて、柴田修理、前田筑前守を向け給ふ。かの城に判り廻りを圍み戦ひける。越中越後の境、名にあるけはしき道なれば、越後より輒く後攻も叶はざりけるにや、城主和を乞ひて城を明け渡し、越後國に歸りぬ。その頃信長公明知が爲に討たれ給ひぬと聞きしかば、柴田は越前、前田は能登國へ歸りぬ。佐々陸奥守越中に留まりてかの國を守りぬるに、もとより國にありし武士ども、陸奥守を叛き、軍を起し來り討たむとせしほどに、富山の城の邊にて軍に及び、國人打負け、多く

- 知れり 領地ミした。
- ミりでの城 戸出ミいでの城の誤りたらう。戸出は越中國戸出町。
- 今石動 越中國。
- 肥前守 前田利家の長子利長。
- 知る所々 それぞれの領地。
- 陽光院 後陽成天皇の御父、謙仁親王正親町天皇の第一皇子。太上天皇を贈らる。
- 泉涌寺 眞言宗。洛東今熊野町。域内に陵が多くある。
- 御即位 後陽成天皇御即位の大嘗會。
- 義宗 大友義統。宗麟(義鎮)の長子。
- なをり 不詳。

討たれ、軍を發することもなくて越中國残らず心のまゝに知れり。秀吉尾張の軍の折、信雄に心を合はせ秀吉を背きければ、かく馬を進め給ふ。加賀國へは前田氏を置けり。彼を軍の先としてよろしくの勢共、越中に亂れ入りぬ。佐々氏「敵大勢なれば、所々にして叶はじ、勢をひとつにして戦ひなさむ。」と云ひて、もとしおきし加賀、越中の境とりでの城どもを破りて、みな富山一所にぞ集まりける。秀吉今石動の山に上り、軍兵ども越中の國に陣をなす。佐々氏は信長の從者にて、つねに逢ひ慣れし仲なれば、富田左近、津田隼人なかつらに於て頼て平らぎをなせり。越中國は兼て前田氏の太郎肥前守に與ふべきと定め給へば、國をば前田氏に賜はり、佐々氏は具して京へぞ歸り給ひける。かくて今年も暮れて、秀吉いよく勢ひか々やき、國々靡なびき從ふ事、草の風にのべ伏す如くなりけり。天正十四歳近き國々の軍鎮まりければ、人皆知る所々に憩ひて樂しみ合へり。七月二十四日陽光院崩御し給へば、東山泉涌寺に納め奉る。同十一月七日帝御位をすべらせ給ひ、正親町院となむ申し奉るとかや、同二十五日御即位とかや、例の如くなるべしとなり。下さまに知らざるわざなればさしおきぬ。今年豊後國大友氏義宗主、秀吉に使用して、「島津義久、大隅、薩摩、日向を從へてありながら、猶勢ひを豊後國になをり、義宗彼と戦ふに叶ひ難し。此の時援けの兵をば賜はり、力を合はせ給はば永く秀吉に従ふべし。」と云ひおくりぬれば、讚岐國にありし仙石越前守、長曾我部を副へ、豊後に赴かしめ給ふ。仙石、長曾我部、豊



○府内 豊後大分。  
 ○得長壽院 址は洛東蓮華王院址の北。即ち三十三開堂の北の地固め。  
 ○木のたくみ 大工佛師のたくみ 佛像をつくる職工。  
 ○留舎那 毘盧遮那大日如来。  
 ○事なりて 工事竣成して。  
 ○瓔珞 珠玉を編んで垂れた装飾。  
 ○よかんめれ よくあるたらうみ。  
 ○踏鞴の火 足踏みのふいごで起してゐる火。  
 ○堂に燃えつき 大佛の堂に燃えついて  
 ○今に東山云々 現今でも京都東山方廣寺に大佛が御座あつて衆生成佛の縁を結ぶ。  
 ○十五歳 天正十五年。  
 ○先勢 先陣。  
 ○昆陽野 攝津國伊丹の西。

後の府内に到りて、大友に力を加へてありし程に、霜月末つ方たがしやうといふ所にて軍に及び、戦ひ勵ましかれど、大友仙石遂に打負けて、府内の城に逃げ籠りぬ。討たる、者多かりけり。島津いよく勢ひを振ひぬ。その頃秀吉卿思ひ給へるは、奈良の京の大佛も破壊しぬ。都に建てばやと思ひなして、東山得長壽院の北に地形を築き、石を疊み、木のたくみ、佛師のたくみなど集ひて、留舎那の像を造り磨きたまふ。高野の木食上人奉行せり。三年が程許りにや事なりて、堂の葺高く空にかやき、玉の瓔珞風に順へり。貴賤詣で集ふ事量りて知るべし。されど去にし七月の大地震に佛の胸震り割りければ詮方なし。この度は鑄佛にてこそよかんめれとて、太郎秀頼卿また營み給ふ。やうく事なりぬべき程に、踏鞴の火堂に燃えつきて時の間に焔となりぬるぞ淺ましき。されど堂をも秀頼卿造り磨き給へり。此の度は人の惱みなさじとて、秀吉公より譲り給へる金銀取り出して、此の役に出てあたれる人毎にたび給ひけり。今に東山におはして、人皆なべて結縁をなしぬるも尊き。同十五歳の春秀吉卿、島津氏を退治すべしとて、四國中國の勢を先として畿内近國の兵を催し、筑紫に差向けらる。秀吉卿も三月一日都を立ちて筑紫に向はる。難波の浦より、纜を解きて舟にて下る人もあり。須磨明石を経て馬に鞭うつ人も多かりけり。先勢門司赤間の關を過ぐれば、後陣にありし人々は兵庫毘陽野にさへたり。秀吉卿、長門府に到りて兵ども二手に分けらる。一方へは弟美濃守秀長を大將とし、四國中國の勢豊

○搦手 城の背面の攻撃。  
 ○竹束 丸竹を束ねた楯。  
 ○後攻 味方の應援のため敵の後にまはるこゝ。又後陣。  
 ○宮部善祥房 近江の人宮部繼潤。秀吉の臣。

○蒲生飛騨守 氏郷  
 ○前田肥前守 利家の長子利長。  
 ○楯をつく 楯をつき立てて對抗する。  
 ○秋月 筑前朝倉郡  
 ○千代 川内川。日向に發し西流して薩摩網津高江の海に注ぐ。  
 ○軍だて 陣立。

前、豊後、八萬ばかり向けらる。其の後より日向を経て薩摩へ亂れ入れとなり。秀吉卿は畿内、北國、美濃、伊勢の勢を具して、筑後、肥前を経て薩摩へ赴かむとなり。搦手へ赴く勢は豊後、日向の境なるたがしやうといふそこを取り廻して、竹束といふものを持ちやり、夜晝攻め戦ふ。島津主後攻をやすべきとて、兵を分ちて其の備へをなせり。案の如く島津兵庫頭を大將として、後攻の爲に出で向ふ。暫しためらひもせで後攻の爲に陣を張り備へし宮部善祥坊が陣におし寄せ攻め戦ふ。善祥坊古き兵なれば、假初の陣取りといひながら、堀ほり廻し、堀ぬりてありしかば、たやすく攻め破られず、辰の刻の始めの程より巳の半ば過ぎていたく攻め戦ふ。島津固より勇士なれば、命を落さん事を顧みず、善祥坊もたけき譽れを顯はす者にて、南條などいふ武士従ひてありしかば、いかでかは敗るべければ、島津遂に叶はで引退く。命を失ひ疵を蒙る者數を知らざりけるとなむ。かかりし後には城にも後攻の便なくて、平らぎを乞ひ城を明け渡して日向國に行くとぞ聞えし。秀吉卿、豊前筑前の境岩石といふ城に、その國の兵共籠り居しを攻めむとて、先勢丹波少將、蒲生飛騨守、前田肥前守取りかけ楯をつくにも及ばず攻めかくるに、暫し防ぎけれども叶はで皆方々に逃げ失せ、討たる、者も多かりけり。それより筑前國秋月を経て筑後肥後に赴き給ふに、島津に従ひし國人の武士ども、我先にと秀吉卿に従ひ禮を盡しければ、道に滞りなく肥後國を過ぎて、薩摩國千代といふ川の際なる村に軍だてして暫し留まり給ふ。



○島津義久 貴久の子。  
 ○千代の陣 川内川畔の秀吉の陣屋。  
 ○八代 肥後八代郡八代町。球磨川の北岸。  
 ○佐々陸奥守 成政。  
 ○吉川某 毛利元就の第二子、吉川元春の長子元長に筑後に封ずるを約した。  
 ○龍造寺 龍造寺政家。  
 ○無下にまこまに、非常に。  
 ○鍋島加賀 鍋島加賀守直茂。  
 ○宮崎 筑前箱屋郡宮崎。千代の松原に宮崎八幡宮がある。  
 ○跡を垂れ 菩薩佛が衆生済度の爲に本地から身を現はされる。  
 ○松原 宮崎の松原で千代の松原といふ西博多につゞいてる。  
 ○袖の姿 博多のうちにある。

これより島津居りける城の鹿兒島といふ所へはその間十里には足らざりけり。島津義久主かくては叶はじとや思ひけむ、「我が知所の國秀吉に上る。生國なれば薩摩大隅の二つの國賜はせ、常に都にあるべし。」と詫びければ、其のいふ旨に任せて平らぎをなし、義久主千代の陣に來つて禮をなせしかば、それよりして歸り上り給ひぬ。肥後國八代といふ所に到りて、此の國をば先に越中の主にてありし佐々陸奥守に賜はせ、熊本といふ城に据ゑおき、筑後國には毛利輝元が一族吉川某に賜はりける。肥前國は素より龍造寺主知る所なり。初めより秀吉卿に志ありければ、かの輩に賜はせ給ひけり。龍造寺未だ無下に若ければ、鍋島加賀といへる從者萬と行ひけり。それより筑前の宮崎に到り給ふ。此の宮は八幡大菩薩の跡を垂れ給ひ、しるしの箱を納め、遙かに西の海に向ひ、異國の襲ひ來たらむ事を守り給ふ。松原博多に續き、眞砂清く松の風波の音添へたり。頃は水無月の未なりければ、暑さ堪へ難かりける。夕つ方松原に出でて立ち涼み、はるくくと詠むるにもろこしもま近き様に思ひやらる、ばかりなり。人々に涼しき題の歌よめとて、自らもよみ給ふ。

たち出づる袖の姿の夕風に涼しくさわぐ波の音かな

唐もかくやは涼し西の海の波路吹きくる風に間はばや

歸るさも暑さも共に忘られて飽かぬながめの浦の夕ぐれ

なべて世に仰ぐ神風吹きそひてひゞき涼しき箱崎の松

○たけ昇る 高くのぼる。

○すん流れ 順々に杯がまはつて。

○宗易 千宗易。利久と號す。泉州堺の人。茶道の宗匠。

○境の津 和泉堺の港。

○かの松原 千代の松原。

○苦屋 茅菅などを編んで屋根や周囲を作つた家。

○よしある様 趣のあるやうだ。

○松かさ 松はくり。

○慰の濱 慰む濱。名草濱は紀伊紀三井寺の海濱。

○立花 筑前國。

○羽柴美濃守 秀長。

○善祥坊 近江の人。宮部繼潤。

○島津兵庫頭 島津義久の弟義弘。

○尾藤左衛門佐 尾藤知定。知重、光房知宣とも。

住みなれしこの里人にこと問はむかくこそ夏を知らで送れる

松原やたちよる袖のやすらひにこぬ秋しるき沖つ汐風

品々數あまたつらねあへりけれども、くだくしければ洩らしつ。月たけ昇るまですん流れ汲みかはしの、しり合へり。また其の頃茶の湯の會に長ぜる宗易といへる法師、境の津より友とする人あまた具して、かの松原のもとに苦屋よしある様にしつらひ、秀吉卿に茶を進めり。好き給ふ道なれば、秀吉公も興に入りてぞ見えし。伴ひ來りし人々も思ひく

に座敷しつらひ、松の下枝をその儘垣とし、松が根を道に清め、松かさとり鹽屋の煙にたぐひ、互に心をつくせるさまいへばさらなり。秀吉公日々に詣で、夏の日も暮しやすけなる、まことに慰の濱なるべし。此處に二十日許り留まり給ひ、立花といふ所に城築き、小

早川左衛門隆景に預けおき、それより都に上り給ひぬ。島津平らぎをなしし上は搦手羽柴

美濃守重ねて戦ひをなすに及ばず、たがしやうより歸り上り給ふ。赤間が關にして、搦手

の軍の様聞きたし給ひ、「善祥坊陣所を攻めかねてひきし時追ひかけば、島津兵庫頭を始

め、悉く討ちとむべきに、さもせざりしを。いかに臆せるや。」と咎め給へり。其の頃尾藤

左衛門佐とて秀吉の心にかなひ、讃岐國賜はり時めかし給へば、勢夥しくてあたり人無

きが如くなり。殊に軍の事彼に計らふべしとて、美濃守秀長に加へて日向の口へ向けられ

て、彼如何思ひけむ、強ひてとゞめければ、力なく追討に及ばざりしと日向へ赴きし人々



○かうじ 勤じ。罰し。  
 ○中將秀次 秀吉の養子秀次。  
 ○内野 京都古昔の禁裏の地。秀吉の聚藤第は大宮、千本、丸太、一條の間に亘る。  
 ○事成り 竣工する。  
 ○随ふ人々 從臣。  
 ○山家のながし 佐々成政に背いたのは菊池郡限府の城主限部親及其の子山鹿郡城村の城主親安。  
 ○二三の構へ 城の二の構へ三の構へ。本丸に對し二の丸三の丸。  
 ○本丸 城の内郭。  
 ○馳せ歸り 熊本に私軍 勝手にする私闘。  
 ○聚樂移り 内野に新築した聚樂第へ移轉。  
 ○明くる年 天正十六年。  
 ○衣冠 束帶禮服。  
 ○尼崎 攝津國。  
 ○氣色を窺ひし 秀吉の機嫌を窺った。

同じ様に云ひければ、尾藤主をかうじ讃岐國をも取り放ち給ひぬ。七月末つ方攝津國大坂に著き給へば、帝より敕使賜はりてねぎらひ給ふ。その年の夏の始めより近江中將秀次を都に残しおき、内野に秀吉住み給ふべき殿、造り構へさせ給ひしが、秋の程には事成りぬれば、冬の初めには大坂よりも此處に移りて、聚樂と名づけ住み給ふ。随ふ人々皆我まさらむと家居はけまし造り磨きければ、又都を一つ添へたらむ様に、賑はひあへる様思ひやるべし。冬になりて筑紫肥後國には國人山家のながしといへる者、佐々陸奥守を背き、従はざりければ、彼を討たむとて山家城に寄せ攻めける。折節、國人の武士共悉く陸奥守に背き、討たむとて、さし違へて熊本城におし寄す。留守の者僅かに残りてありければ、二三の構へをば敗られ本丸ばかりにて拒ぎ戦ふところに、陸奥守、山家の軍をさし置き、馳せ歸りて戦ひけり。國人は二萬許りもありけるにや、陸奥守僅かに二千許りの勢にて敵の中へ一文字に驅け入りければ、國人四方に追ひ散らされ、討たる、者千人に餘れりとなむ。陸奥守素よりすぐれて剛なる武士なればなるべし。私の軍しかるべからざる旨を秀吉公より示されければ、その後軍はなくて互に上へ訴へけり。京には聚樂移り何くれの事にて年も暮れにけり。明くる十六年の春元日、秀吉、聚樂の亭より參内あり、みな衣冠騎馬にて供奉せり。正月末つ方佐々陸奥守肥後より上り、尼崎に著きて氣色を窺ひし所に、國人に悪しくあたりしにより恨みをふくみ軍を起す事、穩便の至りにあらずとて、尼崎にお

○私に 表向きならず勝手氣儘に。  
 ○加藤主計頭 清正  
 ○知所 所領。

いて自害させられけり。人みな惜しみあへり。國人も上へ斷らず、私に軍を起し陸奥守を討たむとせし事、罪科の至りとて、黒田官兵衛を檢使に下し、筑前肥前の者共に仰せて悉く首を切り給ひぬ。かくて肥後國をば、加藤主計頭が知所として下し給ふ。



卷三

内野行幸

○民部卿法印 前田宗向。入道して徳善院立以といふ。  
 ○永享九年云々 此の年後花園天皇が將軍足利義教の館に行幸あつた。  
 ○奉行職事 行幸の事務を取扱ふ藏人。  
 ○儲けの御所 御遷し奉る爲に御迎へする御所。  
 ○衛府 兵衛府近衛府御門守なれど、御殿御留守なれど、行幸につき御留守の役なき。なれどはなんごの誤りたらう。  
 ○具したる 整ひそろしたる。  
 ○南殿 紫宸殿。  
 ○山鳩色 黄ばんだ萌黄色。  
 ○筵道布 御道筋に布製の敷物を敷きつゞける。  
 ○反問 へんはい。顯貴の外出の時邪氣を祓ひ除く呪法。  
 ○御門の鍵を預つて 御門の鍵を預つてその出納を掌る。  
 ○古行幸の時 古行幸の時出御に當り冷を申し請け遣御の時に進め奉る奏。  
 ○御綱 鳳輦の御綱を引く役。

二月の頃より聚樂の亭に行幸なし奉るべき催しありけり。久しく絶えてなかりし事なれば、珍らかなりし物なり。民部卿法印立以といへるに仰せて、よろづとり行はせ給へば、諸家の古記録を考へ尋ねさぐりて勤めらる。此の度は永享九年室町殿へ行幸の例とぞ聞えし。されど此の度は彼にまさりける事多かりけり。日を選んで四月十四日とぞ定められける。遠き國々よりもこれを見む爲に、高き賤しき上り集まりければ、都の賑はひいはむ方なし。その日になりぬれば、殿下とく参り給ひて、奉行職事を召して刻限午時以前の由急がせ給ふ。かねてより皆儲けの御所の御氣色窺ふにこそ、衛府の輩、弓箭を帶し、上達部以下参り集まり、御殿御留守なれど誰々と仰せ定めらる。奉行事具したる由奏すれば、南殿に出御あり、御束帶御衣は山鳩色なり。御殿より長橋まで筵道布を敷き、殿下御裾をとり給ふ、陰陽頭反問をつとむ。關司の奏、鈴の奏も例の如し。殿下笏を鳴らして救答の由を告げ給ふ。御劍持は中山頭中將慶親朝臣、御草鞋は富小路頭辨光房朝臣、次に鳳輦を御階の間に寄せて左右の大將御綱以下例の如し。さて四足の門を北へ、正親町を西へ、聚

○辻固め 御通路の警衛。  
 ○國母准后 天皇の御母で三后に准じて年官年爵を賜はつた方。陽光院妃新上東門騎子。  
 ○下簾 牛車輿の前後の簾の内側に懸け垂れる絹。  
 ○こしそへ 輿に附添ふ隨行。  
 ○さすが云々 流石は帝だけあつてと思はれて。

○塗輿 漆塗の輿。  
 ○六宮 後陽成天皇の皇弟知仁親王。  
 ○伏見殿 伏見宮邦輔親王の御子邦房親王。  
 ○九條殿 藤原兼孝。  
 ○一條殿 藤原内基。  
 ○二條殿 藤原昭實。  
 ○伯 神祇伯。神祇官の長官。

樂の亭まで十四五町、その間辻固め六千人なり。烏帽子著の侍を渡して、國母准后と女御の御輿を初め、大典侍御局、勾當御局、その外女中衆の御輿三十丁餘、みな下簾あり。侍こしそへ百餘人、御供の人童姿などさすがに覺えて華やかなり。その後少し引下りて塗輿四十五丁あり。六宮の御方、伏見殿、九條殿、一條殿、二條殿、その外菊亭右大臣晴季公、徳大寺前内大臣公維公、飛鳥井前大納言雅春卿、四辻大納言公遠卿、大炊御門前大納言經頼卿、勤修寺大納言晴豐卿、中山大納言親綱卿、伯三位雅朝王、此の御衆にて侍るとぞ。

前驅

左

- 藏人中務大丞小槻孝亮 布衣侍一人。馬副二人。雜色三人。侍五人。傘持。
- 富小路右衛門佐秀直 松木侍
- 冷泉侍從爲親 正親町少將季康
- 柳原宮内權大輔資淳 甘露寺權右少辨經遠
- 勤修寺左少辨光豐 土御門左馬助久脩
- 侍從秀以朝臣 侍從秀隆朝臣
- 橋本中將實勝朝臣 西洞院左兵衛佐時慶朝臣



右。

唐橋秀才菅原在通  
 阿野侍從實政  
 冷泉侍從爲明  
 唐橋侍從緒光  
 烏丸侍從光廣  
 葉室藏人左少辨務宣  
 五辻左馬頭元中朝臣  
 次近衛次將

藏人式部大丞清原秀賢  
 吉田侍從兼治  
 大澤侍從  
 庭田侍從重定  
 日野左少辨資勝  
 三條少將實條朝臣  
 五條大内記爲良朝臣

左

園少將基繼朝臣  
 四辻中將季滿朝臣  
 四條少將隆憲朝臣  
 飛鳥井中將雅繼朝臣  
 次貫首

六條中將有親朝臣

水無瀬少將氏成朝臣

○貫首 藏人頭。

○布衣侍 ほうい即ち無紋の狩衣を著た武士。  
 ○雜色 雜役に使ふ無位の役人。  
 ○馬副 公卿の乘馬に付き添ふ從者。  
 ○隨身 兵仗を賜はつた貴顯の外出に供奉した近衛の舍人。  
 ○伶人 樂人。  
 ○駕輿丁 輿を昇く者。

萬里小路頭辨光房朝臣

中山頭中將慶親朝臣

次大將

鷹司大納言信房卿

布衣侍。雜色。馬副。烏帽子著。隨身。傘持。

西園寺大納言實益卿

同前。

次伶人四十五人

奏安城樂。

鳳輦

前後駕輿丁

次六位已下役人

此次

左大臣信輔公

諸大夫。布衣侍。烏帽子著。隨身。傘持。

内大臣信雄公

同前。

日野新大納言輝資卿

烏丸大納言光宣卿

隨身。

駿河大納言家康卿

隨身。

久我大納言敦通卿

隨身。

持明院中納言基孝卿

大和納言秀長卿

隨身。

正親町中納言季秀卿

庭田中納言重通卿

隨身。

鑑(卷三)



坊城中納言盛長卿  
 菊亭三位中將季持卿  
 三條宰相公仲卿  
 藤右衛門督永孝卿

近江中納言秀次卿  
 花山院宰相家雅卿  
 吉田左衛門督兼見卿  
 備前宰相秀家卿

隨身。

關白殿前驅

左

增田左衛門尉雜色。馬副。以下同前。 福原右馬助  
 加藤左馬助 糟屋內膳正  
 堀田圖書助 中川武藏守  
 小野木縫殿助 眞野藏人  
 一柳越後守 平野大炊助  
 服部采女正 赤松左兵衛尉  
 宮部肥前守 木下備中守  
 生駒主殿頭 勢田掃部頭  
 多賀谷大膳大夫 芝山監物  
 前野但馬守

長谷川右兵衛尉  
 早川主馬首  
 伊藤丹後守  
 蒔田相摸守  
 矢野下野守  
 石川出雲守  
 市橋下總守  
 矢部豐後守  
 稻葉兵庫頭

古田兵部少輔  
 池田備中守  
 高田豐後守  
 安威攝津守  
 溝口伯耆守  
 中川右衛門大夫  
 九鬼大隅守  
 尼子宮内大輔  
 富田左近將監

石田治部少輔 大谷刑部少輔  
 脇坂中務少輔 佐藤隱岐守  
 服部土佐守 高島石見守  
 石川備後守 石田隱岐守  
 松浦讚岐守 薄田若狹守  
 青山伊賀守 明石左近  
 鹽屋隱岐守 南條伯耆守  
 牧村兵部大輔 古田織部正  
 松岡右京進 柘植左京亮  
 木村常陸介

山崎右京進  
 片桐東市正  
 谷出羽守  
 小出播磨守  
 寺澤越中守  
 別所主水正  
 川尻肥前守  
 新莊駿河守  
 蜂屋大膳大夫

片桐主膳正  
 生駒修理亮  
 田中石見守  
 石川伊賀守  
 村上周坊守  
 山崎志摩守  
 岡本下野守  
 奧山佐渡守  
 津田隼人正

雜色左右三十人  
 隨身

左  
 毛利民部大輔  
 野村肥後守  
 木下左京亮



○樹もち 樹を持つ人。樹は鞍のくびきを支へ又は車に垂降する階臺にするもの  
 ○しき持 棧持。牛車の乗降に用ゐる梯子を捧ぐ持つ人。  
 ○牛童 牛車の牛飼の童。  
 ○水干 狩衣の一種の童。  
 ○紅結 紅無地染の絹布。  
 ○頭に面云々 牛の頭に面を被せ兩方の牛角に金箔を塗りのべ。  
 ○加賀少將 本文加賀少將にあつたが聚落第行幸記によつて正した。  
 ○御侍侍從 聚落第御幸記に「御衆侍從とし或誤、義康」ミあり。

時田主水正 中島左兵衛尉 速水甲斐守  
 布衣  
 一柳右近大夫 小出信濃守 石田木工頭  
 三行 烏帽子假衣也  
 牽替牛二、榻もち、しき持兩人。牛童兩人、髪を下け眉をつくり、赤裝束水干なり。牛車紅結に縫物して著て、頭に面をかけ、兩角金箔をもて延べ、脊は淺葱の絲にてこれを織り、紅の緒をもて著けて、牽替牛同前、昔の例にあらず、御舍人御車副左右にあり、御脊持、烏帽子著數百人三行に列す、唐傘持。

此次

- |          |                     |
|----------|---------------------|
| 加賀少將利家朝臣 | 雜色。馬副。布衣。烏帽子著。傘持以下。 |
| 津侍從信兼朝臣  | 同前。                 |
| 丹波少將秀勝朝臣 | 三河少將秀康朝臣            |
| 三郎侍從秀信   | 侍從                  |
| 金吾侍從     | 左衛門侍從義康朝臣           |
| 東郷侍從秀政朝臣 | 松賀島侍從氏郷朝臣           |
| 丹後侍從忠興朝臣 | 三好侍從信秀朝臣            |

○唐織 唐土から渡來した織物。  
 ○浮織 細かな模様を靨なごの地に浮き出して織つたもの。  
 ○流紋 羽二重に似た粗い生織物。  
 ○吳地蜀江 古、支那吳の國から織工が渡來し、蜀の成都から上品の錦を産出したので並べて對句とした。  
 ○管鼓 笛太鼓の類で、音楽をいふ。  
 ○殊勝 殊にすぐれたこと。  
 ○設けの御所 御慶應申す爲に御迎へする御所。  
 ○關白殿 秀吉。  
 ○牛車 供奉として園簿に加はつた秀吉の乗つてゐる牛車をいふ。  
 ○御輿寄 御車寄。輿車を寄せて邸内に昇降する所。  
 ○四足の門 左右二本の大柱の前後に袖柱ある門。

河内侍從秀頼朝臣 敦賀侍從頼隆朝臣  
 越中侍從利勝朝臣 源五侍從長益朝臣  
 松任侍從長重朝臣 岐阜侍從照政朝臣  
 曾根侍從貞通朝臣 豐後侍從義統朝臣  
 伊賀侍從宣次朝臣 金山侍從忠政朝臣  
 井伊侍從直政朝臣 京極侍從高次朝臣  
 龍野侍從勝俊朝臣 土左侍從元親朝臣

つきくの侍は數を知らず。馬上の裝束は一日はれとて、五色の地に四季の花鳥を唐織浮織流紋縫箔にして、吳地蜀江の綾羅錦綉目もあやなり。吉野山の春のけしき、龍田川の秋のよそほひもいかゞと覚えはべり。五畿七道より上りつどひたる貴賤老少、かまびすしき事もなく、聲をしづめて鳳輦を拜し奉る。途すがら管鼓のひびき何となく殊勝にして、感歎肝に銘じたり。昔の行幸の設けの御所は總門の外まで出で向ひたまふ 今の儲けの御所は關白殿供奉の役なれば、鳳輦聚樂の中門に入らせ給ふ時、牛車はまだ禁中を出で給はず。然れば鳳輦御輿寄にかきつけ、右府晴季公御簾をあけ下御ならせ給ふ時、萬里小路光房御裾を取り、やがて内へなし申しながら、未だ御座へは著かせ給はず、上達部殿上人便宜の所にやすらひ給ふに、殿下の御車、四足の門に入らせ給ふ。御車寄せて下り給ひ、



○まうのほり 参上  
 ○御殿の御装束 御殿のかざりつけ。  
 ○竹園 竹の園生。皇族。  
 ○攝家 攝政關白に任ぜらるべき家柄。  
 ○清華 大臣大將太政大臣になるべき家柄。  
 ○初獻 酒宴で最初の獻杯。聚樂第行幸記には「初獻の御かはらけより御氣色あり。」とある。  
 ○天杯天酌 主上から直接杯酒を賜はるこゝ。  
 ○水殿雲廊云々 陸龜蒙の詩に「花飛蝶駭不愁人、水殿雲廊別置春、曉日觀粧千騎女、白櫻桃下紫綸巾。」  
 ○大殿油 大殿にこそ油火の燈。  
 ○御遊 管絃の御遊。今様歌等の總稱。  
 ○大平樂 雅樂の道調曲の一。破陣樂。

まうのほり給うて、御座に著かせ給ふ時、殿下裾を後にたゝみ、御前にかしこまり御氣色をとり、暫しさぶらはせ給ひて、罷り退き給へば、御殿の御装束を改めらる。頓て殿下又参り給ひて、各著座の儀式あり。

御配膳衆

主上御前 三條宰相中將公仲卿  
 六宮御前 勸修寺右少辨光豊

關白殿、竹園、攝家、清華等御前西洞院時慶朝臣。五條爲良朝臣、四辻季滿朝臣、飛鳥井雅繼朝臣、六條有親朝臣、橋本實勝朝臣、五辻元仲朝臣、月卿前水無瀬氏成朝臣、土御門久賢、四條澄宣、富小路秀直なり。初獻の御かはらけ御氣色あり。三獻には天杯天酌、五獻には盆香合御進上、七獻には御劔御進上、とりく御肴、くだ物、あつもの、金銀の作花、折臺の物には蓬萊の島に鶴龜のよはひ松竹のみさをなど行末の千年を祝ひそなへたる物なり。御酒宴はて西おもての御几帳あけさせ給へば、庭の植木など繁りあふ若葉の中に、おそ櫻つ、じ山吹などの咲き残りたるに、てふ鳥のこゑ夕日の影にたはぶれていと興ありとぞ。水殿雲廊別にはるをおく、誠に長生不老のたのしびを集むるものなり。暮れはつる方々に大殿油か、けそへて、御遊とぞ聞えける。御人數十四五人、一番五常樂、二番鄂曲、三番太平樂、箏のこと御所作、その外一條殿、四辻前大納言、庭田中納言、四辻

○發聲 音頭。  
 ○德是云々 新撰朗詠に收めてある後江相公(大江朝綱)の句で、早春侍内宴賦聖化萬年春應制詩序の文で本朝文粹に出てる。  
 ○天津乙女云々 天女も天降る時たご思はれた。  
 ○そのかみ 昔。  
 ○罷り申し 御前引下つて。  
 ○母屋 寢殿の廂の間の内。  
 ○夜のおまし 夜の御座。  
 ○儲けの御所 儲の御前とあつたが聚樂行幸記によつて正した。準備を整へ歡待し奉る御所。  
 ○御すさみ 御慰み。  
 ○沙汰 處置し命令する。  
 ○獻々の内 一獻二獻何獻と杯を重ねられる間。

中將、飛鳥井中將五人、琵琶伏見殿、菊亭右府、同三位中將三人、笙大炊御門前大納言、笛伯三位、五辻左馬頭兩人、鄂曲四辻中納言、持明院中納言發聲なり。五辻左馬頭三人、德是北辰椿葉陰二改、高尚南面松花色十回、此の句を朗詠し給ふなり。色々の調べの中に就いて、主上の御爪音殊の外にこそ聞えければ、花に囀る春の鶯、梢に吟ずる秋の蟬、夕の松風曉の水のながれ、寂々颯々と心もすみわたる。天津乙女くだりつべき折からとぞ。曲終りて猶感情深く龍顔わかやかなり。御心にも斯様の珍らかなるすさびは、そのかみもあらじと悦びの眉をひらき給ふ。

さ夜更くるま、に殿下も罷り申して寢殿に入り給ふ。母屋の夜のおましの設けいと懇なり。つぎの日は公卿疾く参り給ふなり。儲けの御所には、かねて三日の行幸と定められしかども、あまり御残り多し。せめて五日留め奉るべし。然るをかかるめでたき御代に逢ひ奉る事、天の許せる道にや。此の度の行幸後のためしにもと思召し、朝廷いよく榮ゆべき御願なり。さて今日は和歌の御會と定められつれども、御逗留の閒翌日までさし延し給ふ。御殿もゆるくとして何となき内々の御すさみなどなり。殿下も何かの事とりませ沙汰し給ふとて、申の刻ばかりにまうのほり給ひぬ。獻々の内に進物のもの、

- 一、御手本 即之千字文。金の折枝につくる。
- 一、御繪 三幅一對。



○門跡 皇族攝關の人の入室する寺。  
 ○御引物 饗宴の時の贈物。  
 ○伏見殿 伏見宮邦輔親王の御子邦房親王。  
 ○九條殿 藤原兼孝。  
 ○一條殿 藤原内基。  
 ○近衛殿 藤原前久。  
 ○菊亭右府 右大臣菊亭(藤原)晴季。  
 ○尾張内府 織田信雄。  
 ○堆紅 堆朱。  
 ○領知 知行する土地。  
 ○御折紙 進上物の目録書。  
 ○殿下 秀吉。  
 ○朝け 夜明け。  
 ○日の色 白いろこあつたが樂樂行幸記によつて訂した。  
 ○檜皮の軒 檜の皮で葺いた屋根の軒。  
 ○琴筑 琴や箏。  
 ○懷紙 和歌を正式に書いた紙。  
 ○下腐 身分の低い者。

一、沉香 百斤。方五尺のまはりの臺に紅の緒を以て網をかけ、六人してかきてまゐる。  
 此の外攝家をはじめ、諸門跡清華達へ御引物あり。伏見殿、九條殿、一條殿、近衛殿、菊亭右府、尾張内府、此の御衆へ御繪二幅、虎皮一枚、盆紅、小袖三重、御太刀一腰、これに領知の御折紙を添へてまゐらせらるゝなり。此のほかの衆へ御小袖二重、御太刀一腰、知行の御折紙右に同じ。各歡喜したまひあかず、猶更過ぐるまで御酒宴、殿下立ち給ひて後いよく御土器重なりて皆酔ひをつくし給ふなり。三日目十六日朝けより日の色かき曇り雨にやあらむといふよりはや一つ二つこほれ落ち、しめやかに降り出でて檜皮の軒をつたふ玉水の音、昨日の琴筑のひゞきを残すかとおほめかれてもの靜かなり。昨日和歌の御會、折にあひて最も殊勝となむ。懷紙は下腐よりおかれける。

- 一 番 大和 大納言
- 二 番 駿河 大納言
- 三 番 鷹司 大納言
- 四 番 久我 大納言
- 五 番 日野 新大納言
- 六 番 烏丸 大納言
- 七 番 中山 大納言
- 八 番 大炊御門前大納言
- 九 番 勸修寺 大納言
- 十 番 西園寺 左大將
- 十一 番 四辻前大納言
- 十二 番 飛鳥井前大納言
- 十三 番 尾張内大臣
- 十四 番 徳大寺前内大臣

○披講 歌會で歌をよみ上げること。  
 ○御座配 歌會の御座の配置。  
 ○法中衆 多くの僧侶。此處では仁和寺宮聖護院青蓮院など。  
 ○近江中納言 豐臣秀次。  
 ○菊亭三位 中將藤原秀持。  
 ○花山院 宰相藤原家雅。  
 ○備前宰相 浮田秀家。  
 ○尾張内府 織田信雄。  
 ○駿河大納言 徳川家康。  
 ○大和納言 羽柴秀長。  
 ○規模 名譽。面目。  
 ○用意 たつし 用意たりし。  
 ○献々の間 一獻二獻と數度獻を重ねられる間。  
 ○麝香臍二十斤 聚樂第記によつて斤の字を補ふ。

- 十五 番 菊亭 右大臣
- 十六 番 近衛左大臣殿
- 十七 番 梶井 宮
- 十八 番 妙法院殿
- 十九 番 二條前關白殿
- 二十 番 青蓮院殿
- 二十一 番 一條准后
- 二十二 番 九條准后
- 二十三 番 聖護院准后
- 二十四 番 仁和寺宮
- 二十五 番 伏見殿
- 二十六 番 室野入道准后
- 二十七 番 六宮
- 二十八 番 關白殿

主上御懷紙は各別にあり。中納言參議以下の懷紙とりあつめて、別にかさねておかれ侍る。多人數のまゝ披講なり難き故なり。御座配以下懷紙のかさね様など不同の事は、去る天正十三歳七月親王准后かく座の由仰せ定められけり。法中衆も昨今兩日の御參會なり。御相伴の時は近江中納言、菊亭三位、花山院、備前宰相、席末に陪したまふ。蓋し尾張内府、駿河大納言、大和納言、近江中納言、備前宰相、此の五人の事、今度清花たるべき旨敕許によりて即ち御相伴なり。尤だ以て、規模たる者か。飛鳥井大納言、四辻大納言、勸修寺大納言、中山大納言、烏丸大納言、日野大納言等は座に著き給はず、今日は九獻用意たつしかど、長座なれば七獻にて侍し、献々の間御進物の事、

黄金百兩 金欄二十卷 麝香臍二十斤



○建蓋 天日的一種

○奉行 歌會の事務を取扱ふ役。

○題者 詩歌會の題を選定する役。

○讀師 詩歌會の懷紙を整理し讀師に渡す役。

○講師 披講の時詩歌をよみあはゆる役。

○發聲 歌會披講の時初めて讀み上げる役。

○講頌 歌會の時歌を吟詠する役。

○大高檜紙 横に綴ある大形の紙の一種

○三行三字 懷紙に短歌を書くに三行と最後の假字三字を四

行めに書くが正式。

御小袖百。

右如レ此

黄金建蓋臺同じく黄金。銀の盆にすう。

御馬十疋。

やがて披講はじまる。

奉行

中山大納言

題者

飛鳥井前大納言

讀師

菊亭右大臣

講師

中山頭中將

發聲

飛鳥井前大納言

講頌人衆

四辻前大納言

西園寺大納言

大炊御門大納言

烏丸大納言

日野大納言

久我大納言

持明院中納言

廣橋中納言

伯三位

飛鳥井中將

園少將

五辻左馬頭

詠寄松祝和歌

御製大高檜紙そのまゝ三行三字御宸筆をそめらるゝ。

わきてけふ待つかひあれや松が枝の世々の契りをかけて見せつゝ

春日侍三行幸聚樂第二同詠寄松祝和歌

關白豊臣秀吉三行三字大高檜紙一寸つゝめ書レ之。

よろづ代の君が行幸になれくむみどり木高き軒の玉松

關白六宮佐丸はしつくり御製に同じ。

契りあれや君待ちえたる時津風千世をならせる庭の松枝

中務卿伏見殿邦房親玉

治まれる時とはしるし松が枝の梢によばふよろづ代の聲

准九條殿三宮兼孝

浪風も吹きしづまりて松高き大和島根の四方の浦々

准一條殿三宮内基

相生の松の縁もけふ更にいく千代經べき色も見すらむ

從一位藤原昭實

日にそひて木高き庭の松がえのいかに千歳の後は榮えむ

左大臣藤原信輔

君も臣も心あはせて治むてふ代のこゑしるし庭の松風

○准三官 天子の御生母で皇后でない方准母攝關大臣の勳功あるものに特に授けられた稱號。



右大臣 藤原晴季  
秋津洲の外まで靡く國つ風松にうつらで聲呼ばふらし

從一位 藤原公維  
深緑千代に八千代の色添へてけふぞ見えたる庭の松がえ

内大臣 平 信 雄  
龜の上の山なりけりな庭廣き池の鳥根の松の木深き

正二位 藤原雅春  
君も人も今日を待ち得て祝ふなりかねて千歳を松のことは

正二位 藤原公遠  
八隅しる君がよはひもさゞれ石の巖の松は千代の行末

右近衛大將 藤原實益  
限りなき君が八千代や籠るらむ生きそふ庭の松の緑に

權大納言 藤原晴豊  
代々を経む君が恵みの深きいろを松の緑にかけて見すらむ

正二位 藤原經頼  
殊更に調べもけふは松風もこたへにけりなよろづ代の聲

○八隅しる 安見知  
やすみししさいふ枕  
詞をよみちがへたの  
で「君」につける。

○天地も 天も地も  
ごあるが聚樂第行幸  
記によつて訂す。

權大納言 親 綱  
けふよりは臺の竹の世々かけて君たちなれむ宿の松が枝

權大納言 藤原光宣  
動きなき代々のためしを引き植うる岩根の松の色は變らじ

權大納言 藤原輝資  
天地も動きなき世に相生あひまひの松に小松の繁りそふ影

權大納言 源 敦通  
あめつちの恵みもそひて君が代の常磐の色や松に見ゆらむ

左近衛大將 藤原信房  
けふよりや砌の松のかけにしも數へむ君が千代の行末

權大納言 源 家康  
緑たつ松の葉ごとこの君のちとせの數を契りてぞみる

權大納言 豊臣秀長  
かけてけふ行幸をまつ藤浪のゆかり嬉しき花の色かな

中納言 藤原基孝  
深緑立ちそふ陰は雲居まで千とせ榮えむ庭の松が枝



植るしより君が千歳を契りてや松に變らぬ色を見すらむ

庭田 權中納言 源 重通

庭にまづ二葉の松を移しおきて君が千歳の行くへかぞへむ

正親町 權中納言 藤原兼勝

君が經む千代の根ざしとかねてより植るし緑の松ぞこ高き

坊城 式部大輔 菅原盛長

治まれる御代ぞと祝ふ松風も民の草葉も猶なびくなり

近江 權中納言 豊臣秀次

けふよりの君が千歳にひかれてや松も操のかけを並べむ

菊亭 三位中將 藤原季持

限りなき君が齡にひかれなばみぎりの松も常磐ならまし

花山院 參議 藤原家雅

時にあひて榮ゆる松の千歳をば君が爲にぞ契りおかまし

正親町 參議右近衛中將藤原公仲

夜晝と神のまもりに庭の松ときはかきはの梢なりけり

吉田 左衛門督 卜部兼見

君と臣とかけをならべて相生の幾千代へなむ宿の松が枝

白川 神祇伯 雅 朝 王

君も名をあかす見るらむ動きなきいはねの松を庭に移して

高倉 右衛門督 藤原永孝

松が枝の繁りあひたる庭の面につらなる袖もよろづ代や經む

備前 參議左近衛中將豊臣秀家

幾千代も常磐なるべき松が枝の色をみぎりに契りおこな

萬里小路 藏人頭右大辨 藤原光房

千歳經む君が齡を松影や近きまもりのかざしならまし

西洞院 左近衛權中將 藤原慶親

君がため植るし砌の姫小松こ高きかけや名をも見てまし

右兵衛佐 平 時 慶

君が經む齡はしるし鶴のすむ松の根ざしのよろづ代の影

四辻 左近衛權中將 藤原季滿

天が下惠みあまねき木々になほ松は千とせの影を見せけり

五條 大内記 菅原爲良



君が代はつきぬ言葉のちりひぢの山となりなむ宿の松が枝 飛鳥井 左近衛權中將 藤原雅繼

かけ高きみぎりの松にたちそひて君がちとせの春秋や經む 六條 左近衛權中將 源有親

末遠き契りを松にかけまくもかしこき御代の榮えなりけり 橋本 左近衛權中將 藤原實勝

千とせ經む松にぞ契る敷島の道ある御代の行方しるしも 五辻 左馬頭 源 允 仲

君が代の限りは知らじ今よりは千歳を松のときはかきはに 水無瀬 左近衛權少將 藤原氏成

よろづ代のたねを心にまかせてやまつに小松の茂りそふらむ 藥院 侍從 藤 原 秀 隆

相生の松に契りて幾千代か君がよはひはつきじとぞおもふ 三條西 左近衛權少將 藤原實條

樂しみを聚むる中に言の葉の榮ゆる色や松に見ゆらむ 園 左近衛權中將 藤原基繼

植ゑおきし松もかしこき我が君のちとせ變らぬ色を思へば 葉室 藏人左中辨 藤原頼宣

けふよりやなほ色そへて松の葉のつきぬためしを君に契らむ 土御門 左馬助 安倍 久 脩

移し植ゑてこ高くなれる松が枝にいくよろづ代をかけて契らむ 日野 左少辨 藤 原 資 勝

我が君の千歳をへてや松が枝の四方に榮ゆるかけもなほ見む 勸修寺 右少辨 藤 原 光 豊

影たかき砌の松の風だにも枝をならさぬ御代にもあるかな 鳥丸 侍從 藤 原 光 廣

常磐なる松にならひて君が經む千代の行方のしるきけふかな 甘露寺 權右少辨 藤 原 經 遠

あひにあふ砌の松の色そふも君が千歳のかざしならまし 庭田 右近衛權少將 源 重 定

原 宮内權大輔 藤原資淳



仰ぐてふ君が千歳を琴の音にしらべそへたる庭の松風

廣橋侍従 藤原 總光

君が代は限りあらじとかけ高き松に小松やうへもそふらむ

正親町右近衛權少將 藤原季康

色かへぬ松をためしに我が君の千代に八千代を契る行末

左近衛權少將 藤原爲親

色かへぬ松にぞ契る幾千代もつたへたゞしき言の葉の道

吉田侍従 卜部 兼治

動きなき巖になる、松の葉や苔むす庭の色をそふらむ

左近衛少將 藤原宗澄

千代經べき松に契りてけふよりや葉變へぬ色を幾歳か見む

左近衛權少將 藤原隆富

庭の面に植ゑおく松の若緑君が恵みに千代も經ぬべし

侍従 藤原 實政

ひさかたの雲居の庭の松風も枝をならさぬ今日にあふかな

右衛門權佐 藤原秀直

けふよりも千歳經ぬべき行末を君に契らむ庭の松が枝

○右近衛權少將  
少輔とあつたが聚樂  
第行幸記によつて訂  
した。

よろづ代はけふを始めて契りおきて植うる小松の末ぞはるけき

藏人式部大丞 清原秀賢

上下の心ひとしき幾とせも君をみぎはの松に契らむ

藏人中務大輔 小槻孝亮

君が齡いかで數へむ百枝ある松の葉ごとに千代の籠れば

正六位上 菅原在道

天正十六歲四月十六日和歌御會

植ゑおける砌の松に君が經む千代の行方ぞかねて知らる、

加賀左近衛權少將 豊臣利家端作

つの侍徳 平 信 兼

道しある時も今はた相生の松の千とせをいくよかさねむ

丹波右近衛權少將 豊臣秀勝

百敷や四方に榮ゆる松が枝のかはらぬ影をたのむもろびと

三河左近衛權少將 豊臣秀康

玉をみかく砌の松はいく千歳君が榮えむためしなるらむ



君がため植ゑおく庭の松の葉のつもるを千代の數に定めむ  
左衛門侍從 豊 臣 義 康

代々を経ば植うる梢に白雲の常にかゝらむ庭の山松  
東江侍從 豊 臣 秀 一

霜の後なほあらはれむ松が枝の千代の緑や今繁るらむ  
北莊侍從 豊 臣 秀 政

仰ぐ代の人の心のたねとてや千歳を契る松の言の葉  
松賀崎侍從 豊 臣 氏 卿

君が代の長きためしは松に住む鶴の千歳をそへて數へむ  
丹後侍從 豊 臣 忠 興

君が代に植ゑていくたび契らましみぎはの松のけふの千世を  
三吉侍從 平 信 秀

千代を経る松は常磐の陰ながらわきてけふこそ色を添ふらめ  
河内侍從 豊 臣 秀 頼

君を祝ふためしに植ゑし住吉の松も久しき代々の行末  
敦賀侍從 豊 臣 頼 隆

數へ見む千歳を契るやどにしも松に小松の陰をならべて  
越中侍從 豊 臣 利 勝

淺からぬ縁もしるく年を経むはなの都に相生のまつ  
源五侍從 豊 臣 長 益

年経ても變らぬ庭の松の葉に契りかけおく行方かたふな  
岐阜侍從 豊 臣 照 政

君が代の深き恵みを松の葉のかはらぬ色にたぐへてぞ見む  
會根侍從 豊 臣 貞 通

影高き松に曳かれて君が代の久しかるべき行方しるしも  
豊後侍從 豊 臣 義 統

影高き松にたちよる袖までも千歳經ぬべき九重のうち  
伊賀侍從 豊 臣 宣 次

九重の松の根ざしの深ければ遠き國までときはかきはに  
金山侍從 豊 臣 忠 政

緑さへ年にまさりて松影の深きや千代のねざしなるらむ



侍從 藤原直政  
たちそふる千代の緑の色深きまつの齡を君も經ぬべし

侍從 豐臣高次  
二葉より庭に小松を移し植ゑて末の千歳のしるく見えけり

侍從 豐臣勝俊  
よろづ代もたまの砌の松の色はときはかきはに君や榮えむ

侍從 秦元親  
豊かなる都のうちの松風に沖つ鳥根も波靜かなり

天正十六歲四月十六日和歌御會

沙門 常

年になほ正木のかつら長き世にかけてぞ契る宿の松が枝

千歲經む君がよはひをけふはなほ色に見せたる庭の松枝

移し植うる庭は高砂すみの江も同じ千歳の相生の松

治まれる代になびきあふ松風の聲にぞしるき君が千歲は

治まれる君が代なれば桐にすむ鳥もみぎりの松にうつらむ

治まれる世は久方の空にすむ風さへ松の枝をならさぬ

天正十六歲四月十六日

和歌御會

○披講まして 披講ありての敬語。  
○萬歲樂 舞樂の曲名。平調。  
○拍鉦 舞樂の曲名。  
○薩王 舞樂の曲名。  
○納蘇利 舞樂の曲名。  
○高麗樂、壹越調名。唐樂、舞樂の曲名。  
○探桑老 舞樂の曲名。唐樂、舞樂の曲名。  
○百鳥蘇 舞樂の曲名。高麗樂壹越調名。  
○還城樂 舞樂の曲名。唐樂、舞樂の曲名。  
○拔頭 舞樂の曲名。瓜紋、舞樂の曲名。  
○瓜紋 舞樂の曲名。所をつけたのをいふ。  
○羯鼓 樂器の名。舞樂に用ゐる。  
○鉦鼓 樂器に用ゐる。  
○紋紗 模様を織り出した紗。  
○鷄冠 烏甲、鳳凰の頭に象つた舞樂用の兜。  
○石帶 東帶の時袖の上にすゑる帯。  
○絲鞋 絲で作つた靴。舞人が履いた。  
○長慶子 雅樂平調曲の一。  
○香合 香料を入れる器。

披講まして主上入御なされ侍り、各御膳參る。とりく御酒宴、夜半の鐘に至り御退出とぞ。四日目十七日舞御覽、一番萬歲樂、二番延喜樂、三番太平樂、四番拍鉦、五番薩王、六番納蘇利、七番探桑老、八番古鳥蘇、九番還城樂、十番拔頭、奉行四辻前大納言、左右樂屋に五間の幕瓜紋、樂屋の前におほ大鼓あり。羯鼓、鉦鼓、笛、篳篥、調子をとてまづ亂聲をふき、振鉦をはじめてより萬歲樂に移る。裝束は赤地の紋紗の袍、唐錦の袴赤地の金襴のうちかけ、鷄冠、石帶、絲鞋以下美麗なり。探桑老は天王寺の伶人これを舞ふ。天子より下されし白き御衣なり。面ならびに鳩杖、海士のたきさしといふ笛、これ等はみな敕物なり。舞已後長慶子にて吹き納め退散なり。扱御座をあらためて御かはらけまる。七獻過ぎて、北の政所殿より金吾侍從を御使とて進物あり。御小袖二十重、黄金五十兩砂金袋に、香爐一盆、香合紅、麝香臍二十、高檀紙十帖、右北の政所殿より進物なり。御小袖十重、黄金五十兩、砂金袋に、香爐一盆、香合紅、麝香臍十、高檀紙十帖、右大政所



殿より進上なり。さて、大殿油まらせて、御心閑かなる御すさびなれば、院御所より御短冊を送りまらせらる。

よろづ代にまた八百よろづを重ねてもなほ限りなき時はこの時  
殿下よろこびに堪へたまはず、やがて御返事、

言の葉の濱の眞砂はつくるとも限りあらじな君が齡は

主上を始め奉りおのく御當座あり。五日目十八日還幸なり、殿下まゐり給ふ。獻々御悦びのことどもあり。やがてまた行幸御申沙汰あるべく、御あらまじなどこまやかに契らせ給ひ、午の刻ばかりに鳳輦を寄せさせ給ひて、行幸の如く、前驅より次第々々に香をひき、馬上に轡蔓を勒し、御心閑かなる還幸なり。行幸の時は見ざりし長櫃三十、板摺の金に至るまで菊の御紋あり。覆は唐織なり。前驅の前に奉行をつけて遣はさる。これや此の程の進上物ならむ。樂人還城樂を奏す。禁中へ入らせ給ひて、いやましの御壽なのめならざる御氣色なり。はれの御膳の儀式あり。それより殿下も還御ありて、踏舞に堪へたまはず、まことに天長く地久しく、御代たもち給ふべき福ひなりと、皆人仰せ奉るもことわりなり。

- 院 正親町上皇。
- 殿下 秀吉。
- 主上 後陽成院。
- 御當座 即席の御吟詠。
- 御悦び 御禮言上。
- 御申沙汰 申し行はれること。御處置。
- 御あらまし 御豫定。
- 鳳輦を寄せ 御車寄に寄せ。
- 香をひき 徒歩の人は香を運はせ。
- 轡蔓 手綱。
- 板摺の金物 唐櫃の角々や隅々につけた金物。枝金物とあつたが聚樂行幸記によつた。
- 奉行を云々 取扱係をつけて前驅の前に進ませられたこれが此の度の進上物。
- 還城樂 舞樂の曲名。
- 晴れの御膳 宮中で公事の盛宴に召される御膳。

卷四

清見瀉

- 北野社 京都北野天神社。天徳三年菅原道真の廟を建てたに創まる。
- 仙の宗易 茶人。千家流の祖。號は利久。堺の人。茶を紹興に學ぶ。後讓せられて天正十九年死を賜はる。年七十一。
- 茶屋の云々 茶室ができるべき所。
- 工 くふう。
- 金輪 ごとく。
- わらふた 蓋蓋。蓋管などを圓く編んだ座褥。
- 云へは云々 實際は言葉にも盡されぬが、列記する言葉で表はせる様に思はれるから仰つて漏らした。
- 墨跡 筆跡。書畫。
- 唐物大和の 唐の大和の誤りか。
- 回々 各目。

同天正十六年の秋の末、秀吉公北野社にして大茶湯といふ事をなし給へり。固より茶湯會を好み、宇治里の茶を擇び、唐の壺の形よきを調へもてあそび給へり。其の頃その道に名ある仙の宗易とて和泉の堺のもの、頭さし出し時めきしに、彼に其の道を學ぶもの數知らず。上の好むこと下したがふならひなんめれば、その様いはすとも知るべし。北野の御社のめぐり馬場の左右、松の木の下、梅の木陰、岩の狭間、千尋の陰などに、茶屋のなるべき所をはからひ、茶の志のある人々に興へて、その工に隨ひ茶屋造りならへり。或はかや茸に柴の垣し、繩のすだれ竹のあみ戸、或は苦茸に檜垣し渡し、或は蘆茸のよしの垣、或は篠ぶき、様々のしつらひ石を金輪にして藁の筵を敷き、松の下枝より繩をおろして茶釜を吊り上げ、瓶を割りて水を湛へ、わらふだをしき、心々のいとなみ、云へば言の葉に及ぶ様なれば、なか／＼洩らしつ。傳へ持ちし墨跡、花瓶、茶壺、花入、水さし、茶椀、茶しやく、様々の茶の器物、唐物大和の價高き物ども、この時面々とり出し、この會なれば遠き國の人まで、この道にすけるは我も／＼と上り集まりぬれば、凡そ千人に餘れり。



○えならぬ 言ふに  
いはれぬ。一通りな  
らぬ。  
○座鋪 ざしき。  
○經堂 經典を藏め  
おく堂。北野社の南  
に北野神宮寺がある  
その經堂たらうか。  
○地葺 屋根板を地  
上で葺いて屋根に取  
りつけるのをいふ。  
こ、はこけら葺。  
○松かさ 松ぼつこ  
り。  
○炭がま 炭を作る  
竈。  
○こがし 穀類を炒  
り焦し燻いて粉にし  
たもの。むぎこがし  
○のしりごよみ  
やかましく履いで。  
○あかれ 別れ。  
○高きも賤しきも  
貴賤ごも。  
○白砂 白砂を敷い  
た所。

秀吉公は拜殿をえならぬ屏風にてかこひ、其の頃集めおき給ふ茶の器物ども取出し、その道に長げるもの五人して、五所に座鋪かまへて、この度此の會に出でし輩、六七づ、組をなして、残らず茶を吞ませらるゝ。其の間に秀吉公は作り並べる人々の茶屋どもを見廻り給ふ。經堂のかたはらに地葺の茶屋を構へ、松かさをふすべ、炭がまの煙の如くたちのほるあり。この前に行きて見給へば、五十許りの法師さすが此の道にすける様なり。「茶やある。」と宣へば、「持たず。」とてふくべにこがしを入れ、松の枝に掛けしを取出し獻れば、いと感じ給へり。終日かくの、しりどよみて酉のさがりばかりに、秀吉聚樂の館に歸り給へば、つどひし人々も、日を経て心をつくし、工にこしらへし茶屋ども、みな取拂ひてあかれ行きけり。後が後までの人の口ずさみに先立ちける。

同十七年の春秀吉公思ひ給へるは、我今日本を心のま、にはかり、よろづ乏しからず、金銀多く積み置きても何にかはせむ。用るざればこれ唯石瓦を蓄ふるに異なるべからず。年頃隨へる從者共に配り與へて、其の家をも賑はせむとて、高きも賤しきも宮仕する人々書きしるして、その人の品により金銀ほどらひを分ちて定め、聚樂南の三の門の中に、二町餘りの白砂の上に隙間なく敷いくばく限りなく臺に据ゑ並べ、其の人の名をおしつけ、かねて定めし様にひとり／＼出でて、此の金銀を請取り行きけり。いにしへより傳へ聞かざる事になむありけると古人なども云ひあへりし。人となりて誰か富を好まざらむ。多き

○北條美濃守 伊豆  
菰山の城主北條氏規  
○北條氏直 小田原  
の城主北條氏政の長  
子。  
○早雲 伊勢長氏。  
菰山北條氏が絶えた  
ので北條の姓を冒し  
入道して早雲といふ  
○今川 駿河今川義  
忠。  
○傳へ 仕へか。  
○成り出 出世する  
○氏康 早雲の長子  
氏綱の長子。  
○上洛堅くあらじ  
決して上洛はしまい  
○軍に及ぶ云々 戦  
争するやうになつて  
も何ごもしようがな  
い。  
○のりごみ 宣言。

うへにもなほ多く、集むる上にも集めてこそほしからめにて、寶を散らし施して人を富まさむとの志、有り難き業になむありけると人々いさみあへり。其の秋の初めつ方北條美濃守と云へる者上洛しけり。これは北條氏直主の伯父なりけり。

其の頃北條氏直といへるは東の國七つ許り從へ、相摸の小田原にありけり。北條時政が末にもあらず、早雲とてありしが、かれもかの國の者にはあらで、都あたりの者なりけるが、從者一人二人許りにて駿河國にさすらへ行き、今川ながしに傳へありしが、よろづさかしき男子にて今川氏の心にかなひ漸く成り出でしが、伊豆國に移り、いかゞした、めけむかの國を隨へ、二年三年の間に相摸國を心のま、にして、相摸の小田原にうつり住みて、猶武藏上野に志をやりけりとなむ。その太郎氏康といふ男子、父にも劣らず賢く、武士の道にたけく謀ありければ、彼が時に武藏、上野、上總、下總などまで從へ、一族廣く富みの、しること思ひやるべし。其の太郎氏政老いにもいくばく至らずで太郎氏直に世を譲りしとなむ。秀吉公、「此の國に住みながら、都に上り仰せごと承らで、いかでかあらむ。」と云ひおくらなければ、「我が身上らむことはたやすくあらまし。」とて、氏直伯父なりし北條美濃守を都にのほせけり。秀吉さまもてなし、頓て氏直上洛すべしとてかへし給へり。其の冬の初め、「氏直上洛すべし。」と又云ひやり給へど、我が勢を頼めるにや、「上洛堅くあらじ、たとひ軍に及ぶとも力なし。」とて、のりごと云ひてありければ、この上は軍に



○黄瀬川 駿河國沼津の東南から海に入る。東岸に黄瀬川宿があつた。  
 ○大様 氣のきかぬほんやり。  
 ○なでふこも 何といふ事。  
 ○我が好き方 自分の都合のよい方。  
 ○歌枕 昔から歌に上まれる名所。  
 ○空しく 別に歌を詠むこともなく。  
 ○駿河の府 駿河の國府。今の静岡。  
 ○草雉の宮 駿河國久能山の麓、草雉神社。  
 ○清見が關 駿河國興津の西、今清見寺のある所が關址かといふ。  
 ○三保 駿河國。

及び北條氏悉くかうべを切るべしとて、明年の春小田原に陣をなすべしと冬より定め、兵ども催し給ふ。十八年の春二月去年の定め如く、兵ども次第に東に向ける。先陣既に黄瀬川沼津に著きぬれば、後陣の人は美濃、尾張にみち／＼たり。北條氏も防ぐべき手だて様々構へけりとなむ。されど氏政、氏直、親にも祖父にも違ひ、心大様に愚かなれば、東にて勢ひありて人の恐れしに、いかで秀吉といふとも、なでふことのあるべき、箱根の山をば赴き越し、遠き道の程に糧など乏しくて、久しく陣はりあらむ事難かるべしなど、我が好き方ばかり思ひなして、一族など集め酒呑み酔ひ臥して明し暮しぬれば、さのみ軍の手だてもなかりしとなむ。三月朔日秀吉都をたちて東に赴き給ふ。いにしへの名ある所歌枕などつらねし言の葉など思ひ出でながら、軍の折からなれば、空しくのみぞ打過ぎ給ふ。駿河の府に著きて、「草雉の宮、いづこの程にや。」と問ひ給ふ。「これより五十町ばかり東にや。」といふ。

いにしへを神もや思ひ忘れずば我が行く末の恵みたのもし  
 清見が關、

とゞめぬもいかでか過ぎぬ清見瀉波より霞むゆふ曙

三保、

もろびとのたち歸りつ、見るとてや關に向へる三保の松原

○田子の浦 駿河國蒲原、富士川河口の西岸。  
 ○綱手 綱。  
 ○うちはへ 張りやたして。  
 ○三島 伊豆田方郡三島。  
 ○山中 伊豆國山中三島へ二里。  
 ○左衛門大夫 松田右兵衛大夫重長が城主であつた。北條左衛門大夫は不詳。  
 ○葦山 伊豆國。  
 ○同氏美濃守 北條美濃守氏規。氏政の弟。  
 ○尾張内府 内大臣織田信雄。  
 ○竹束 丸竹を束ねた櫛。  
 ○上なる山云々 上なる山の尾さき／＼の敷。  
 ○中村式部少輔 名は一氏。  
 ○渡邊勘兵衛 名は一柳。近江の人。

田子の浦を見給へば、かかる騒ぎにも恐れで鹽焼營みあへりければ、

我もする世のいとなみは變らねどしほたれまさる袖のあはれさ

富士川は船を並べ、綱手を結び合はせて橋をなせり。

引き繋ぐ船の綱手もうちはへて渡る危き浪の浮橋

傍の人の思ひ出づるまゝに書きつくる。三月二十八日沼津に著き給へば、先立ちに下りし勢ども、三島黄瀬川にみち／＼たり。北條は山中といふ所に城を構へて、同氏左衛門大夫といふ者籠めおき、葦山の城堅くして同氏美濃守に守らせ、我が身は小田原にぞ居りける。二十九日秀吉、三島の上なる山に上り、なすきてだてを計らひ給ふ。葦山へは尾張内府信雄公に蜂須賀、福島、戸田などいへる四國の者共さし副へて向けらる。これは城を捲き、竹束にて靜かに攻むべしとなり。山中へは駿河大納言家康卿、近江中納言秀次卿を先としてみづから向へしとなり。時の中に攻め破るべしと心に思ひ給ひけれど、宣ひいださで、暮方に沼津城に歸り給ふ。明くる晦日、昨日の定め如くに葦山へ向ふ勢は北條を南へうち通る。山中に向ふ勢は三島の上なる山尾崎／＼の道もなき所を、尾つゞきに任せ上りけり。既に城近くなりぬれども、しばし猶豫に及ばず、三方より攻めかゝるに、城にもしばしさゝへ戦へども、大勢我先にと攻め上りぬれば、防ぐに便りなし。中村式部少輔從者に渡邊勘兵衛といへる者、一番に城に入りて名を顯はす。秀吉公勢り思はれし一柳



○湯本 相模國湯本  
 ○物にあたる 狼狽  
 し騒ぐさま。  
 ○真學寺 箱根湯本  
 村早川の南。真覺寺  
 北條氏の菩提所。後  
 早雲寺といふ。  
 ○佐川 相模國酒  
 酒勾川の東岸。  
 ○早川 箱根蘆の湖  
 から發す。河口は足  
 柄郡早川村。  
 ○加賀少將 前田利  
 家。  
 ○越中侍從 前田利  
 勝。  
 ○河中島 信濃國。  
 ○宇吹の峠 信濃上  
 野の境。碓氷峠。  
 ○松枝 上野碓氷郡  
 松井田。  
 ○忍 武藏國。  
 ○川越 武藏國。  
 ○八王寺 武藏國八  
 王子。  
 ○北條陸奥守 氏輝  
 氏康の第二子。  
 ○家のごども 家來  
 ども。  
 ○明けも云々 城を  
 明けて引退きもしな  
 い。

伊豆守討死しけり。北條左衛門大夫は叶はじとや思ひし、旗を倒し城を棄てて落ち行きけり。残りて防ぎし者共の首三百許り切り取りけり。辰の半ばの頃よりも巳の半ばに及ばぬ程、城破れければ、火をかけ焼き拂ひて、そのまゝ小田原に押寄せ給ふ。小田原には山中城かく早く攻め落さるべきとは知らざりしが、敵はや箱根を越え湯本邊に到りぬるなど上中下騒ぎあへる様、たゞ物にあたるやうなりとなむ。卯月朔日秀吉公、湯本真學寺に至り給へば、先軍の者共は佐川の海邊より、早川の鹽やの浪うち際まで、二重三重に城を圍めり。秀吉公、早川の上なる松山に石垣築き廻し堀ぬり、櫓所々に數多造り並べて移り給へり。城を捲きし勢は夜晝竹束つき寄せ、攻め近づくわざをなむしける。五月の頃にや、奥州半ばの主伊達政宗、秀吉公に隨ふべしとて、越後國へ廻り小田原に到れり。斜ならず悦び返し給ふ。加賀少將利家、越中侍從利勝、加賀、能登、越中の勢を引具し、上杉景勝は越後の勢を具して、河中島を経て宇吹の峠を越え、松枝城におし寄せ。こゝをば北條が家の子大道寺といへる者、城を守りて居たり。要害よければ、赴き攻め破られずありしかども、竹束にて近づき寄れば、遂には叶はじと思ひし、城開け渡しにけり。それより上野に出で、箕輪、竹橋の城に寄するに、みな小田原に籠り集まりて、留守には郎等少々残し守らせければ、防ぐに及ばず皆城々開け渡せり。忍、川越の城も然なり。八王寺城は北條陸奥守家のこども残り守らせければ、さすがに明けものかさりけれど、時の間に攻め破

○岩付 武藏國岩槻  
 ○十郎 北條氏政の  
 次子氏房。氏直の弟

○大道寺 名は政繁  
 ○美濃守 北條氏規

○掟をなさばや 天  
 下に號令しようぞ。  
 ○會津 岩代若松。  
 ○佐竹吉重 佐竹義  
 昭の子義重。  
 ○白河 磐城國白河  
 阿武隈川右岸。  
 ○木村伊勢守 名は  
 秀俊。

○伊勢守が知所 陸  
 前岩手澤及登米。

りけりとなむ。岩付城には氏直第十郎が從者ども到りしをこれも攻め破りけり。北條が持城どもかやうに破り、或は逃げ失せ或は敵に加はりければ、根を斷たれし草木の如くなりゆくなめり。かくては叶ふ可くもあらざりければ、命ばかりをつぎ給へと氏政、氏直詫びければ、秀吉公赦し給ひけり。かくて七月十日ばかりにや。北條の一族悉く城を出でて寺に入りければ、秀吉公の勢入りかはり城を受取りけり。氏政と大道寺といへる從者をば、小田原にして腹切らせ給ひ、氏直其の外の一族をば京にのほせ給ふ。葦山にありし美濃守は此の先都に上り秀吉公にあひ語らひ奉りしかば、懇に勞りて都へその旨宣ひ上せ給ふ。秀吉公は此の度陸奥國のはてまで掟をなさばやとて、七月中頃會津に赴き給ふ。此の先會津山東をば佐竹吉重が弟知りてありしを、伊達政宗攻め破り取つて、その程は政宗が從者を置きし、素より我知るところにあらざれば秀吉公に奉るべし。かさい大崎賜ふべし。」と云ひしに任せ、會津山東白河にいたりて、蒲生飛驒守氏郷知所となし、若松城に置き、岩手澤といふ處に木村伊勢守置き給ふ。北條の知所の國をば、駿河大納言家康知所とし、駿河國をば中村式部少輔、遠江をば山内對馬守、堀尾帶刀、甲斐國に丹波少將秀勝、信濃國に仙石越前、森右近、毛利河内、池田三右衛門、尾張國に中納言秀次公、彼様に知所を定め八月半ば都に歸り上りたまひぬ。秋の末木村伊勢守が知所、一揆おこりて、城を取廻し、既に討たむとしけるを、飛驒守蒲生氏卿行き向ひ伊勢守を具して會津に歸りぬ。一揆



を鎮めむ爲に、尾張中納言秀次を奥州に下し、一揆悉く治め給ひ、飛驒守氏郷に賜はりて知所となせり。

○三河吉良 三河備豆郡。  
○此の頃云々 本来は好まないが此の頃はかくの如く鷹狩をした。

○百舌鳥 もず。

○鷹 くまたか。

○京極を上りに 京極の大路を南から北へ上り。

○御門 後陽成天皇  
○宗易 千利休。

○陶朱 陶朱公、筒頼と並び支那古代の富豪。  
○堺の津 泉州堺港

其の年の霜月初め頃、秀吉公、三河吉良へ鷹狩に行き給ふ。かやうのわざはもとく好み給はざりけれども、此の頃かくなむ。十二月初めつ方都に歸り給ふとて、鷹狩の様帝の御覽に入ればやとて、三河にて取りし色々の鳥共、大きなるも小さきも竿にかけ並べて、二行に逢坂より持たせらる。凡そ都までつゞけり。数はいくばくといふ事を知らず、その後今度鷹狩の供奉の人々數多、色々の狩装束、錦金襴をたちき思ひ／＼に出でたつ有様思ひやるべし。秀吉公始め小鷹大鷹はいふに及ばず、百舌鳥鷹の類まで手にく据ゑ、これも二行に歩む。京極を上りに内裏を経給ひ、正親町を西へ折れて聚樂の亭へ入り給ふ。御門を始め宮々みなみそなはし給ふ。京中貴賤の物見肩押し合へり。珍らかなりしよそほひにて、次の日かけ並べし鳥ども、宮々殿上人京中町人までにくばり給ふ。その頃茶湯の聖なりし宗易を殺し給ふ。かの堺の町人なりしが、秀吉公茶湯の道に好き給へるによりて彼を師とし恵めり、上中下までもてはやすこと愚かならず。茶の器物よしあし彼がいふ類に隨ひ價をましければ、富める事陶朱に劣らざらむといふばかりなり。旁 おごりを極めぬれば、我が心ひかる、かたのうつは器物を悪しきをもよしとし、新しきをも古しとしあたひを増せり。秀吉公これを聞き、國の賊なりとて堺の津に下し首を切り給ひ、驕れる者

今も昔も然なり。これを誰か鑑みざらむ。今の人誠となさざらむや、後の人も亦誠めとせざらましと淺ましかりし。慎むべき事になむ。

十九歳の春日日秀吉公參内例の如し。去年は東の軍何くれに騒がしかりしが、此の春は穩しくて人皆樂しみあへり。國知りたる人々秀吉公御成りをなして、大和の京の猿樂など集め、京中賑はしくの、しりあへり。其の夏四月の頃にや、秀吉公の思ひもの淺井備前が娘の腹に男御子御一所生まれ給ふ。五十年に餘り給ふまでも、も給ひ給はざりければ、珍らかに悦び給ふ事、推し量るべし。かくせし程に、其の年の秋病に犯され失せ給ひにしかば、秀吉公の悲しび云はむ方なし。年若く數多あるさへ、子の別れは悲しきものにあめるに、けにことわりならし。從者ども皆髪を斷ちかたちをかへて悲しびの色あらはせり。冬の頃ほひなりし、尾張中納言秀次卿に關白をゆづりて大閤とぞ申せし、此の若君のゆるなるべし。

### 高麗之亂

秀吉公思ひ給へるは、古は異國より我が朝へ襲ひ來る事、度々ありしとなむ聞く。我が國より異國を攻めし事は、神功皇后三韓を攻め給ひし後は未だ聞かず。我賤しき民のかく成り出で、國を思ひのまゝに隨へ、切り立つる所靡かぬ所なし。三韓に軍を遣はし末の

○東の軍 關東地方の戰爭。  
○國知りたる人々 大名たち。  
○大和の京 奈良。  
○猿樂など 猿樂の能の役者。能役者たち。  
○思ひもの 愛妾。  
○淺井備前が娘 淺井長政の女茶々。淀君。  
○も給ひ給はざり 持ち給ひ給はざり。  
○かたちをかへ 喪服を著て。  
○大閤 太閤下の署關白を辭して其の子が關白になった時父の前關白の尊稱。  
○成り出で 立身出世して。



- 規模 生まれ、手柄。
- 前様 まづ。さきわたつて。
- 名古屋 肥前國唐津の西北。
- 船子 船頭、水夫
- 衣更著 陰曆二月
- 聚樂の亭に行幸あり 後陽成天皇が秀次の聚樂第に行幸になつた。
- 茨木 攝津國茨木
- やすらひ給ふ 休み給ふ。
- 嚴島 廣島灣の西南。宮島ともいふ。
- 廻廊 長く折れ曲つた廊下。
- 舞殿 神樂殿。
- 潮干潟 潮がひいて現はれる地。
- しらす 白洲。干潟の爲に現はれる砂地。
- 長門の府 長門の國府は長府の西北。

代までも我が國の規模にせばやとて、高麗に赴くべき事を頻りに催し、明年の春筑紫、中國、四國の勢を高麗へ前様渡すべし。我が身も肥前國名古屋に移りて高麗の赴きを計らふべしとぞ。其の冬より肥前の名古屋に城構へすべき由九州侍どもの方へ觸れ送らる。此の冬は一向高麗に勢をやるべしと營みにて年も暮れしより、今年年號かはりて文祿元年といふ。去年よりの催しなれば、四國中國筑紫の勢は舟ども揃へ、船子整へて彌生には高麗に渡るべしと急ぎ、畿内、北國の勢は筑紫に赴くべきいとみななり。衣更著十日餘りに關白秀次公聚樂の亭に行幸ありけり。いにしへ天正の例にかはることなければくしく書かず。

秀吉公二月朔日筑紫に赴く可き由ありけれども、行幸などの紛れにて三月二十六日に大坂より立ち給ふべかんめれと、京中の者に武士共のいでたちなど見すべきとて、京よりぞ立ち給ひぬる。人々種々金銀をちりばめて耀かしたるいでたち云ふばかりなれば、なかなか筆に及ばず。其の夜は攝津國茨木におはし著きて、それより中國を経て名古屋に赴き給ふ。安藝の廣島には毛利氏輝元住む所なれば、一日二日やすらひ給ふ。近ければ嚴島に詣で給ふ。御社は北に向ひ海に望み、廻廊舞殿なる潮干潟のしらすに造り廻らしければ、潮の満ちくる折からは板敷のひたる程に潮さしこみ、細波寄すれば、たゞ波の中をぞ踏みありく如くなり。その粧ひいふはおろかになりぬべし。日を経て長門の府に至り給ふ。此

- 此處の御社 豊浦宮址、二宮八幡宮。
- 満干潮云々 下の關海峡の東口に満珠干珠の一觸があるのをいふ。
- 此の軍の誓ひ云々 朝鮮の軍は二宮八幡の祭神神功皇后の御誓願である。
- 赤間が關 下の關馬關ともいふ。
- 阿彌陀寺 赤間關龜山の下にある。赤間宮として神社。
- 御影 御肖像。
- 見る心地 現に目に見てゐる心地。
- 朝鮮王 宣祖李熙
- 元良哈 浦羅斯德近傍の地ともいふ。
- 此の時朝鮮王は京城を遁けて魏州に走つたのである。

處の御社は仲哀天皇、神功皇后などがめ奉り、満干潮の玉など沖の方に二つの島あり。此の軍の誓ひある御神なれば、分けて拜し給ふなるべし。赤間が關に著すともまづ渡らせ給うて暫くやすらひ給ふ。阿彌陀寺とて寺あり。安徳天皇の御影を寫し置きて、廻りの壁には平家の一門悉く繪に書き寫せり。ふりにし跡なれども、見る心地して哀れさ誰々も涙おさへ合へり。いにしへより見し人々の大和歌、唐歌なども連ねおきしとなむ法師出でて物語りする。

あはれさは残る影にもす、みけりまして其の代の人の思ひを  
捨てぬ名の長門の海の波風に吹き傳へつ、絶えぬかなしき  
苦しみの海にひとたび沈みしも浮ぶ佛の誓ひ頼もし

末の代もこの哀れさを知れとてや書きとゞめぬる門司の關守  
など人々に歌詠ませ給ふ。數多ありけれども忘れにけり。四月二十日餘りに名古屋に著き給ふ。彌生の頃海を渡りし四國中國の港、筑紫の勢ども壹岐、對馬を経て、高麗釜山かいといふ所に到りぬ。高麗人ども此處に城を構へ、防がむ爲集まり居けれど、日本は武士の道猛くかしこき事及ぶべきにあらねば、防ぐに及ばず四方に逃げ散りぬとなむ。日本の勢釜山かいより猶高麗の都へと攻め行きけり。みちすがら城ども數多こしらへさ、ふなれども、ものともせず攻め破りて、卯月の頃高麗の都に入りぬとなむ。朝鮮王は兀食哈をさし



○都にしほし逗留  
わが出征軍のこゝで  
ある。

○文月 文祿元年七  
月。

○先に若君云々 淀  
君秀頼の生まれる事  
○いつくしみ 慈愛  
○この御方様の人々  
淀君秀頼のゆかり  
の人々。

○北の政所 攝政關  
白の妻の稱。宣下に  
よる稱號となつた。  
こゝは秀吉の正妻。  
○はつこのわたりな  
には津のわたりか。  
但し淀君は山城國流  
の津に居て淀殿と云  
つた。

○小西攝津守 行長  
○加藤肥後守 清正  
○鍋島加賀 尙重。  
○遼東の近所 平壤  
をいふか。  
○大友 大友義統。  
○立花飛騨 宗茂。  
○加藤遠江 貞泰。  
○後詰 後援隊。

て落ち行きぬなるべし。都にしほし逗留し秀吉公の下知を待つとぞ聞えし。文月頃はや、先に若君のありし腹に男君産まれ給ふ。二なき祝ひなれば、初めの君あまりかしづき給ふにより命も短くおはしけるにやとて、御ひろいとなづけて育て給ふ。されどいつくしみの流れます事は猶前よりも深かりければ、この御方様の人々皆時を得、おのれくしが望みを叶へり。はつこのわたりにおはせしを、馳て大坂へ移して北の政所おなじ所に住ませ給ふ。後左大臣秀頼公とて秀吉公の後世を受けつぎ給ふ様なれど、はかしくしき勢もあらで大坂にて自害し給ふなり。高麗よりは名古屋へ使してかうくのよし秀吉公へ告げければ、重ねて勢を高麗へ渡し、都に入りし勢は遼東兀良哈二つに別ち攻め入るべし。遼東へは小西攝津守、大友、其の外筑紫人。兀良哈へは加藤肥後守、鍋島加賀、其の外筑紫の人々、向ふべしとなり。小西攝津守遼東の近所まで行きしかば、唐人大勢にて向ひしと聞きて叶はじとや思ひし、三十里許り後にありしが、大友が陣まで引退くに、大友は小西を待ち立てずして都へとぞ歸りしかば、小西そこにもたまらず、引合せし勢どもうちつれて都に歸りぬ。唐人なほ競ひて来て、都より二十里許り外まで来て、幾千萬となく満ちみちたり。都にありし人々これを聞き、これまで寄せ来らざる先に寄せ戦はむとて、一同にて小早川隆景、立花飛騨、加藤遠江守を先として宇喜多秀家を後詰とし戦ひを始めしに、唐人矢尻を揃へて射ると雖も、日本の人の鐵砲、槍、長刀に交はるべくもなくして、我先にと落ち行

○李昭云々 清正が  
捕虜したのは李昭  
でなく朝鮮の二王子

○城南伏見 京都の  
南伏見桃山。

○しごけなき 亂雜  
でしまりのない。  
○例ならぬ心 病氣  
○東山に葬り 東山  
阿彌陀峯に葬り。

きしとなむ。討たる、者いくばくといふ數を知らず。戦ひ終りて日本の勢は都に歸り、唐の勢は落ち行きて其の後出でざりけり。兀良哈へ赴きし加藤肥後守は高麗王李昭を追ひ詰め、捕へて引具して、これと都へかへりにけり。冬も半ば過ぎ寒さ日本にまさりければ、此處に集まりて今年は暮れにけり。明くる春秀吉公より使を遣はし、都の勢、みちく城の勢、共に釜山かいへ出づべし。高麗人も云ふ事通ぜざれば、早々治まり難し。軍の兵どもつかるべし。釜山かい、こもかい、せつかいなど船著きの城々を堅くし、筑紫勢どもに守らせ、残りの勢は日本に歸朝すべしと下知し給へば、人々悦びをなして、釜山かいに集まりて、舟著きの城構へこしらへ、秀吉公下知の如く筑紫の人々入れおき、残りの勢は皆歸朝して名古屋に著きしかば、おのが國へぞ返し給ひける。秀吉公も七月名古屋を立ち給ひ都に上り、城南伏見の里に家造りいかめしくして、從者共集めて住み給ふ。

此の末長々しけれど、おもはざるの外、病の露におかされ、秋の霜と消えなむとしければ、思ひの程を残せしがいと口惜し。志同じからむ人あらばこれを繼ぐべし。清書にさへ及ばざれば、素より拙き言葉猶つたなく、人の官名氏なども前後しどけなき事あるべし。病の故と見許さるべし。秀吉公は慶長四年八月十八日例ならぬ心にて薨じ給ひしを、東山に葬りて、豊國大明神とあがめ奉りぬ。其の太郎右大臣秀頼公次いでたち給ひしかど、未



○いわけなければ幼なし。

○竹中丹後刺史源重門 刺史は國守の唐名で、丹後刺史は丹後守。重門は竹中半兵衛重治の子。家を繼いで秀吉に仕へ、後大坂陣に東軍に屬した。寛永八年歿。年五十九。子孫替手に居る。

だいわけなければ、世の掟おきては松平源家康公計らひ給ひしとなり。  
残しおく筆の跡さへ末遂けであだに消えにし秋の夕露

竹中丹後刺史源重門取筆

豊鑑終

義經記



義經記目次

卷第一

- 一 義朝都落ちの事……………四二九
- 二 常磐都落ちの事……………四三〇
- 三 牛若鞍馬いりの事……………四三二
- 四 正門坊の事……………四三三
- 五 牛若貴船詣での事……………四三五
- 六 吉次が奥州物語の事……………四三七
- 七 遮那王殿鞍馬いででの事……………四四一

卷第二

- 一 鏡の宿にて吉次宿に強盗入る事……………四四五

目

次



- 二 遮那王殿元服の事……………四五〇
- 三 阿野の禪師に御對面の事……………四五二
- 四 義經陵が館を焼き給ふ事……………四五三
- 五 伊勢三郎義經の臣下に初めて成る事……………四五五
- 六 義經秀衡に御對面の事……………四六二
- 七 鬼一法眼の事……………四六四

卷第三

- 一 熊野の別當亂行の事……………四七八
- 二 辨慶生まるゝ事……………四八一
- 三 辨慶山門を出づる事……………四八四
- 四 書寫山炎上の事……………四八五
- 五 辨慶洛中にて人の太刀を取りし事……………四九三
- 六 義經辨慶と君臣の契約の事……………四九六

- 七 頼朝謀叛の事……………五〇一
- 八 頼朝謀叛により義經奥州より出で給ふ事……………五〇四

卷第四

- 一 頼朝義經に對面の事……………五〇七
- 二 義經平家の討手に上り給ふ事……………五一〇
- 三 腰越の申狀の事……………五一四
- 四 土佐坊義經の討手に上る事……………五一六
- 五 義經都落ちの事……………五三四
- 六 住吉大物二箇所合戦の事……………五四二

卷第五

- 一 判官吉野山に入り給ふ事……………五四九
- 二 靜吉野山に捨てらるゝ事……………五五三



- 三 義經吉野山を落ち給ふ事……………五五七
- 四 忠信吉野にとゞまる事……………五六〇
- 五 忠信吉野山の合戦の事……………五六六
- 六 吉野法師判官を追つ掛け奉る事……………五七八

卷第六

- 一 忠信都へ忍び上る事……………五九一
- 二 忠信最後の事……………五九四
- 三 忠信が首鎌倉へ下る事……………五九九
- 四 判官南都へ忍び御出である事……………六〇一
- 五 關東よりくわんじゆ坊を召さるゝ事……………六〇六
- 六 靜鎌倉へ下る事……………六一七
- 七 靜若宮八幡へ參詣の事……………六二四

卷第七

- 一 判官北國落ちの事……………六三七
- 二 大津次郎の事……………六四七
- 三 荒乳山の事……………六五一
- 四 三の口の關とほり給ふ事……………六五三
- 五 平泉寺御見物の事……………六六〇
- 六 如意の渡にて義經を辨慶うち奉る事……………六六九
- 七 直江の津にて笈さがされし事……………六七二
- 八 龜割山にて御産の事……………六八二
- 九 判官平泉へ御著の事……………六八五

卷第八

- 一 嗣信兄弟御弔ひの事……………六八七



二 秀衡死去の事……………六九〇

三 秀衡が子共判官殿に謀叛の事……………六九二

四 鈴木三郎重家高館へ参る事……………六九六

五 衣川合戦の事……………六九七

六 判官御自害の事……………七〇二

七 兼房が最期の事……………七〇六

八 秀衡が子共御追討の事……………七〇七

目次終

義經記

卷第一

一 義朝都落ちの事

○田村 坂上田村麿  
 刈田唐の子。桓武平  
 城に仕へ侍従兵部卿  
 になつた。  
 ○利仁 藤原氏。左  
 大臣。藤原名。藤原  
 の朝鎮守府將軍とな  
 る。  
 ○將門 平良將の三  
 子。朱雀の朝叛いて  
 平貞盛に殺さる。  
 ○純友 藤原長範の  
 子。叛いて殺さる。  
 ○保昌 藤原忠教の  
 子。攝津守。長元九  
 年卒す。  
 ○頼光 鎮守府將軍  
 源満仲の子。  
 ○樊噲 張良。共に漢  
 の高祖の臣。  
 ○下野の左馬頭 下  
 野守で左馬頭の義  
 ○をさあいをさな  
 きの音使。幼い者。  
 ○勢を具せよとて。軍  
 勢を率ふるよとて。軍  
 ○石山寺 近江勢多  
 の南。  
 ○六條河原 京都六  
 條に當る鴨川の河原  
 ○せんぞく 山賊の意  
 師の名か。山賊の意  
 か。  
 ○弓手 左。  
 ○美濃國不破  
 郡青墓村。

義經記(卷第一)

本朝の昔を尋ねれば、田村、利仁、將門、純友、保昌、頼光、漢の樊噲、張良は、武  
 勇といへども、名をのみ聞きて目には見えず。眼前に藝を世にほどこし、萬事の目を驚かし  
 給ひしは、下野の左馬頭義朝の末の子、源九郎義經とて、我が朝にならびなき名將軍にて  
 坐しけり。父義朝は、平治元年二月二十七日に、衛門督藤原信賴卿にくみして、京の軍に  
 うち負けぬ。重代の郎等ども、みな討たれしかば、その勢二十餘騎になりて、東國の方へ  
 ぞ落ちたまひける。成人の子どもをばひき具して、をさあいをば都に捨ててぞ落ちられけ  
 る。嫡子鎌倉の悪源太義平、二男中宮大夫進朝長十六、三男兵衛佐頼朝十二になる。悪源  
 太をば、北國の勢を具せとて、越前へ下す。それも叶はざるにや、近江の石山寺にこもり  
 けるを、平家聞き付け、難波妹尾を差遣はして生捕り、都へ上り、六條河原にて斬られけ  
 り。弟の朝長も、せんぞくが射ける矢に、弓手の膝口を、した、かに射られて、美濃國青



○熱田の大宮司 熱田神宮の神職の長。名は季範といふ。  
 ○蒲の御曹司 御曹子とあつたが、御曹司と訂正した。部屋住の公達。  
 蒲御曹司は義朝第六子範頼。  
 ○九條院の常磐 中宮皇子に仕へた雑仕の常磐。  
 ○けいやく 契約。契約の親しき者は親しき縁故の者。  
 ○六條 平氏の邸のあつた處。  
 ○堅牢地神 大地を司る神。  
 ○景清 平忠清の次男。  
 ○監物太郎 平頼方の御父。太政大臣藤原伊通。九條相國といふ。

墓といふ宿にて死にけり。そのほか子ども、方々に數多ありけり。尾張國熱田の大宮司の女の腹にも、一人ありけり。遠江國蒲と云ふ處にて、成人し給ひて、蒲の御曹司とぞ申しける。後には三河守と名乗りたまふ。九條院の常磐が腹にも三人あり。今若七つ、乙若五つ、牛若當歳子なり。清盛、これを取つて斬るべき由をぞ申しける。

二 常磐都落ちの事

永暦元年正月十七日の曉、常磐三人の子どもひき具して、大和國宇陀郡岸の岡と云ふ處に、けいやくの親しき者あり。これを頼み尋ねて行きけれども、世間の亂る、折ふしなれば頼まれず、其の國の大東寺と云ふ處に、隠れ居たりける。常磐が母關屋と申す者、楊桃町にありけるを、六條よりとり出し、拷問せらる、よし聞えければ、常磐はこれを悲しみ、母の命を助けんとすれば、三人の子どもを斬らるべし。子どもを助けんとすれば、老いたる母を失ふべし。子に親をばいか、思ひかへ候べき。親の孝養する者をば、堅牢地神も納受あるとなれば、子どもの爲にもなりなんと思ひつゞけ、三人の子をひき具して、泣く泣く京へぞ出でにける。六條へこのこと聞えければ、悪七兵衛景清、監物太郎に仰せ付け、子どもを具して六條へ参りける。清盛、常磐を見給ひて、日頃は火にも水にも思はれけるが、今怒れる心も和ぎけり。常磐と申すは、日本一の美人なり。九條院は、色好み

○漢の李夫人 漢の武帝の寵姫。  
 ○楊貴妃 唐の玄宗の姫。字は太真。  
 ○日番 日中番をし守ること。  
 ○今若 僧になつて名を全成と改めた。惡禪師と呼ばれた。  
 ○八歳と申す春 永暦元年の春。  
 ○觀音寺 京都今熊野村。山城縣郡觀音寺村。同名の寺がある。いづれも眞言宗。平治物語には觀音寺と見える。  
 ○腹あしく 怒り易。  
 ○賀茂 上賀茂社は洛外愛宕郡鴨山の麓。下賀茂社は糺森にある。  
 ○春日 奈良春日神。  
 ○稻荷 山城紀伊郡深草村。  
 ○祇園 京都四條通。  
 ○新宮十郎義盛 爲義の第十子。行家に改む。  
 ○八洲股河 美濃國安八郡墨俣町。  
 ○山村 山城國山科村。

にて坐しければ、洛中より容顏美麗なる女房を千人召されて、その中よりも百人を選び、百人の中より十人すぐり、十人の中より、一人選び出されたる美人なり。まことに、漢の李夫人、楊貴妃も、これには過ぎじと覺えける。清盛御心をうつされ、我にだに従ふものならば、末の世には、此の者の子どもの子孫の、いかなる仇ともならばなれ、三人の子どもをも助けばやと思はれける。頼方、景清に仰せ付けて、七條朱雀にぞ置かれける。日番をも頼方が計らひにして守護しける。清盛、常は常磐が許へ文を遣はされけれども、取りてだに見ず。されども文の數も重なりければ、貞女兩夫に見えずと云ふ語にもはづれ、又世の人の誹りをも思はれけれども、唯三人の子どもを助けん爲に、馴れぬ衾のもとに、新枕を並べ給ひけり。さてこそ、常磐は三人の子どもをば、處々にて成人させ給ひけり。今若、八歳と申す春の頃より、觀音寺にのほせ學問させて、十八の年、しやうかい禪師の君とぞ申しける。後には駿河國富士の裾野に坐しけるが、惡禪師と申しけり。八條におはしけるは、そしにて坐しけれども、腹あしく恐ろしき人にて、賀茂、春日、稻荷、祇園の御祭ごとくに平家を狙ふ。後には紀伊國にありける。新宮十郎義盛、世をみだりしとき、東海道の洲股河にて討たれけり。牛若は、四つの年まで母の許にありけるが、世のをさあい者よりも、心ざま振舞、人にすぐれしかば、清盛、常に心にかけて宣ひけるは、敵の子を一所にて育てては、終にはいかあるべきと思召しければ、京より東、山科といふ處に、源氏相



傳の遁世して、かすかる住居にてありける處に、七歳まで育て給ひけり。

### 三 牛若鞍馬いりの事

- なか／＼心苦しく成長するにつれて卻つて心配で。
- 殿上云々 殿上人の禁中の交はりも出来ず。
- 鞍馬 山城國鞍馬山鞍馬寺。天台宗。
- おたしき心 溫和な心。おたやかな心。
- 故頭殿 故左馬頭殿、義朝をいふ。
- 五更 昔の寅の刻今の午前四時から六時までの間。
- 雨もよひ云々 暗い空のすくまで。東天のしらむまでの意たらう。
- 山 比叡山延曆寺
- 三井寺 園城寺。
- 學問の精 學問に精神をこめてすぐれてゐること。

常磐が子共、成人するに隨ひて、なか／＼心苦しく、初めて人に従はせんも由なし。習はねば殿上にも、交はるべくもなし。唯法師になして、跡をも弔ひてなんと思ひて、鞍馬の別當、東光房の阿闍梨は、義朝の祈りの師にて坐しける程に、御使を遣はして仰せけるは、「義朝の末の子、牛若殿と申し候を、且は知召してこそ候らめ。平家、世ざかりにて候に、女の身として持ちたるも、心ぐるしく候へば、鞍馬へ參らせ候べし。猛くとも、おだしき心もつけ、書の一巻をも讀ませ、經の一字をも覚えさせてたまはり候へ。」と申されければ、東光房の御返事には、「故頭殿の君達にて、渡らせたまひ候こそ、殊に悦び入りて候へ。」とて、山科へ急ぎ御迎ひに人をぞ參らせける。七歳と申す二月初めに、鞍馬へとてぞ上られける。その後晝は、終日に師の御坊の御前にて、經を讀み書學して、夕日西に傾けば、夜の更け行くに、佛の御あかしの消ゆるまでは、ともに物をよみ、五更の天にもなれども、雨もよひもすくまで、學問に心をのみぞ盡しける。東光坊も、山、三井寺にもこれ程の兒あるべしとも覺えず、學問の精と申し、心ざま眉目容貌、類なくおはしければ、量智坊の阿闍梨、覺日坊の律師も、「かくて二十ばかりまでも、學問し給ひ候はば、鞍馬の東

- 多聞の御資 多聞は鞍馬寺の本尊毘沙聞天の一名。多聞の御資は佛法を傳へて毘沙門天の愛子たるべき人にもなる。
- 里 寺に對して俗の家。
- 不用 不都合。亂暴。
- 人に見えられ 牛若に見られもして。
- 臆氣ならぬ 一と通りならぬ。
- すり法師 新に髪を剃つた法師。
- 乳母子 傳育する人の子。もり役の子
- 正清 藤原通清の子、正家とも稱した
- 長田莊司 尾張長田莊を司る役人。平忠致。
- 外戚 母方の親戚
- 男になし 元服させて俗人になして。
- 鎮西 九州。

光坊より、後も佛法の種をつぎ、多聞の御資にも、なり給はんする人。」とぞ申されける。母もこれを聞き、「牛若學問の精よく候とも、里に常にありなんどし候はば、心も不用になり、學問をも怠りなんす、戀しく見たけれと申し候はば、わざと人を賜はり候て、母はそれまで參り、見もし人に見えられて、返し候はん。」と申されける。さなくとも、稚兒を里へ下すこと、臆氣ならぬにて候。一年に一度、二年に一度も下さる。かかる學問の性いみじき人の、いかなる天魔のすゝめにや有りけん、十五とまうす秋の頃より、學問の心以ての外にかはりけり。その故は、ふるき郎等の謀叛を勸むるにてぞありける。

### 四 正門坊の事

四條室町に、ふりたる郎等のありける。すり法師なりけるが、これは恐ろしき者の子孫なり。左馬頭殿の御乳母子、鎌田次郎正清が子なり。平治の亂の時は、十一歳になりけるを、長田莊司、これを斬るべき由きこえければ、外戚親しきものありけるが、やう／＼に隠し置き、十九にて男になして、鎌田三郎正近とぞ申しける。正近、二十一の年思ひけるは、保元に爲義討たれたまひぬ、平治に義朝討たれ給ひて後は、子孫たえ果てて、弓馬の名を埋んで星霜をおくりたまふ。その時清盛に亡ほされし者なれば、出家して諸國を修行して、主の御菩提をも弔ひ、親の後世をも弔ひ候はばやと思ひければ、鎮西の方へぞ修行







○あらたに あらたかに、靈驗あるさま  
 ○物怪 妖怪。へんけ。死靈生靈妖怪。  
 ○大衆 僧徒。  
 ○敷妙云ふ腹巻 しまったいは腹巻の名。はらう。腹巻は背で合せるわり具足。  
 ○念誦 心に神佛を念じ、口に神佛の名號又は經文をまなぶること。  
 ○未申 西南。  
 ○ぎつちやう 毬杖又、毬打。昔正月なごに、彩絲で飾つた槌形の杖で、木製の毬を打つ遊び。  
 ○介錯 世話をすること。

あらたに渡らせ給ひしかども、世末になれば、佛の方便も、神の験徳も劣らせ給ひて、人住み荒し、偏に天狗の住處となりて、夕日西にかたぶけば、物怪、喚き叫ぶ。されば、参りよる人をも取りなやます間、参籠する人もなかりけり。されども牛若、かかる處のある由を聞きたまひ、晝は學問し給ふ體にもてなし、夜は、日ごろ一所にてともかくも成りまゐらせんと申しつる大衆にも知らせずして、別當の、御護りに参らせたる敷妙と云ふ腹巻に、黄金作の太刀はきて、たゞ一人、貴船の明神へまゐり給ひ、念誦申させ給ひけるは、「南無大慈明神、八幡大菩薩、掌を合はせて、源氏を守らせ給へ。宿願まこと成就あらば、玉の御寶殿つくり、千町の所領を寄進し奉らん。」と祈請し、正面より未申に向ひて立ち給ふ。四方の草木をば、平家の一類と名付け、大木二本ありけるを、一本をば清盛と名付け、太刀を抜きてさんぐに切り、懐よりぎつちやうの玉のやうなる物を取り出し、木の枝にかけ、一つをば、重盛が首と名づけ、一つをば、清盛が首とて懸けられけるが、かくて、曉にもなれば、我が方に歸り、衣引きかづきて伏し給ふ。これを知らず、知泉と申す法師の、御介錯申しけるが、此の御有様たゞ事にはあらじと思ひて、目を放さず。ある夜御跡を慕ひて、かくれて草むらの陰に忍びて見ければ、斯様にふるまひ給ふ間、急ぎ鞍馬に歸りて、東光坊に此の由申しければ、阿闍梨大きに驚き、量智房阿闍梨につけ、寺に觸れて、「牛若殿の御髮剃り奉れ。」とぞ申されける。量智房、此の事を聞き給ひ、「幼き人

○受戒 佛道に入つて得度した者が其の師から戒律を受けること。  
 ○不用になり 我が儘になる風暴になる  
 ○我がため御身のため 東光坊自身のためにも牛若の身の爲にも。  
 ○左右なく 理不盡に。むやみに。  
 ○多聞 鞍馬の本尊毘沙門天の一名。  
 ○日参 毎日参詣すること。  
 ○所作して 動作をしての意で、神前の禮拜をいふ。  
 ○大福長者 裕福な大金持。  
 ○金商人 黄金を賣買する商人。

も様にこそよれ。容顔世に超えておはすれば、今年の受戒、痛はしくこそおはすれ。明年の春の頃、そり参らせ給へ。」と申しければ、「誰も御名残さこそと思ひ候へども、斯様に御心不用になりて御渡り候へば、我がため、御身のため、然るべからず候。唯そり奉れ。」とのたまひければ、牛若殿、何ともあれ、寄りて剃らんとする者をば、突かんするものを、と刀のつかに手をかけておはしましければ、左右なくよりて剃るべしとも見えす。覺日坊の律師申されけるは、「これは諸國の寄合所にて、靜かならぬ間、學問も御心に入らず候へば、某が處は、かたはらにて候へば、御心靜かに御學問候へかし。」と申されければ、東光坊も、流石いたはしく思はれけん。さらばとて覺日坊へ入れ奉り給ひけり。御名をばかへられて、遮那王殿とぞ申しける。それより後には、貴船まうでも止まりぬ。日々に多聞に日参して謀叛の事をぞ祈られける。

### 六 吉次が奥州物語の事

かくて、年も暮れぬれば、御年十六にぞなり給ふ。多聞の御前に参りて、所作して坐しける處に、その頃、三條に大福長者あり。その名を吉次信高とぞ申しける。毎年、奥州に下る金商人なりけるが、鞍馬を信じ奉りける間、それも多聞に参りて、念誦して居たりけるが、この幼い人を見奉りて、あら、うつくしの御稚兒や、いかなる人の、君達やらん。



○然るべき人 身分ある人。  
 ○大衆 叡山の僧徒をいふ。  
 ○磐井郡 陸奥國の郡。今は陸中。  
 ○二人の子供 秀衡の子、國衡奉衡。  
 ○兩國 陸奥出羽。  
 ○大炊介 古朝廷の炊事を掌つた大炊寮の次官。こゝは、秀衡が源氏を君として自ら靈所奉行となつて仕へようといふ意。  
 ○上みぬ驚 最も威勢あつて恐れる者のない様子。驚は他の鳥の上から覗はれる恐れないに比していふ。  
 ○徳付かはや 利益を得よう。  
 ○大過の國 すぐれて大なる國。  
 ○阿倍權守 阿倍頼時。

然るべき人にてましまさば、大衆も數多付き參らすべきに、度々見申すに、たゞ一人おはしますこそ怪しけれ。この山に、左馬頭殿の君達のおはするものを、眞やらん秀衡も、鞍馬と申す山寺に、左馬頭殿の君達おはしますなれば、太宰大貳清盛の、日本六十六箇國を從へんと、常は宣ふなるに、源氏の御君達を、一人下し參らせ、磐井郡に京を立て、二人の子供を、兩國の領主させて、秀衡生きたらんほどは、大炊介に成りて、源氏を君とかしづき奉り、上みぬ驚の如くにてあらばやと宣ひ候ものと、云ひ奉り誘拐しまるらせ、御供して秀衡の見參に入れ、引出物取りて徳付かばやと思ひ、御前に畏まつて申しけるは、「君は、都にはいかなる人の君達にておはしますやらん。これは京のものにて候が、金を商ひて毎年奥州へ下る者にて候が、奥方に知召したる人や御入り候。」と申しければ、「片ほとりのものなり。」と仰せられて、返事もしたまはず。これこそは、聞ゆる黄金商人吉次といふなり。奥州の案内者やらん。彼に問はばやとおほしめして、「陸奥といふは、いか程の廣き國ぞ。」と問ひたまへば、「大過の國にて候。常陸國と、陸奥國との境、菊多の關と申し、出羽と奥州との境をば、なん關と申す。その中五十四郡。」と申しければ、「その中に、源平の亂出で來たらんに、用に立つべき者、いか程あるべき。」と問ひ給へば、國の案内は知りたり、吉次、暗からずぞ申しける。「昔兩國の大將をば、をかの大夫とぞ申しける。彼が一人の子あり。阿倍權守とぞ申しける。子供あまたあり、嫡子栗屋川次郎貞任、二男

○曲者 一くせある者。或はづれの者。  
 ○逆鱗 天子の御怒り。  
 ○片道 北陸道七箇國の半分。  
 ○公卿會議 公卿の會議。  
 ○あつかし五 陸前國阿津賀志山のこゝであらう。岩代國大木戸村。  
 ○木戸 柵をめぐらし門を設けた寨。  
 ○行方の原 行方郡たらう。  
 ○白川 今の磐城西白河郡古岡村旗宿。  
 ○淺香の沼 岩代國山之井村日和田。  
 ○楯籠り 立籠る。籠城する。  
 ○信夫の里 岩代國

鳥海三郎宗任、家任、盛任、繁任とて、六人の末の子に、境冠者りやうぞうとて、霧をおこし霞立て、敵おこる時は、水の底、海の中にて、日を送りなどする曲者なり。これら兄弟、丈の高さ唐人にも越えたり。貞任が丈は九尺五寸、宗任が丈は八尺五寸、いづれも八尺に劣るはなし。中にも、境冠者は一丈三寸候ひける。安倍權守の世までは、宣旨院宣にも畏れて、毎年上洛して、逆鱗をやすめ奉る。安倍權守死去の後、宣旨を背き、たまたま院宣なるときは、北陸道七箇國の片道を賜はりて上洛仕るべき由、申され候ひければ、片道たまはるべきとて、下さるべかりしを、公卿會議ありて、これ天命を背くにこそ候へ。源平の大將を下し、追討せさせたまへと申されければ、源頼義、救宣を承りて、十一萬騎の軍兵を率して、安倍を追討の爲に、陸奥國へ下り給ふ。駿河國の住人、高橋大藏大夫に先陣をさせて、下野國いもうと云ふ處に著き、貞任これを聞きて栗屋川の城を去つて、あつかし五の中山の後にあてて、安達郡に木戸を立て、行方の原に馳せ向ひて源氏を待つ。大藏大夫大將として五百餘騎、白川の關をうち越えて、行方の原に馳せ著き、貞任を攻む。其の日の軍にうち負けて、淺香の沼へ引き退く。伊達郡、あつかし五の中山に楯籠り、源氏は信夫の里、駿河三河のはた、はやしろと云ふ處に陣を取つて、七年夜晝戦ひ暮すに、源氏の十一萬騎皆討たれて、叶はじと思ひけん、頼義京へ上りて内裏にまり、頼義叶ふまじき由を申されければ、汝叶はず代官を下し、急ぎ追討せよと、重ねて宣



○六條堀川 六條通り堀川通りの合ふ處。  
 ○くわんだ 源太の説。正徳の版本に伊んだとある。  
 ○源太が産衣 源氏相傳八領の鎧の一。  
 ○秩父十郎重國 武藏國の住人、畠山重國。  
 ○しからざるにか、り 正徳版本しから坂にかゝりとある。  
 ○白木山 陸中白木峠。  
 ○大事の手を負ひ 重傷を負ふ。  
 ○梶子色の衣 帶赤黄色の衣。衣は直衣狩衣など下に重ね著る小袖の類。  
 ○内の見参云々 天子に拜謁して。内は内裏又は天子をいふ。  
 ○淡海 淡海公藤原不比等。

旨を下されければ、急ぎ六條堀川の宿所へ歸り、十三になる子息を、内裏に參らせけり。汝が名をば何と云ふぞと、御尋ねありけるに、辰の年の辰の時に生まれ候とて、名をばくわんだと申し候とまうしければ、無官の者に、合戦の大將とする例なしとて、元服させよとて、後藤内範明をさし添へられて、八幡宮にて元服させて、八幡太郎義家と號す。その時、御門より賜はりたる鎧をこそ、源太が産衣と申しけり。秩父十郎重國、先陣を承りて奥州へうち下る。あつかしるの城を攻めけるに、なほも源氏うち負けて、こと悪しかりなんとて、いそぎ都へ早馬を立て、このよしを申しければ、年號が悪しければとて、康平元年と改められ、同年四月二十一日、あつかしるの城を追ひ落す。しからざるにかゝりて、いさむ關をせめ越えて、最上郡に籠る。源氏續いて攻め給ひしかば、おからの中山うち越えて、仙北金澤の城に引籠り、それにて一兩年をおくり戦ひつれども、鎌倉權五郎景政、三浦平大夫爲繼、大藏大夫光任、これらは命を捨てて攻めける程に、金澤の城をも落され、白木山にかゝりて、衣川の城に籠る。爲繼、景政、重ねて攻めかゝる。康平三年六月二十一日に、貞任は大事の手を負ひ、梶子色の衣を著て、磐手の野邊にぞ伏しにける。弟の宗任は降人となる。境冠者 後藤内、生捕にして、やがて斬られぬ。義家、都に馳せ上り、内の見参に入れて、未代までの名を挙げたまふ。その時、奥州へ御供申し候ひし、三つうの少將に十一代の末淡海の後胤、藤原清衡と申す者、國の警護に留められて候ひけ

○十四道の弓取 十四箇國の武士。

○方人 身方。  
 ○世にあるものござんなれ 世にあるものであるよな。  
 ○下らばや 陸奥の國に下らう。  
 ○左右なく かくの論なく、躊躇せず。かれこれいふことなく。  
 ○下野殿 義朝。  
 ○兵衛佐 頼朝。  
 ○木曾殿 義仲。  
 ○荒乳 近江越前の境愛發の關。  
 ○天下の御所 禁裡。  
 ○源氏すごさん由 源氏が御所守護しすごさうじ。  
 ○この男め 吉次をさす。

るが、和田郡にありければ、わたの清衡と申し候ひし。兩國を手に握つて候ひし。十四道の弓取五十萬騎、秀衡が伺候の郎等十八萬騎持ちて候。これこそ、源平の亂出で來らば、御方人ともなりぬべき者にて候へ。」と申しける。

七 遮那王殿鞍馬いで之事

遮那王殿、これを聞き給ひて、豫て聞きしに少しも違はず、世にあるものござんなれ。あはれ下らばや。左右なく頼まれたらば、十八萬騎の勢を、十萬騎をば國に留め、八萬騎をば率して、坂東に打ちいで、八箇國は源氏に心ざしある國なり。下野殿の國なり。これを始めとして、十二萬騎を催し、二十萬騎になして、十萬騎をば伊豆國兵衛佐殿へ奉り、十萬騎をば木曾殿につけて、我が身は、越後國にうち越し、鶴川、佐橋、金津、奥山の勢を催して、越中、能登、加賀、越前の軍兵を靡けて十萬騎になして、荒乳の中山を馳せ越えて、西近江に懸りて大津の浦に著きて、坂東の二十萬騎を待ち得て、逢坂の關を打越えて、都に攻め上り、十萬騎をば天下の御所に參らせて、源氏すごさん由を申さんに、平家猶も都に繁昌して空しかるべくは、名をば後の世にとゞめ、屍をば都に晒さんこと、身に取つては何の不足か有るべきと思ひ立ち給ふも、十六の盛りには恐ろしくぞ覺えける。この男めに知らせばやと思召し、近く召しておほせられけるは、「汝なれば知らずぞ、人に



○御宿直 守衛し面倒を見る意。  
 ○かたの如くの門出 吉日であるから、形ばかりでも旅立をしよう。  
 ○心の中許り 師へ暇乞もあらはに告げられず心の中だけで暇乞して。  
 ○朝には云々 朝に霧を拂ひ夕に星を戴きといふ對句。けうくんは師の教訓教導をいふか。香薫か。三光は日月星であるが、三光の星は三つの最も輝く星か。  
 ○唐綾 浮織の綾。  
 ○はりま浅葱 播磨で染出すあざぎ色。  
 ○大口 大口の袴。  
 ○きごめ 著籠むこと。  
 ○我ならぬ云々 自分以外の者が此處に來て通る時に牛若といふ者が居たと思出して訪へよと。  
 ○漢竹のようどう 漢土から渡來した竹で作った横笛。

披露あるべからず。我こそ、左馬頭義朝が子にてあれ。秀衡が許へ文一つことづてばや。いつの頃、返事を取りてくれんずるぞ。」と仰せられければ、吉次、座敷をすべり下り、烏帽子のさきを地につけて、申しけるは、「御事をば、秀衡、以前に申され候。御文よりも唯御下り候へ。道の程御宿直仕り候はんずる。」と申しければ、文の返事待たんも心許なし。さらば連れて下らばやと思召しける。「いつのころ下り候はんずるぞ。」とのたまへば、「明日吉日にて候間、かたの如くの門出仕り候はんずる。」と申しければ、「さらば、粟田口十禪寺の御前にて待たんずるぞ。」と宣ひければ、吉次、「さ承り候。」とて、下向してけり。遮那王殿、別當の坊に歸りて、心の中許りに出で立ち給ふ。七歳の春の頃より、十六の今に至るまで、朝にはけうくんの霧を拂ひ、夕には三光の星を戴き、日夜朝暮、馴れしなじみの師匠の御名残も今ばかりと思はれければ、頻りに忍ぶとし給へども、涙に咽びけり。されども弱くて、叶ふべきにあらざれば、承安二年二月二日の曙に、鞍馬をぞ出で給ふ。白き小袖一重に唐綾を著重ね、はりま浅葱の衫を上召し、しろき大口に唐織物の直垂めし、敷妙と云ふ腹巻きごめにして、紺地の錦にて、柄鞘包みたる守刀、金作の太刀佩いて、薄化粧に眉細く作りて、髪高く結びあけ、心細けにて壁を隔てて出で立ちたまふが、我ならぬ人の音信れて通らん度に、さる者これにありしぞと思ひ出でて、跡をも訪らひ給へかと思はれければ、漢竹のようどうを取り出し、半時ばかりふきて、音をだに跡

○御邊 汝。御身。  
 ○二十餘疋 二十餘疋の驛馬。  
 ○あひ／＼引きかき 云々 間々に柿澱色をひいて一體に菓葉の模様を摺りつけた直垂。  
 ○秋毛 鹿の秋毛。  
 ○行膝 騎馬の時腰から脛にかけて被ひかけるもの。  
 ○鞍おほひ 行膝を鞍におほひかけて。  
 ○馬の腹筋馳せ切つて 馬をひびく馳せて馬の腹筋も断れる程にして。  
 ○鞍馬になしと云々 牛若が鞍馬に居ない云へは都でさがすだらう。  
 ○言葉の末を以て 言葉で巧みに言ひくめて。

の形見とて、泣く／＼鞍馬を出で給ひ、その夜は、四條の正門坊の宿へ出で給ひて、奥州へ下る由仰せられければ、「善悪御供申し候はん。」と出で立ちけり。遮那王殿宣ひけるは、「御邊は都に留まりて平家のなり行く様を見て、知らせよ。」とて京にぞ留められける。さて、遮那王殿、粟田口まで出で給ふ。正門坊も、それまで送り奉り、十禪寺の御前にて、吉次を待ちたまへば、吉次、いまだ夜深に京を出でて、粟田口に出で来る。種々の寶を二十餘疋に負ふせて先に立て、我が身は、京を尋常にぞ出で立ちける。あひ／＼引きかきしたる摺盡しの直垂に、秋毛の行膝はいて、黒栗毛なる馬に、角覆輪の鞍おきてぞ乗りたりける。兒を載せ奉らんとて、月毛なる馬に、沃懸地の鞍をおきて、大斑の行膝、鞍おほひにしてぞ出で来る。遮那王殿、「いかに約束せばや。」と宣へば、馬より急ぎ飛んで下り、馬引き寄せのせ奉り、かかる縁に遇ひけるよと、よに嬉しくぞ思はせ給ひける。吉次を招きて宣ひけるは、「宿の馬の腹筋馳せ切つて、雜人めらが追ひつかん、顧みるに、かけ足になつて下らんとおほゆるなり。鞍馬になしといはば、都に尋ねべし。都になしといはば、大衆どもさだめて東海道へぞ下らんずらんとて、摺針山より此方にて、追つかけられて、歸れといはんずるものなり。歸らざらんも、仁義禮智信にもはづれなん。都は敵の邊なり。足柄山を越えんまでこそ大事なれ。坂東と云ふは、源氏に心ざしのある國なり。言葉の末を以て、宿々の馬取りて、乗り下るべし。白川の關をだにも越えば、秀衡が知行の處なれ



○雨の降る云々 秀衡の領地内に入れば雨が降つても風が吹いても一向平氣だ。  
○恥ある郎等 名譽を重んずる家來。  
○知行する 領地として治め持つてゐる國。  
○松坂 粟田口から山科に出る處。  
○四の宮河原 山科の東。  
○鏡の宿 近江國鏡山の北。

義經 記(卷第二)

ば、雨の降るやらん、風の吹くやらんも、知るまじきぞ。」と宣へば、吉次これを聞きて、かかる恐ろしき事あらじ。毛のなだらかならん馬一匹をだにも、乗り給はずして、恥ある郎等の一騎をだにも具し給はで、現在の敵の知行する國の馬を取りて下らんと宣ふこそ、恐ろしけれとぞ思ひける。されども、命に隨ひ駒を早めて下るほどに、松坂をも越えて、四の宮河原を見て過ぎ、逢坂の關をうち越えて、大津の濱をも通りつ、勢多の唐橋うち渡り、鏡の宿に著き給ふ。長者は、吉次が年頃の知る人なりければ、女房あまた出し、色色にこそもてなしけれ。

卷 第二

一 鏡の宿にて吉次宿に強盜入る事

○傾城 遊女。  
○なほしける 座になほすは著座せしめるをいふ。  
○長者 宿驛の長。  
○いつくしき 美しき。愛らしい。  
○たちふるまひ 起居動作。  
○容身さま 容貌や身體の様子。  
○頭殿 左馬頭義朝  
○思ひ立ち 謀叛を思ひ立つ。  
○拵へ奉り 謀り構へて差上げてくれ。作り構へて用心して渡り給へ。  
○壁に耳岩に口事 の漏れ易きをいふ。  
○吳藍 紅花。庭や畠の多くの花の中に最も美しい紅花は隠れる處なく顯はれる如くに貴人は分る。

そもく、都ちかき處なれば、人目もつ、ましくて、傾城の遙かの末座に、遮那王殿をなほしける、恐れ入りてぞ覺ゆる。酒三獻過ぎて、長者、吉次が袖に取付きて、申しけるは、「そもく御邊は、一年に一度、二年に一度、此の道をとほらぬ事なし。されどもこれ程、いつくしき子具し奉りたる事、これぞ始めなり。御身の爲には親しき人か、または他人か。」とぞ問ひける。「親しくはなし、また他人にてもなし。」とぞ申しける。長者、涙をはらはらと流し、「哀れなる事どもかな。何しに生きて初めて、かかる憂き目を見るらん。ただ昔の御事、今の心地してぞおほゆるぞや。此の殿のたちふるまひ、容身さま、頭殿の二男、朝長殿にすこしも違ひたまはぬものかな。言葉の末をもつても具し奉りたるかや。保元平治より以來、源氏の子孫、此處やかしこに、うち籠められておはするぞかし。成人して思ひ立ち給ふことあらば、よくく拵へ奉りて、わたし參らせ給へ。壁に耳、岩に口といふ事あり。吳藍は園生に植ゑてもかくれなし。」と申しければ、吉次申しけるは、「何ぞ、それにては候はず。身が親しきものにて候。」と申しけれども、長者、「人は何ともいはばい



○ぶたうのこゝ 無道の事。一本おもはざる事とある。  
 ○せんごう 潜盗か山盗か。  
 ○宗徒のもの 宗徒頼むもの。重たつ者。  
 ○徳人 富豪。  
 ○興ある酒 うまい酒。  
 ○順風に帆云々 順風に帆をあけ其の上に乗して船の早い如く迅速に時機を逸せず押しよせる。  
 ○しやつ 彼奴。きやつ。  
 ○屈強 究竟のあて字。最もすぐれた強い。  
 ○車松明 強盜提灯の加き装置の中に小壺に油をさしたるもの。一盞に束ねた松明數本を車のやの如くにしてまはりに點火するもの。  
 ○折烏帽子 折りふせた烏帽子。立烏帽子の對。

へ。」とて、座敷を立ちて、幼き人の袖を引き、上の座敷になほし奉り、酒をす、めて、夜ふかければ、我が方へぞ入れ奉る。吉次も酒に酔ひ伏しにけり。その夜、鏡の宿にぶだうのことこそありけれ。その年は、世の中饑饉なりければ、出羽國に聞ゆるせんとうの大將に、由利太郎と申す者と、越後國に名を得たる頸城郡の住人、藤澤入道と申すもの、二人語らひ、信濃國に越えて、さんの權正子息太郎、遠江國に、蒲與一、駿河國に興津十郎、上野に豐岡源八、以下の者ども、いづれも聞ゆる盗人、宗徒のもの二十五人、その勢七人連れて、「東海道は衰微す。少しよからん山家々々に居たりける徳人あらば、追ひおとし、わが黨どもに、興ある酒飲ませて都に上り、夏もすぎ秋風立たば、北國にかゝり、國へ下らん。」とて、宿々、山家々々におし入り、おし取りてぞのほりける。その夜、鏡の宿長者の軒を並べてやどしける。由利太郎、藤澤に申しけるは、「都に聞えたる吉次といふ金商人、奥州へ下るとて、多くの賣物を持ち、今宵長者のもとに宿りたり。いかゞすべき。」といひければ、藤澤入道、「順風に帆をあけ、棹さし押寄せて、しやつが商物とりて、わが黨どもに、酒飲ませて通れ。」とて出で立ちける。屈強の足輕ども五六人、腹巻著て、油さしたる車松明、五六臺に火をつけて、天にさし上げければ、外は暗けれども、内は日中のやうに拵へ、由利太郎と藤澤入道とは、大將として、其の勢八人連れて出で立ち、由利は、唐萌黃の直垂に、萌黃緘の腹巻著て、折烏帽子に打ちかけして、三尺五寸の太刀佩き

○褐 かちいろ。濃い紺色。  
 ○尻鞘 雨露で太刀の錆びるを防ぐため毛皮で作つて鞘にかくる袋。  
 ○れんちう 雁中。奥の方。  
 ○六波羅 京都で清盛の邸のあつた處。  
 ○次のもの 下劣な者で武士でない賤しい者。  
 ○大口 大口の袴。  
 ○一よろひ 一そろひ。一對。  
 ○目ほし放すな 目を放すな。ほしは語勢を強める語。  
 ○をめて わめき叫んで。  
 ○かね黒 鐵鑿で齒を染めること。  
 ○松浦狭夜媛 大伴狭手彦の妻。  
 ○領布ふる野べ 肥前唐津附近。領巾は古昔婦人が項にかけた飾りの布。  
 ○黛 黒でかいた眉

てぞ出でにける。藤澤は、褐の直垂に、黒革緘の鎧著て、兜の緒をしめ、黒塗の太刀に、熊の革の尻鞘入れ、大薙刀を杖につき、夜半ばかりに、長者の許にうち入りたり。つと入りて見れば、人もなし。中の間に入りて見れども、人もなし。こは如何なることぞとて、れんちうに深くみだれ入りて、障子五六間切りたふす。吉次、これに驚き、かばと起きて見れば、鬼王の如くにて出で来る。これは、宗高が財寶に目をかけて、出で來たるを知らず、源氏の公達具し奉り、奥州へくだること、六波羅に聞えて討手の向ひたると心得て、取る物も取りあへず、貝吹いてぞ逃げにける。遮那王殿、これを見たまひて、すべて人の頼むまじきものは、次のものにてありけるや。かたの如くも侍ならば、かくはあるまじきものを、とてもかくても、都を出でし日よりして、命をば、寶の糸に棄て、屍をば、鏡の宿にさらすべしとて、大口の上に腹巻取りて引きかけ、太刀取り脇にはさみ、唐綾の小袖取りてうちかづき、一間なる障子の中をすりと出で、屏風一よろひ引きた、み、前におしあたる八人の盗人を、今やと待ちたまふ。「吉次奴に、目ほし放すな。」とて、をめていかゝる。屏風の陰に人ありとは知らず、松明をふつて、さしあけ見れば、いつくしきとも斜ならず、南都山門に聞えたる兒、鞍馬を出で給へる事なれば、極めて色しろく、かね黒に眉細くつくりて、衣かづきたまひけるを見れば、松浦狭夜媛が、領布ふる野べに年をへし、寝亂れて見ゆる黛の、鶯の羽風に亂れぬべくぞ見え給ふ。女宗皇帝の代なりせば、



○いかゞしければ  
末世の評判に、牛若  
はさうした事で強盜  
に遇つておめく生  
きて更に清盛を狙つ  
たなご云はれるのは  
の意。  
○甲斐なき命 生き  
甲斐もなくおめく  
生きながらへて。  
○木政大臣云々 清  
盛を殺さう狙つて  
○太刀の寸 太刀の  
長さ。  
○左手の腕云々 左  
の腕を袖さしよに  
切り落した。  
○莖長に 柄の末の  
方を持つて。  
○聞ゆる劔 評判の  
名刀。  
○兜の眞向 兜の鉢  
の前面。  
○しや面 顔をいふ  
侮り罵つた詞。  
○きたなし 見苦  
しいこと。  
○帳疊 疊や牀から  
一段高くした帳帷を  
垂れた貴人の腰處。  
○腹巻 鎧の一種。  
せわり具足。

楊貴妃ともいひつべし。漢の武帝の時ならば、李夫人かとも疑ふべし。傾城と心得て、屏風におし纏ひてぞ通りける。人もなきやうに思はれて、生きては何の益あるべき。末の世に、いかゞしければ、義朝の子牛若といふもの謀叛をおこし、奥州へ下るとて、鏡の宿にて、強盜にあひて、甲斐なき命生きて、今また忝くも太政大臣に、心をかけたりなどといはれんことこそ悲しけれ。とてもかくても逃るまじと思召し、太刀を抜き、多勢の中へ走り入りたまふ。八人は、左右へさつと散る。由利太郎これを見て、「女かと思ひたれば、世に豪なるものにてありけるものを」とて、散々に切り合ふ。一太刀にと思ひて、もつて開いてむすと打つ。大の男の太刀の寸は、延びたり。天井の縁に太刀打ちつらぬき、引きかぬる處を、小太刀を以て、ちやうと受けとめ、左手の腕に、袖をそへて、ふつとうち落し、返す太刀に首うち落す。藤澤入道は、これを見て、「あ、斬つたり、其處をひくな。」とて、大長刀打ちふりて、走りかゝる。これにかゝり合ひて、散々に斬りあひ給ふ。藤澤入道、長刀を莖長に取りて、するりとさし出す。走りかゝり給ふ。太刀は聞ゆる劔なれば、長刀の柄つんと切りてぞ落されけり。聽て太刀を抜かんとしけるを、抜きも果てさせず、切り付け給へば、兜の眞向、しや面かけて、切り付け給ひけり。吉次は、物の陰にて是れを見て、恐ろしき殿のふるまひかな。いかに我をきたなしと思召さるらんとおもひ、臥したりける帳臺へつと入り、腹巻取つて著、髻解き亂し、太刀を抜き、敵の捨てたる松明

○追つまくつ  
追ひまくりく追ひ  
散らす。  
○屈強 極めて力強  
い。  
○矢庭 即座。  
○手を負ひ 負傷し  
て。

○摺針 摺針峠。  
○義朝淺からず云々  
平治物語にかの長  
者大炊が娘延壽と申  
すは頭殿御志淺から  
ず云々見える。  
○中宮大夫 義朝の  
二男朝長。義朝と同  
じく青幕で死んだ。

うち振り、大庭に走り出でて、遮那王殿と一つになりて、追つまくつ、散々に戦ひ、屈強の者ども五人、矢庭に切り給ふ。二人は手を負ひて北へゆく。一人追ひにがす。残る盗人のこらす落ち失せけり。明くれば宿の東のはづれに、五人が首をかけ、札を書きてぞ添へられける。

音にも聞くらん、目にも見よ。出羽國の住人、由利太郎、越後國の住人藤澤入道以下の首、五人切りて、通るものを、何者とか思ふらん。金商人、三條の吉次がためには縁あり。これを十六にての初業よ。委しき旨を聞きたくば、鞍馬の東光坊の許にて聞け、承安二年二月四日。

とぞ書きて、立てられける。さてこそ後には、源氏の門出すまじたりとぞ、舌を巻きて怖ぢあひける。その日、鏡の宿を立ち給ひけり。吉次は、いとゞかしづき奉りてぞ下りける。小野の摺針うち過ぎて、番場醒井過ぎければ、今日も程なく行き暮れて、美濃國青墓の宿にぞ著き給ふ。これは義朝、淺からず思ひ給ひける、長者があとなり。兄の中宮大夫の墓所を尋ね給ひて、御出であり。夜と共に法華經讀誦して、明くれば卒堵婆をつくり、みづから梵字を書きて、供養してぞ通られける。子安の森をよそに見て、くせ川を打ちわたり、洲股川を曙にながめて通りつ、今日も三日になりければ、尾張國熱田の宮につき給ひけり。



二 遮那王殿元服の事

○いさめごご 教誡  
 ○童 未だ元服しない男。  
 ○かり烏帽子 一時まにあはせの烏帽子烏帽子は元服した男のかぶるもの。  
 ○取りあげ烏帽子 元服の式の時に着用する烏帽子。  
 ○男になりたる 元服して一人前の男になった。  
 ○相傳 相傳譜代。代々傳へて臣下たる者。  
 ○兵衛佐殿の母御前 頼朝の母をいふ。  
 ○熱田の宮司季範の女 大明神 熱田の大明神。  
 ○左馬頭殿 義朝。  
 ○源平 義平。  
 ○進 中宮大夫進。  
 ○兵衛佐 頼朝。  
 ○蒲殿 範頼。  
 ○鎮西八郎 爲義の子爲朝。

熱田の前の大宮司は、義朝の舅なり。今の大宮司は小舅なり。兵衛佐殿母御前も、熱田のそのの濱といふ處にぞ、おはします。父の御かたみと思召して、吉次をもつて申されければ、大宮司、いそぎ御迎へに人をまるらせ、入れ奉り、やうくいたはり奉りける。やがて、次の日立たんとし給へば、様々にいさめごとに参加り、とかくする程に、三日までぞ熱田におはします。遮那王殿、吉次に仰せられけるは、「童にて下らんはわろし、かり烏帽子なりとも著て下らばやと、思ふはいかにすべき。吉次いかやうにも、御計らひ候へ。」とぞ仰せける。大宮司、烏帽子奉り、取りあげ烏帽子を召されける。「かくて下り、秀衡が、名をば何と申すぞ、と問はんととき、遮那王といひて、男になりたるかひなし。これにて、名を更へずして、下り著きたらば、定めて元服せよといはれんすらん。秀衡は、我々が爲には相傳の者なり。他の誹りもあるぞかし。これは、熱田の明神の御前、しかも、兵衛佐殿の母御前も、これに坐す。これにて思ひ立たん。」とて、精進潔齋して、大明神に御参りあり。大宮司、吉次も、御供仕る。二人に仰せけるは、「左馬頭殿の子供、嫡子悪源太、二男進朝長、三男兵衛佐、四男蒲殿、五郎はけんじの君、六郎は京の君、七郎は、悪禪師の君、われは、左馬八郎とこそ、いはるべきに、保元の合戦に、叔父鎮西八郎、名を

○末になるごも 八男で九郎と呼ぶごも  
 ○左馬九郎 左馬頭義朝の九男。  
 ○なにご鳴海 何なる身に地名鳴海を言ひかけた。  
 ○桑平 阿保親王の第五子在原桑平。  
 ○山蔭中將 左大臣藤原魚名の玄孫山蔭高房の子。  
 ○阿野の禪師 義經の同母兄。幼名今若僧となり金成といふ惡禪師。遠江國阿野に居た。  
 ○御曹司 部屋住の若君。義經をさす。  
 ○尋常の閑處 殊勝な閑寂な處で、俗世を離れた生活をいふのたう。  
 ○三衣 僧の着用する大衣七條五條の袈裟。

ながし給ひしことなれば、その跡をつがんことよしなし。末になるとも苦しがるまじ。われは左馬九郎といはるべし。實名は、祖父は爲義、父は義朝、兄は義平と申しける。われは義經といはれん。」とて、昨日までは、遮那王殿、今日は、左馬九郎義經と名をかへて、熱田の宮を過ぎ、なにと鳴海の鹽干潟、三河國、八橋を打越えて、遠江國、濱名の橋を打ちながめて、通らせたまひけり。日頃は、業平、山蔭中將などのながめける名所々々は、多けれども、牛若殿、打ちとけたる時こそ面白けれ。思ひあるときは、名所も舊跡も何ならずとて、うち過ぎたまへば、宇津の山を越え過ぎて、駿河なる浮島が原にぞ著きたまひける。

三 阿野の禪師に御對面の事

これより、阿野の禪師の御許へ、御使参らせ給ひける。禪師大きに悦び給ひて、御曹司を入れ奉り、たがひに御目を見合はせて、過ぎにし方の事ども、物語り續け給ひて、御涙にむせび給ひける。「不思議の御事かな。離れし時は、二歳になり給ふ。この日頃は、何處におはするとも知り奉らず。これ程に成人して、かかる大事を思ひたちたまふ嬉しさよ。我も共にうち出で、一所にて、ともかくもなりたく候へども、たましく釋尊の經法をまなんで、尋常の閑處に入りしより以來、三衣を墨に染めぬれば、甲冑をよろひ、弓箭を帶す



○頭殿 亡父義朝。  
 ○かつうは 且は。  
 ○伊豆の國府 伊豆國の國衙のある處。三島。  
 ○さらぬ外は さうならぬならば。大將軍さなし給はらぬならば。  
 ○在五中將の云々 在原業平が東に下つた時にながめた事。伊勢物語に出てゐる。  
 ○莊 莊園。權勢ある人又は社寺の私有地。  
 ○領主 莊園の持主。  
 ○少納言信西 藤原實兼の子 通憲、出家して信西といふ。少納言で平治の亂に殺さる。  
 ○陵介 諸陵寮の次官。

ること如何にぞやと思へば、うち連れ奉らず。且は頭殿の御菩提をも、誰かはとぶらひ奉らん。かつうは一門の人々の祈りをこそ仕らんすれ、一箇月をだにも、添ひ奉らず、離れ奉らんことこそ悲しけれ。兵衛佐殿も、伊豆國の北條におはしませども、警固の者ども、きびしく守護し奉るとまうせば、文をだにまるらせず、近所を頼みにて音信もなし。御身とても、この度見参し給はん事、不定なれば文を書き置き給へ。そのやうを申すべし。」と仰せられければ、文書きて、跡に留めおき、その日は伊豆の國府に著きたまふ。夜もすがら祈念申されけるは、「南無御堂大明神 走湯權現、吉祥駒形、願はくは、義經を三十萬騎の大將軍となし給へ。さらぬ外は、此の山より西へ越えさせ給ふな。」と、精誠をつくし祈請し給ひけるこそ、十六の盛りには恐ろしき。足柄の宿をうち過ぎて、武藏野の堀金の井をよそに見て、在五中將のながめける、深きよしみを思ひて、下野國莊たかのと云ふ處に著きたまふ。日數ふる程にしたがひて都はとほく東は近くなるまゝに、その夜は、都のこと思召し出されける。宿のあるじを召して、「これは何處の國ぞ。」と御問ひありければ、「下野國。」と申しける。「此の處は郡か莊か。」と宣へば、「下野の莊。」とぞ申しける。「この莊の領主は誰と云ふぞ。」「少納言信西と申しし人の母方の伯父 陵介と申す人の嫡子、陵の兵衛。」とぞ申しける。

#### 四 義經陵が館を焼き給ふ事

○急度 ふじ。ひよつこ。すぐに。  
 ○獅子虎云々 獅子や虎などの猛獸を遠い野に放つと同じく恐ろしい勢を以て仇をなすかも知れぬ。  
 ○自然の事の候はん 時云々 萬一の事のある折、下野國に居りますから御尋ね下さいと陵の兵衛が申した。  
 ○追ひつかんずるぞとて 追ひついたらうぞと云つて吉次を先立たせて自ら陵の家に行かれた。  
 ○世にありし 時世に達つて繁昌して。  
 ○遠侍 中門の傍にあつて警固の侍の詰めてゐる處。  
 ○かねて見参云々 以前にお目にかつた者であります。  
 ○尋常 何さなく品よく立派な。

急度思召し出されけるは、義經が九つの年、鞍馬の寺にありて、東光坊の膝の上に寝ねたりし。あはれ幼き人の御目のけしきや。いかなる人の君達にて渡らせ給ひ候やらん、と言ひしかば、これこそ左馬頭殿の公達と宣ひしかば、あはれ末の世に、平家の爲には大事かな。この人々をたすけ奉りて、日本國に置かれんことこそ、獅子虎を千里の野へ、放つにてあれ。成人し給ひ候はば、必定謀叛をおこし給ふべし。聞きもおかせたまへ、自然の事の候はん時、御尋ね候へ。下野國に下道祖とまうす處に候といひしなり。はるくと奥州へ下らんよりも、陵が許へ行かばやと思召し、吉次をば、「下野の室八島にて待て、義經は人をたづねて、やがて追ひつかんずるぞ。」とて、陵が許へぞおはしける。吉次は、心ならず先立ち参らせて奥州へ下りける。御曹司は、陵が宿所へ尋ねて御覽するに、まことに世にありしとおほしくて、門には、鞍置きたる馬ども、其の數引つ立てたり。さしのごきて見たまへば、遠侍に、屈強の若き者ども、五十ばかり居ながれたり。御曹司は人を招きよせて、「御内に、案内申さん。」と宣ひければ、「いづくよりぞ。」と申す。「京の方より。かねて見参に入りて候者なり。」と仰せけり。主に此の事を申しければ、「いかやうなる人ぞ。」と申せば、「そのすがた、尋常にまします。」と申しければ、「さらば、これへと申せ。」



○かかる事云々か  
ういふ事があつては  
大變だの意。  
○成人したる子供  
陵介の成人したる子  
も。  
○小松殿 平重盛。  
○兄弟誅せられ類  
朝範頼義経など兄弟  
○七條朱雀の方 義  
経の母常習をいふ。  
清盛常習を誅して七  
條朱雀に住はせた。  
○ほうじ ほうし。  
芳志。  
○清盛いかにも云々  
清盛が死んで後。  
○日本一の不覺人  
無類の卑怯未練な人  
○執心云々 たより  
にならぬ者だから執  
念深く思ひ残るこ  
もない。

とて、入れ奉る。陵、いかなる人にて渡らせ給ふぞ。」と申しければ、「幼少にて見参に入  
りて候ひし、御覽じ忘れ候や。鞍馬の東光坊の許にて、何事もあらん時、尋ねよと候ひし  
程に、萬事頼み奉りて下り候。」と仰せられければ、陵、此の事を聞きて、かかる事こそな  
けれ。成人したる子供は、皆京に上りて小松殿の御内にあり。我々が源氏にくみせば、二  
人の子ども、徒らになるべしと思ひわづらひて、暫くうち案じ、申しけるは、「さ思召し立  
たせ給ひ、畏まつて候へども、平治の亂れの時、すでに兄弟誅せられ給ふべく候ひしを、  
七條朱雀の方に、清盛ちかづかせ給ひて、そのほうじにより命を助からせ給ひぬ。老少不  
定のさかひ、定めなき事にて候へども、清盛いかにもなりたまひて後、思召し立たせ給ひ  
候へかし。」と申しければ、御曹司聞召して、あはれ彼奴は、日本一の不覺人にてありける  
や。あはれとは思召しけれども、力およばず、その日は暮したまひけり。頼まれざらんも  
のゆるに、執心もあるべからずとて、その夜の夜半ばかりに、陵の家に、火をかけて、殘  
る處もなく散々に焼き拂ひて、かき消す如くにうせ給ひける。かくて行には、下野國横山  
の原、室の八島、しのの河、關山に人を付けられて、叶ふまじと思召して、墨田川邊を馬  
にまかせて、歩ませ給ひける程に、馬の足早くて、二日に通りける處を、一日に上野國板  
鼻といふ處につき給ひけり。

○まや 雨下。棟の  
前後兩方に葺きおろ  
しにした家作り。  
○情ある住處 心あ  
る人の住みか。  
○竹の透垣 竹を透  
目あるやうならべ作  
つた垣。  
○眞の板戸 杉や檜  
などの板戸。  
○おのれより外に  
お前より外に。  
○優なるが 上品に  
しこやかな女が。  
○當國 上野國。  
○いたはしく 氣の  
毒。  
○餘の方 外の方へ  
○殿の入りせ云々  
主人がお歸りになつ  
て泊められぬといふ  
様な遺憾な事があつ  
たらは其の時こそ。  
○色をも香をも 古  
今集「君ならで誰に  
か見せむ梅の花色を  
も香をも知る人ぞ知  
る。」

五 伊勢三郎義経の臣下に初めて成る事

かくて、日も暮方になりぬ。賤が廳は、軒を並べてありけれども、一夜をあかしたまふ  
べき處もなし。引き入りてまや一つあり。情ある住處とおほしくて、竹の透垣に、横の板  
戸をたてたり。池をほり、汀にむね居る鳥を見給ふにつけても、情ありて御覽すれば、庭  
にうち入り、縁のきはにより給ひて、「御内へ、物申さん。」と仰せられければ、十二三ばか  
りなるはした者出でて、「何事。」と申しければ、「この家には、おのれより外に、大人しき者  
はなきか。人あらば出でよ、云ふべき事あり。」とて、返されければ、主に此の由を語る。  
や、ありて、年の程十八九ばかりなる女の童の優なるが、一間の障子のかけより、「何事候  
ぞ。」と申しければ、「京の者にて候が、當國の多胡と申す處へ、人をたづねて下り候が、此  
の邊の案内知らず候。日ははや暮れぬ。一夜の宿をかしたまへ。」と仰せられければ、此の  
女申しけるは、「やすき程にて候へども、主にて候もの、留守にて候が、今宵夜ふけてこそ  
來り候はんすれ。人に違ひて情なき者にて候。如何なることをか申し候はんすらん。それ  
こそ、御爲いたはしく候へ。いかゞすべき。餘の方へも御入り候へかし。」と申しければ、  
「殿のいらせたまひて、無念のこと候はば、その時こそ、虎ふす野邊にもまかり出で候は  
め。」と仰せられければ、女、思ひみだしたり。御曹司、「今夜一夜は、唯かし給へ。色をも



○遠侍 中門の處に設けられた警固の武士の詰所。  
 ○いかに云々 ざうしようか。  
 ○一河の流れ云々 同じ河の水を汲むのも前世からの縁である。  
 ○遠侍には云々 遠侍ではしかたがあるまい。  
 ○一閑所 一室。  
 ○菓子 食膳の外で食ふ物の總稱。  
 ○聞召し入れたまはず 召しあがらず。  
 ○えせ者 見苦しき者。馬鹿者。  
 ○相構へて よく注意して決して。  
 ○八聲の鳥 曉方に鳴く鳥。  
 ○ましてやいはん いはんやまして。  
 ○葎の落葉云々 葎の枯葉の模様ある淺葱色の直垂。  
 ○手鉾 片手で持ち扱ふ位の鉾。  
 ○薙鎌 草刈鎌の形をした武器。  
 ○ちぎりき 乳切木棒の如き杖。  
 ○さいぼう 撒棒。木又は鐵の棒。

香をも、知る人ぞしる。」とて、遠侍へするりと入りてぞ坐しける。女力及ばず、内に入りて大人しき人に、「いかにせんずるぞ。」と云ひければ、「一河の流れを汲むも、皆これ他生の縁なり。何かくるしく候べき。遠侍には、かなふまじ。」一閑所へ請じ奉り、様々の菓子を取り出して、御酒すゝめ奉れども少しも聞召し入れたまはず。女申しけるは、「この家の主は、世に超えたるえせ者に候。相構へて、見えさせたまふな。御燈火を消し、障子引き立てて、御休み候へ。八聲の鳥も鳴き候はば、御心ざしの方へ、急ぎ御出で候へ。」と申しければ、「うけたまはり候ひぬ。」とぞ仰せける。如何なる男を持ちて、これ程には怖づらん。おのれが男に越えたる、陵が家にだに火をかけ、さんぐに焼き拂ひて、これまで来りつるぞかし。ましてやいはん、女の情ありて、留めたらんに、男来りて憎氣にも申さば、何時のために持ちたる太刀ぞ。これござんなれと思召し、太刀抜きかけて、膝の下にしき、直垂の袖を顔にかけて、虚寝入してぞ待ち給ふ。立て給へと申しつる障子をば、ことに廣くあげ、消したまへと申しつる火をば、いと高くかき立て、夜のふくるに従ひて、今やくと待ちたまふ。子の刻ばかりに成りぬれば、主の男、出で来り、横の板戸を押し開き、内へ入るを見給へば、年のころ二十四五ばかりなる男の、葎の落葉つけたる淺葱の直垂に、萌黄絨の腹巻に、太刀佩いて、大の手鉾を杖につき、われに劣らぬ若黨四五人、猪の目ほりたる鉞、刃の薙鎌、長刀、ちぎりき、さいぼう、手々に持ちて、

○四天王 帝釋天の外臣、持國天王、廣目天王、增長天王、多聞天王。  
 ○けなげ者 健氣な者、殊勝な勇ましい男。  
 ○二閑 柱間の二つある座敷。  
 ○查脱 戸口縁側なごの履物をぬく處。  
 ○世に憎氣に 如何にも甚しく憎氣に。  
 ○あは あはや。事の危急な時の驚嘆詞。  
 ○打ちわび うち歎き。  
 ○和御前を云々 なた。御身。御身を東國の邊鄙なはての者と思つた。  
 ○志賀の都 狭い土地故にいふか。又は湖山に圍まれ一方しか開けぬ故にいふか。  
 ○ふくろ心 袋の如く狭い心の意か。袋の如く一方しかあかぬ心の意か。袋の如き慈悲心か。

たゞいま事に逢ひたるけしきにて、四天王のごとくにして出で来る。女の身に、怖れつるも道理かな。きやつは、けなげ者かなとぞ御覽じける。彼の男、二閑に人ありと見て、查脱に上りあがりける。大の眼を見開きて、太刀取り直し、「これへ。」とぞ仰せられける。男は、けしからず思ひて、返事も申さず、障子引き立てて、足ばやに内に入る。何様にも女に逢うて、にくけなる事いはれんすらんと思召して、壁に耳をあてて聞き給へば、「や御前御前。」と押し驚かせば、暫時は音もせず。遙かにして寐覺めたる風情して、「いかに。」といふ。「二閑にねたる人、誰。」といふ。「我知らぬ人なり。」とぞ申しける。「されども知られず知らぬ人をば、男のなき跡に、誰がはからひに置きたるぞ。」と世に憎氣に申しければ、あは、事こそ出で来たると、聞召しけるほどに、女、申しけるは、「知らぬ人なれども、日は暮れぬ、行き方は遠しと、打ちわび給ひつれども、人のおはしまさぬ跡に留めまらせては、御言葉の末も知り難く侍れば叶はじと申しつれども、色をも香をも知る人ぞしる。仰せられつる御言葉に恥ぢて、今夜の宿をまるらせつるなり。いかなる事ありとも、今宵ばかりは、何か苦しかるべき。」と申しければ、男、「さてもく、和御前をば、志賀の都のふくろ心は、東の奥のものにこそ思ひつるに、色をも香をもしる人ぞ知ると、仰せられけることばの末をわきまへて、宿を貸しぬるこそやさしけれ。何事有りとも、苦しかるまじきぞ。今宵一夜はあかさせ参らせよ。」とぞ申しける。御曹司、あはれ、然るべき佛神の御



○事に逢うたる人  
事變に逢つた人。慶  
介の館に火を放つた  
事が義經の顔色にで  
も顯はれたのであら  
う。  
○ちうじちうやう  
珍事中天。非常の災  
難。一大事。  
○はしたもの 召使  
ひの者。  
○瓶子 酒德利。  
○御宿直 宿直して  
警固する意。  
○四天 四天王。  
○暮日云々 暮日は  
謎の一種で、暮目を  
射て弓弦を鳴らして  
魔を除けるのである  
○出居 客に應接す  
る室。  
○燭臺 燭臺の形し  
た油火をさすもの  
○腹巻 籠の一種。  
○矢束 箭の矢をた  
はねるもの。  
○自然の時 萬一の  
時。

恵みかな。憎けなることをだにもいはば、ゆゑしき大事は出で来んと思召しける。主いひけるは、「いか様にも、この殿は、たゞ人にてはなし。近くは三日、遠くは七日のうちに、事に逢うたる人にてぞあるらん。我も人も世になし者のちうじちうやうに逢ふ事、つねの習ひなり。御酒を申さばや」とて、様々の菓子どもを調へて、はしたものに瓶子いだかせ、女を先に立てて二間にまゐり、御酒す、め奉る。されども敢て食召したまはず。主申しけるは、「御酒きこし召し候へ。いかさま、御用心と覚え候。姿こそあやしの男にて候とも、某かくて候上は、「御宿直仕り候べし。人はなきか」と呼びければ、四天の如くなる男、五六人出で来る。「御客人をまうけ奉るぞ。御用心とおほえ候。今宵は寐られ候な。御宿直仕れ。」といひければ、「承り候。」とて、臺目のおと、弓の弦おし張りなどして、御宿直仕り、我が身も、出居の蔀あけて燈臺二所に立てて、腹巻取つて側におき、弓おし張り、矢束解いて、押しくつろけて、太刀取つて膝の下に置き、あたりに犬の吠え、風の木末をならすをも、「誰、あれ斬れ。」とぞ申しける。其の夜は寝もせで明しける。御曹司あはれきやつは、健氣ものかなと思召しけり。明くれば御立ちあらんとしたまふを、様々に申しとゞめ奉り、苟且のやうになりつれども、こゝに二三日とゞまりたまひけり。あるじの男、申しけるは、「そもく都にては、いかなる人にて渡らせ給ひ候ぞ。我等も、知る人の候はねば、自然の時は尋ねまらるすべし。今一兩日も、御逗留候へかし。」と申す。「東山道

○下野の左馬頭 下  
野守左馬頭源義朝。  
○男になりて 元服  
して。  
○自然として 偶然  
の事。  
○あら無慙 あら痛  
はしや。  
○かんらひ かなな  
ぎ。親、神を齋き祀  
り神樂を奏しなす  
る者。  
○下面 参詣しての  
歸り。  
○乗合 乗物に乗つ  
て出逢ふこと。貴人  
に對して下車しな  
かつたので。  
○果報拙き者 前世  
の因縁が悪くて不幸  
な者。運のわるい者

へ、かゝらせ給ひ候はば、碓氷の峠、東海道にかゝらば、足柄まで送りまらるすべし。」と申しければ、都になからん者ゆゑに、尋ねられんといはんも詮なし。此の者を見るに、二心なんどはよもあらじ。知らせばやと思召し、「これは奥州の方へ下るものなり。平治の亂に亡びし下野の左馬頭が季の子に牛若とて、鞍馬に學問して候ひしが、いま男になりて、左馬九郎義經と申す者なり。奥州へ秀衡を頼みて下り候。今自然として知る人になりたることこのうれしさ。」と仰せければ、主の男、こはいかにといふまゝに、御前へまゐりて御袂にしかと取りつき、何ともものをばいはずして、はらくとぞ泣き居たり。「あら無慙や、此方より問ひ奉らずば、いかでか知り奉るべきぞ。」と申しける。「我等がためには、重代の君にて、御わたり候ものを、かくまうせば、いかなる者ぞと思召すらん。親にて候ひしものは、伊勢國二見の者にて候。伊勢のかんらひ義連と申して、大神宮の神主にて候ひけるが、一年都にて、清水に詣で給ひしに、下向の折節、九條の上人と申すに乗合し、これを罪科にて、上野國成島と申す處に、流され參らせて、年月を送りしに、故郷を忘れんその爲に、妻女をまうけて候ひしが、頓て懷妊仕り、七月になり候に、かんらひ終に御赦免もなく、この處にて空しくなる。その後、母にて候者の、胎内に宿りながら、父に別れて、果報拙き者なりとて、棄て置き候を、母方の伯父にて候者、不便のことと思ひて育てられ成人し、十三と申すに、元服せよと申し候ひしに、我が父といふもの如何なる人にてあり



○さかくの返事 何さかさかの返事。  
 ○左馬頭殿 義朝。  
 ○おのれ 汝。  
 ○平家の世になり 天下は平家一門繁昌して。  
 ○三世の契り 主従の因縁で過去現在未來の三世に互る契り。  
 ○八幡大菩薩 源氏の守護神。  
 ○また心なく 二心なく。  
 ○御身に添ふ影の如く 暫くも離れぬさまにいふ。  
 ○鎌倉殿の御中云々 義經兄頼朝と不和になつたこと。  
 ○和御前 御身。  
 ○これにて 此處にて。  
 ○人にも見えたまへ 他の人に再婚せよ

けるやと、母に問ひしとき、母は涙に咽び、とかくの返事も申さず、暫時ありて、汝が父は、伊勢國二見の浦の人とかや、名は、伊勢のかんらひ義連といひしなり。左馬頭殿のことに不便に思召されしに、思ひの外的事ありて、此の國に有りし時、おのれを懐妊して、七月と申すに、遂に空しく成りしなりと申ししかば、父は伊勢のかんらひとひけければ、我をば、伊勢二郎と申し、父が義連と名のれば、我は義盛と名のり候。此の年ごろ、平家の世になり、源氏は、みな滅びはてて、たまく残りともまり給ひしも、おし籠められ、散りくにならせ給ふと承りしほど、たよりも知らず候へば、尋ねまらする事もなし。心に物を思ひしに、唯今君を拜み参らせ候こと、三世の契りと申しながら、ひとへに八幡大菩薩の、御引合はせとこそ、存じ候へ。」とて、來し方行く末の物語どもを、たがひに申し給ひつ、たゞ苟且のやうにありしかども、その時御目に懸り参らせて、また心なくして御供申し、奥州へくだり、治承四年、源平の亂れ出で來しかば、御身に添ふ影の如くに、鎌倉殿の御中不快にならせたまひし時までも、奥州に御供して、名を後代にあけたりし伊勢三郎義盛とは、その時の宿の主なり。義盛、内に入りて、女房に向つて、「いかなる人ぞとおもひしに、我がためには、相傳の御主にて渡らせたまひけるぞや。さればこれより御供して、奥州へくだるべし。和御前は、これにて明年の春のころまで待ち給へ。もしその頃も過ぎ行かば、はじめて人にも見えたまへ。たとひ人に見えたまふとも、義盛がこ

○馴れての後はそぞ悔しき 實方歌集に見當らず國歌大觀にも見當らず。  
 ○淺香の沼 岩代國山之井村といふ。  
 ○淺香山 萬葉集卷十六「安積山影さへ見ゆる山の井のあさき心をわが思はなくに。」  
 ○すり衣 染草で摺つて模様をつけた衣  
 ○今の心地して 陵の介の館に放火したのを今現在の事の様な氣がして恐れた。  
 ○自然の事 萬一の事。

と忘れ給ふな。」と申しければ、女房泣くより外のことぞなき。「たゞ假初の旅だにも、主の跡は物憂きに、飽かで別る、面影を何時の世にかは忘るべき。」と、歎けど甲斐ぞなかりける。剛の者の癖なれば、一筋に思ひ切りて、やがて御供してぞ下りける。下野の室の八島を餘所に見て、宇都宮の大明神を伏し拜み、行方の原にさしかり、實方の中將の、あたりの野邊の白檜弓、おしはり、すびきし肩にかけ、なれぬほどは何れをそれん、馴れての後はそぞ悔しきと詠めけん、あたりの野邊を見て過ぎ、淺香の沼のあやめ草、影さへ見ゆる淺香山、まづく馴れにし信夫の里のすり衣など申しける、名所々々を見たまひて、伊達郡あつかしの中山越えたまひて、まだ曙の事なるに、道行き通るを聞きたまひて、今追ひついて物問はん、此の山は、當國の名山にてあるなるにとて、追つついて見たまへば、御先に立ちたる吉次にてぞ有りける。商人の習ひにて、此處彼處にて日を送りける程に、九日先に立ち参らせたるが、今追ひつき給ひける。吉次、御曹司を見付け参らせて、世に嬉しくぞ思ひける。御曹司も御覽じて嬉しくぞ思召す。「陵が事は如何に。」と申しければ、「頼まれず候間、家に火をかけて、散々に焼き拂ひ、これまで來たるなり。」と仰せられければ、吉次、今の心地して恐ろしくぞおもひける。「御供の人は如何なる人ぞ。」と申せば、「上野の足柄の者ぞ。」と仰せられける。「今は御供も入るまじ。君御著き候て後、尋ねて下り給へ。跡に妻子の歎き給ふべきも、いたはしくこそ候へ。自然の事候はん時こそ、御



○武隈の松 陸前岩  
 招の西。歌枕。  
 ○鹽竈 陸前松島灣  
 に臨む。海邊は千賀  
 の浦といふ。鹽が島  
 はその海上にある。  
 ○顯佛上人 松島に  
 居たといふ高僧。元  
 亨釋書にある。  
 ○姉葉の松 陸前に  
 ある。歌枕。

○瑞相 めでたき前  
 兆。  
 ○頭殿の公達 左馬  
 頭義朝殿の御息息。  
 ○烏帽子取つて引つ  
 こみ 烏帽子引かぶ  
 り。  
 ○狂言綺語 ざれご  
 こや巧みに飾つた言  
 葉。  
 ○いたはり 病氣。  
 ○事々しからぬ様  
 仰山ならぬ様子。

供候はめ。」とて、やう／＼に止めければ、伊勢三郎をば上野へぞかへされける。それよりして、治承四年を待たれけるこそ久しけれ。かくて夜を日についで下りたまふほどに、武隈の松、阿武隈川と申す、名所々々を過ぎて、宮城野の原、躑躅の岡を詠めて、千賀の鹽竈へ詣で給ふ。あたりの松、籬の鳥を見て、顯佛上人の舊跡松島を拜ませ給ひて、紫の大明神の御前にぞ参り給ひ、御祈誓申させ給ひて、姉葉の松を打ちながめ、栗原にも著き給ふ。吉次は、栗原の別當の坊に入れ奉りて、我が身は平泉へぞ下りける。

六 義經秀衡に御對面の事

吉次は、急ぎ秀衡に此の由申しければ、折節、風の心地し伏したりけるが、嫡子、元吉冠者泰衡、二男、泉冠者基衡を呼びて申しけるは、「さればこそ、過ぎし頃黄なる鳩來りて、秀衡が家の内に飛び入ると夢に見えたりしかば、いかさま、源氏のおとづれ、うけたまはらん瑞相やらんと思ひつるに、頭殿の公達の御下りあるこそうれしけれ。かき起せ。」とて、人の肩を押へて、烏帽子取つて引つこみ、直垂取つて打ちかけ、申しけるは、「この殿は、幼くおはするとも、狂言綺語の戯れも、仁義禮智信も、正しくぞおはすらん。この程のいたはりに、さこそ家の内も見苦しかるらん。庭の草取らせよ。泰衡、基衡、はやはや出でて御迎ひに参れ。事々しからぬ様にてまるれ。」と申されければ、畏まつて承り、其

○大衆 多くの僧徒  
 な地頭なごをいふ。  
 ○塙飯 飯盛の飯の  
 義で、飯盛振舞の響  
 盛んなる響應。  
 ○引出物 饗宴の時  
 主人から客に出す贈  
 物。  
 ○白皮 白いもみ草  
 ○白鞍 鞍の前輪後  
 輪に銀を張つたもの  
 ○引きにける 引出  
 物として贈つた。  
 ○御邊 御身。  
 ○徳つきて 利益を  
 得て。  
 ○多聞 鞍馬の本尊  
 多聞天。

の勢二百五十餘騎、栗原寺へぞ馳せ参る。御曹司の御目にかゝる、栗原の大衆五十人、送り参らする。秀衡が申しけるは、「これまで遙々御入り候事、返す／＼畏まり入り存じ候。兩國を手に握りて候へども、思ふやうにも振舞はれず候。今は何の憚りか候べき。」とて、泰衡を呼びて申しけるは、「兩國の大名、三百六十人をすぐりて、日々の塙飯を参らせて、君を守護し奉れ。御ひきでものには、十八萬騎持ちて候郎等を、十萬をば二人の子供に賜ひ候へ。今八萬をば君に奉る。君の御事は、さて置きぬ。吉次が御供申さでは、いかでか御下り候べき。秀衡を秀衡と思はん者は、吉次に引出物せよ。」と申しければ、嫡子泰衡、白皮百枚、鷲の羽百しり、良き馬三十疋、白鞍置きてぞ引きにける。二男基衡も、これに劣らず引出物しけり。その外、家の子郎等、我劣らじと引きにける。秀衡、これを見て、「獅子の皮も鷲の尾も、今はよも不足あらじ。御邊の好む物なれば。」とて、貝摺りたる唐櫃の蓋に、砂金一蓋入れてぞ取らせける。吉次、この君の御供し、道々の難を遁れたるのみならず、徳つきて斯かる事にも逢ひけるものよ。ひとへに多聞の御利生とぞ思ひける。かくて商ひを仕り候とも、よき資本を儲けたり、不足あらじと思ひ、京へ急ぎ上りたまひけり。かくて今年も暮れければ、御年十七にぞ成り給ふ。さても年月を送り給へども、秀衡も申す旨もなし。御曹司も如何あるべきとも、仰せ出されず。中々都にだにもあるならば、學問をも遂げ、見度きことを見るべきに、かくても叶ふまじ。都へ上らばやとぞ思



○假初の歩き 旅行などではなく一寸した外出。  
 ○木曾の冠者 爲義の孫義仲をいふ。冠者は元服して冠を著けた若者。  
 ○機嫌 時機。様子。  
 ○御門 禁裏の御門の意から天子を申す。  
 ○異朝 支那。  
 ○樊噲 漢高祖の臣。  
 ○坂上田村麿 刈田麿の子。桓武平城の朝の人。  
 ○利仁 藤原魚名の子孫、醍醐の朝の人。  
 ○あくしのかまろ あかがしらの四郎共に正史に見えず、俗傳たらう。  
 ○せいたんむしや 性短武者か。  
 ○田原藤太秀郷 藤原魚名の裔。下野掾押領使となり將門を滅ぼした。下野武蔵兩國の守鎮守府將軍

ひける。泰衡にいふとも叶ふまじ。知らせずして、上らばやと思召し、假初の歩きのやうにて、京へ上らせ給ふとて、伊勢三郎が許におはして、暫くやすらひて東山道にかゝり、木曾の冠者の許におはして、謀叛の次第を仰せ合はされて都に上り、片邊の山科に知る人ありける處に渡らせ給ひて、京の機嫌をぞ窺ひ給ひける。

七 鬼一法眼の事

爰に代々の御門の御寶、天下に秘藏せられたる十六卷の書あり。異朝にも我が朝にも、傳へし人一人として愚かなる事なし。異朝には太公望、これを讀みて八尺の壁に上り、天に上る徳を得たり。張良は、一卷の書と名付けて、これを讀みて、三尺の竹に上りて虚空をかける。樊噲は、これを傳へて、甲冑をよろひ弓箭を取つて、敵に向ひて怒れば、頭の兜の鉢をとほす。本朝の武士には、坂上田村麿これを讀み傳へて、あくしのかまろを取り、藤原利仁これを讀みて、あかがしらの四郎將軍を取る。それより後は絶えて久しかりけるを、下野國の住人相馬小次郎將門これを讀みつたへて、我が身のせいたんむしやなるに依つて、朝敵となる。されども天命を背く者の、やゝもすれば世を保つ者すくなし。當國の住人、田原藤太秀郷は、敕宣をさきとして、將門を追討のために東國に下る。相馬小次郎、防ぎ戦ふと雖も、四年に味方滅びにけり。最後の時威力を修してこそ、一張の弓

○陰陽師 古昔の陰陽寮に屬した官。ト筮なごを掌る。  
 ○櫓 城壁なごの上につけた高樓。  
 ○くわしよく 過飾華飾。贅澤。清越。  
 ○侍の縁 侍所の縁側。侍所は武士の出仕する處。  
 ○おのれ 汝。  
 ○さん候 さやうで御座います。  
 ○急度いひて 確かに云つて。  
 ○然るべき人達云々 相應な身分の人たちの御出での時でも  
 ○代官 代理。  
 ○きやつ 彼奴。

に八つの矢はけて、一度にこれを放つに、八人の敵をば射たりけれ。それより後は、又絶えて久しく讀む人もなし。唯徒らに代々の御門の御寶藏に、籠め置かれたりけるを、その頃一條堀河に、陰陽師の法師に鬼一法眼とて、文武二道の達人あり、天下の御祈禱してありけるが、これを賜はりて、秘藏してぞ持ちたりける。御曹司、これを聞き給ひて、頼て山科を出でて、法眼の許に佇みて見たまへば、京中なれども居たる處もした、かにこしらへ、四方に堀をほりて水をた、へ、八つの櫓をあけたりけり。夕には、申の刻、酉の時になれば、橋をばづし、朝には、巳午の刻まで門を開かず、人のいふ事、耳のよそになして居たる、大くわしよくの者なり。御曹司さし入りて見給へば、侍の縁のきはに、十七八許りなる童一人た、すみてあり。扇差上げて、招き給へば、何事ぞと申しける。「おのれは内の者か。」と仰せられければ、「さん候。」と申す。「法眼はこれに候か。」と仰せられければ、「これに。」と申す。「さらば、おのれに頼むべき事あり。法眼にはんずる様は、門に見も知らぬ冠者、物申さんといふと、急度いひて歸れ。」と仰せられける。童申しけるは、「法眼は、くわしよく世に越えたる人にて、然るべき人達の御入りの時だにも、子供を代官に出し、我は出で合ひ參らせぬくせ人にて候。ましておのくの様な人の御出でを賞翫候て、對面ある事候まじ。」と申しければ、御曹司、「きやつは、不思議のものいひ事かな。主もいはぬさきに、人の返事をすべからん事はいかに。入りてこの様を、言ひて歸れ。」と



○御渡り候 御出でなさいませ。  
 ○邸等 家來。  
 ○見達 ちこは天台真言などの寺で召使つた童。  
 ○かね黒 鐵髪で齒をそめたこと。  
 ○眉取り 鬘をつけ。  
 ○腹巻 鎧の一種。  
 ○ござんなれ こそあるなれ。  
 ○世に無者 世に隠れた日陰者。  
 ○太刀のむね 太刀の背。太刀のみね。  
 ○生絹 練らぬ生絲の織物。  
 ○ひつかうで 引きかぶりて。  
 ○凡下 身分のない賤民。  
 ○縁より下云々 縁より下におり立ちて畏まるたらうと思つたにの意。

ぞ仰せられける。「申すとも、御用るあるべしとも覺え申さず候へども、申して見候はん。」とて、内に入り、主の前にひざまづき、「かかることこそ候はね。門に、年の頃十七八かと覺え候小冠者一人、た、すみ候が、法眼はおはるかと思ひ奉り候ほどに、御渡り候と申して候へば、御對面あるべきやらん。」と申しける。「法眼を、洛中にて見させて、左様にいふべき人こそ覺えね。人の使か、おのれが言葉か、よく聞きかへせ。」と申しける。童申しけるは、「此の人の氣色を見候に、主など持つべき人にてはなし。また郎等かと思候へば、折節に直垂を召して候。兒達かと覺え候。かね黒に眉取り候が、良き腹巻に、金作の太刀を佩かれて候。あはれ、この人は、源氏の大将軍にておはしますござんなれ。この程世を亂さんとうけたまはり候が、法眼は、世に越えたる人にて御渡り候へば、一方の大将軍とも頼み奉らんするために、御入り候やらん。御對面候はん時も、世に無者など仰せられ候ひて、持ちたまへる太刀のむねにて、一打ちもあてられさせ給ふな。」と申しける。法眼これを聞きて、「けなげ者ならば、行きて對面せん。」とて出でたち、生絹の直垂に、緋織の腹巻著て、草履をはき、頭巾耳の際までひつかうで、大手鉾を杖につきて、縁とう／＼と踏みならし、暫く凝視りて、「抑法眼に物いはんといふなる人は、侍か凡下か。」とぞいひける。御曹司、門の脇より、するりと出でて、「某申すにて候ぞ。」とて、縁の上に上り給ひける。法眼これを見て、縁より下におり立つて畏まらんとするに、思ひの外に、法

○天上 殿上のあて字か。  
 ○私ならぬものぞ 個人の私すべからぬものであるぞ。  
 ○理を枉げて 無理にも。  
 ○狼藉者 亂暴者。  
 ○しやつ そやつの轉。罵つていふ詞。  
 ○しかん ぞれぞれと定まつて。  
 ○堅牢地神 佛教の語。下にあつて大地を司る神。  
 ○つぎたる首 殺されて首と離れ離れるべきに生きて首をついたの意。  
 ○四條の聖 四條の御堂に居た正門坊。

眼にむすと膝をきしりてぞ居たりける。「御邊は、法眼に、物いはんと仰せられける人か。」と申しければ、「さん候。」「何事仰せ候べき、弓の一張、矢の一筋などの御所望か。」と申しければ、「やあ御坊、それほどのこと企てて、これまで來らんや。まことか御坊は、異朝の書を將門が傳へし六韜兵法といふ文、天上より賜はりて、秘藏して持ちたまふとな。その文、私ならぬものぞ。御坊もちたればとて、讀み知らずば、をしへ傳ふべき事もあるまじ。理を枉げて、某にその文見せ給へ。一日の中に讀みて、御邊にも知らせをしへて返さんぞ。」と仰せありければ、法眼、齒齧をして申しけるは、「洛中にこれ程の狼藉者を、誰がはからひとして、門より内へ入れけるぞ。」と言ふ。御曹司思召しけるは、憎い奴かな。のぞみをかくる六韜こそ見せざらめ。剩へあら言葉をいふこそ不思議なれ。何時の用に帶したる太刀ぞ。しやつ斬つてくれればやと思召しけるが、よし／＼、しかん、一字をも讀まずとも、法眼は師なり、義經は弟子なり。それを背きたらば、堅牢地神の恐れもこそあれ。法眼をたすけてこそ、六韜兵法のありどころを知らんずれと、思召しなほし、法眼を助けてこそいられけるは、つぎたる首かなと見えし。そのま、人知れず、法眼が許にて、明し暮し給ひける。出でてより、飯をした、め給はねども、瘦せ衰へましたまはず、日にしたがひて、美しき衣がへななど召されけり。何處へ坐しけるやらんとぞ、人々怪しみをなす。夜は、四條の聖の許にぞおはしましける。かくて法眼が内に、幸壽の前とて女あ



○次の者 一段低い地位の者。申しき者  
 ○あらはあり云々 居たらは居るまじ  
 て注意し、居なければ居ないまじして注意せよ。人々物をいふな。  
 ○ござんなれ こそあるなれ。  
 ○いんぢの大將 磔を打投ける兒童の戯で印地打ちといふのがある。その大將といふので野武士のあぶれ者をいふ。  
 ○上臈婿 年功を積んだ位の高い婿。  
 ○さいはひ 婚嫁して。  
 ○しれごみ 愚かな事。  
 ○方人 身方。  
 ○此の世ならぬ契り 前世からの因縁で此の世だけの契りでない。  
 ○斜ならず 一通りならず。

り。次の者ながら、情ある者にて、常は訪らひ奉りけり。自然知人なるまゝ、御曹司、物語のついでに、「抑法眼は何といふぞ。」と仰せられければ、「何とも仰せ候はぬ。」と申す。「さりながら。」と問はせ給へば、「過ぎし頃は、あらばありと見よ、なくばなきと見て、人々ものないひそとこそ仰せ候ひし。」と申しければ、「義經に心ゆるしもせざりけるござんなれ。まことは、法眼に子は幾人有る。」と問ひたまへば、「男子二人、女子三人、弟二人。」  
 「家にあるか。」「はやと申す處に、いんぢの大將して御入り候。」又三人の女子は何處に有るぞ。」  
 「處々に幸ひて、皆上臈婿を取りて渡らせ給ひ候。」と申せば、「婿は誰。」  
 「嫡女は平宰相信業の卿の方、一人は鳥飼の中將にさいはひ給へる。」と申せば、「何條法眼が身として上臈婿取ること過分なり。法眼世に越えて、しれごとをするなれば、人々に面打たれん時、方人して家の恥をも清めんとはよも思はじ。それよりも、われ／＼斯様にある程に、婿に取りたらば、舅の恥をすゝがんものを。主にさいへ。」と仰せられければ、幸壽、此事を承りて、「女にて候とも、左様に申して候はんずるには、首を斬られ候はんずるにて候。」と申しければ、「斯様に知る人に成るも、此の世ならぬ契りにてこそあらめ。隠して詮なし。人々に知らすなよ、われは、左馬頭の子源九郎といふ者なり。六韜兵法といふものに望みをなすによりて、法眼も心よからねども、斯様にてあるなり。その文のありどころ知らせよ。」とぞ仰せける。「いかでか知り候べき。それは法眼の斜ならず重寶とこそ承りて候へ。」と申せば、「扱は、いかゞせん。」とぞ仰せける。「さ候はば、文を遊ばして、賜はり候へ。法眼のなめならず寵愛の姫君の方へ、人にも見えさせ給はぬをすかして御返事を取りて參らせ候はん。」と申す。「女性の習ひなれば、近づかせ給ひて候はば、なか此の文、御覽せで候べき。」と申せば、次の者ながらも、斯様に情ある者もありけるかやと、文遊ばして賜はる。我が主の方に行き、やう／＼にすかして、御返事取りて參らす。御曹司、それよりして、法眼の方へはさし出で給はず、たゞおほかたに引籠りてぞおはしける。法眼が申しけるは、「斯かる心地よき事こそなけれ。目にも見えず、音にも聞えざらん方に、行き失せよかしと思ひつるに、失ひたるこそうれしけれ。」とぞ宣ひける。御曹司、「人にしのお程、けに心苦しきものはなし。何時までかくて有るべきならねば、法眼にかくと知らせばや。」とぞ宣ひける。姫君、御袂にすがり悲しみ給へども、「我は六韜に望みあり。さらばそれを見せ給ひ候はんにや。」と宣ひければ、明日聞きて、父に失はれんこと力なしと思ひけれども、幸壽を具して、父の祕藏しける寶藏に入りて、重々の巻物の中に、鐵卷したる唐櫃に入りたる六韜兵法、一卷の書を取り出して奉る。御曹司、悦び給ひて、ひき廣げて御覽じて、晝は終日に書き給ふ。夜は終夜これを復し給ひ、七月上旬の頃よりこれをよみはじめ、十一月十日頃になりければ、十六卷を一字も残らず覚えさせ給ふ。讀み給ひての後は、此處にあり、彼處にありとぞ振舞はれけるほどに、法眼もはや心得て、「さもあ

○すかして さまじ

○やう／＼ さまじ

○人にしのぶ 人に隠れる。

○明日聞きて 明日父に聞かれて。

○此處にあり彼處にあり 此處に居るあそこ居ると姿をみせて隠れず居た。



○世になし源氏 世に隠れてゐる日陰者の源氏。  
 ○六波羅 清盛の邸。  
 ○なじかは ぎょうしてか。  
 ○今生は この世では。  
 ○五逆の罪 殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血。  
 ○行にて 修驗者として修めるべき業がある故。  
 ○四間 餘聞。正殿に接した間。寺院で内陣に接した左右の間をいふ。  
 ○夕さり 夕方。  
 ○すかし出す 欺いて誘ひ出す。  
 ○善惡 善し惡しきも。ともかく。  
 ○何條 ぎょうして。下の何事かあるべきにかゝる。

れ、その男は何故に、姫が方にはあるぞ。」と怒りける。ある人の申しけるは、御方におはします人は、左馬頭の公達と承り候よし申せば、法眼聞きて、世になし源氏入れ立てて、すべて六波羅へ聞えなば、なじかはよかるべき。今生は子なれども、後の世の敵にてありけりや。斬りて棄てばやと思へども、子を害せんこと、五逆の罪のがれがたし、異姓他人なれば、これを切つて、平家の御見参に入りて、勳功にあづからばやと思ひて、うかゞひけれども、我が身は行にて叶はず。あはれ心も剛ならん者もがな、斬らせばやと思ふ。その頃北白川に、世に越えたる者あり。法眼には妹婿なり。しかも弟子なり。その名を湛海坊とぞ申しける。かれが許に使者を遣はし申しければ、程なく湛海きたり。四間なる處に入れて様々にもてなし、申しけるは、「御邊を喚び奉ること、別の仔細になし。去春の頃より、法眼が許に、さる體なる冠者一人、下野の左馬頭の公達など申す。助け置きては悪しかるべし。御邊より外に頼むべき人もなし。夕さり五條の天神へ参り、この人をすかし出すならば、首を斬つて見せ給へ。さもあらば、五六年望み給ひし六韜兵法をも、御邊に奉らん。」といひければ、「さ承りぬ。善惡まかり向ひてこそ見候はめ。抑いかやうなる人にておはしませ候ぞ。」と申しければ、「未だ年も若く、十七八かと覺え候。よき腹巻に、金作の太刀の心も及ばぬを持ちたるぞ。心許し給ふな。」と申しければ、湛海これを聞きて、申しけるは、「何條、それ程の小男の、分に過ぎたる太刀佩いて候とも、何事か有るべき。

○こころし 仰山らしい。  
 ○見参に入り候べき由 御目に掛りませうといふ旨。  
 ○世に心ちよけに 甚しく愉快さうに。  
 ○尊けに見えんがため 尊いらしく見られんがため。  
 ○素絹の衣 白絹の僧服。  
 ○跡なし入 筋目なき人。  
 ○淺ましき次の者 みすほらしい卑賤の者。  
 ○さ承り候 其の事承知致した。

一刀にはよも足り候はじ、ことごとくし。」とつぶやきて、法眼がもとを出でにけり。法眼すかしおふせたりと、世に嬉しけにて、日來は音にも聞かじとしける御曹司の方へ、申しけるは、見参に入り候べき由を申しければ、出でて何にかせんと思召しけれども、呼ぶに出ずば臆したるにこそと思召し、「やがて参り候べき。」とて、使をかへしたまひける。此の由を申しければ、世に心ちよけにて、日頃の見参所へ入れ奉り、尊けに見えんがために、素絹の衣に、袈裟かけて、机に法華經一部おきて、一の卷の紐をとき、妙法蓮華經と讀みあぐる處へ、憚る處なくつゝと入り給へば、法眼片膝を立て、「これへ。」と申しける。すなはち法眼と對座に直らせ給ふ。法眼申しけるは、「去んぬる春の頃より、御入り候とは知りまらせて候へども、如何なる跡なし人にて渡らせたまふやらんと、思ひまらせて候へば、忝くも、左馬頭殿の公達にてわたらせ給ふこそ、忝き御事にて候へ。この僧ほどの、淺ましき次の者などを、親子の御契りの由承り候。まことしからず候へども、誠に京にも御入り候はば、萬事たのみ奉り存じ候。さても北白川に、湛海と申す奴、御入り候が、何故ともなく法眼がために仇をなし候。哀れ失はせ候てたまはり候へ。今宵五條天神にまゐり候なれば、君も御參籠候て、きやつを切つて、頭を取りてたまはり候はば、今生の面目申し盡しがたく候。」とぞ申しける。あはれ人の心も計りがたく思召しけれども、「さ承り候。身において叶ひがたくは候へども、罷り向ひてこそ見候はめ。何程のことの



○しやつ 彼奴。  
 ○印地 印地打ち。  
 礮を投げあふ戯から  
 喧嘩をいふ。  
 ○人 夫。  
 ○をこがましくぞ思  
 ひける 義經の心を  
 愚かだと思つた。

○堅固の若者 健や  
 かな強い若者。  
 ○きやうしやく 警  
 策。物事にすぐれて  
 るもの。

候べき。しやつも印地をこそ仕習うて候らめ。義經は、さきに天神に参り、下向しざまに  
 しやつが首切りて、参らせ候はんこと、風の塵拂ふが如くにてこそ候らめ。」と言葉を放つ  
 て仰せありければ、法眼何と和君が仕度するとも、先に人をやりて待たすればと、世にを  
 こがましくぞ思ひける。「左候はば、やがて歸りまらん。」とて、出でたまひ、そのまゝ天  
 神にと思召しけれども、法眼が娘に御心さし深かりければ、御方へ入らせ給ひて、「たゞい  
 ま天神にこそ参り候へ」とのたまへば、「それは何故ぞや。」と申しければ、「法眼の、湛海斬  
 れとのたまひて候によつてなり。」と仰せければ、聞きもあへず、さめんと泣きて、悲し  
 きかなや。父の心を知りたれば、人の最期も今を限りなり。これを知らせんとすれば父に  
 不孝の子たるべしと思へば、契り置きつる言の葉、みな偽りとなり果てて、夫妻の恨み、  
 後の世まで残るべきと、つくづくと思ひつゝくるに、親子は一世、夫は二世の契りなり。  
 とて人も人に別れて、片時も世に長らへてあらばこそ、憂きも辛きも忍ばれめ。親の命を思  
 ひすて、かくと知らせ奉る。「唯これより何方へも落ちさせ給へ。昨日晝程に、湛海を召  
 しよせて、酒を勧められしに、あやしき言葉の候ひつるぞ。堅固の若者ぞと仰せける。湛  
 海、一刀にはたらじといひしは、御身の上。かく申すは、女の心のうち、かへりてきやう  
 しやくせさせ給ふべきなれども、賢人二君につかず、貞女兩夫に見えずと申すことの候へ  
 ば、知らせ奉るなり。」とて、袖を顔におしあてて、忍びもあへず泣き居たり。御曹司これ

○しやつめ 彼奴め  
 ○藍摺 藍草模様を  
 摺り染めた布帛。  
 ○精好 練絲を經、  
 生絲を緯に織つた絹  
 絨物。  
 ○大口 大口袴。  
 ○きごめ 上著の下  
 にかさねて著る鎖帷  
 子。  
 ○機縁 佛語、衆生  
 の機縁に佛の教へを  
 受けるべき因縁ある  
 ことで、利生靈地を  
 機縁として福を蒙る  
 意。  
 ○あはれ所や あ、  
 よい處であるかい。  
 ○いんぢの大将 野  
 武士のあぶれ者。  
 ○節繩目の腹巻 伏  
 繩目、白濁、紺の三色  
 目を折れ曲つた様に  
 折れた草で織つた腹巻  
 御免草の錦車で地  
 唐紫以外の色を染  
 色草菊紅葉なごを染  
 めぬいたもの。紫は  
 禁ぜられた色である  
 ○をづら がみ久し  
 く剃らずして久し  
 程に亂れ生えたる  
 ○しゆつちやう 髪  
 の被る頭巾。剃髪者  
 の被る頭巾。さし  
 かみ。屈み。

を聞召し、「もとより打ちとけ、思はず知らず候こそ迷ひもすれ。知りたりせば、しやつめ  
 には斬られまじ。とくより参り候はん。」とて出でたまふ。頃は十二月二十七日、夜ふけが  
 たの事なれば、御装束は白小袖一重、藍摺ひきかさね、精好の大口に、唐織物の直垂にき  
 ごめして、太刀わきばさみ、暇申して出で給へば、姫君は、これや限りの別れなるらんと  
 悲しみ給へり。妻戸の脇に、衣かつぎてぞ臥し給へり。御曹司は天神にひざまづき、祈念  
 申させ給ひけるは、「南無天満大自在天神、利生靈地すなはち機縁の福を蒙り、禮拜のとも  
 からは、千萬の諸願成就す。爰に社壇ましますとなつて、天神と號し奉る。願はくは、  
 湛海を義經に相違なく手にかけてさせて給へ。」と祈念し、御前を立ちて、南へ向ひて四五段  
 ばかり歩ませ給へば、大木一本あり。この木の下のほの暗きところ、五六人がほど隠るべ  
 きところを御覽じて、あはれ所や、爰に待ちて切つてくれればやと思召し、太刀を抜き、待  
 ちたまふ處に、湛海こそ出できたれ。屈強の者五六人に腹巻きせて、前後に歩ませて、我  
 が身は聞ゆるいんぢの大将なり。人には一様かはりて出で立ちけり。褐の直垂に、節繩目  
 の腹巻きて、赤銅作の太刀をはき、一尺三寸有りける刀に、ごめんやうなめしにて、表  
 鞘を包みてむすとさし、大長刀の鞘を外し、杖につき、法師なれども、常に頭を剃らざれ  
 ば、をつ、がみ頭に生ひたるに、しゆつちやう頭巾ひつかごみ、鬼の如くに見えける。さ  
 しくみ、御覽すれば、首のまはりに、かゝる物もなく、よに斬りよけなり。いかに切



○血をあえさん 血を注がん。

○聖 五條天神の住僧。

○あからさま かりそめ。

○あはや 今にも。事の危急な時の感動詞。

○男になりて 元服して。

○目な離し給ふな 目を離し給ふな。

○音なしそ 音をたてるな。

り損すべきと待ちたまふも知らずして、御曹司の立ちたまへる方へ向ひて、「大慈大悲の天神、願はくは聞ゆる男を、湛海が手にかけてたべ。」とぞ祈請しける。御曹司これを御覽じて、いかなる剛の者も、唯今死なんすることは知らずや。直に斬らばやと思召しけるが、暫く我が頼む天神を大慈大悲と祈念するに、義經は悦びの禱なり、きやつは参りの禱ぞかし。未だ所作もはてざらんに切つて、社壇に血をあえさんも、神慮の恐れあり。下向の道をと思召し、現在のかたきをとほし、下向をぞ待ちたまふ。津國の、二葉の松の根ざしめて、千代を待つよりも猶久し。湛海天神にまゐりて見れども、人もなし。聖にあうて、あからさまなるやうにて、「さる體の冠者などや参りて候ひつる。」と問ひければ、「左様の人とは、とく参り下向せられぬる。」と申しける。湛海は、やすからず、「疾くより参りなば、逃すまじきを。さだめて法眼が家に有らん。行きてせめ出して切つてすてん。」とぞ申しける。尤も然るべしとて、七人つれて天神を出づ。あはやと思召し、さきの所に待ち給ふ。その間二段ばかりちかづきたるが、湛海の弟子、禪師と申す法師申しけるは、「左馬頭殿の公達、鞍馬にありし牛若殿、男になりて、源九郎と申し候は、法眼の娘に近付きけるなれば、女の男にあひぬれば、正體なきものなり。もし此の事をほの聞き、男にかくと知らせなば、かやうの木陰にも待つらん。あたりに目な離したまふな。」と申しける。湛海、「音なしそ。」とぞ申しける。「いざ、この者よびて見ん。剛の者ならば、よもかくれじ。臆病者

○聲色 聲つき。  
○世になし源氏 日陰者の源氏。

○僻事 僻目の誤だらう。

○ここそ云々 如何しよう斯うしようこ

○臆病程の恥やある 臆病くらの恥があらうかない。

○ひるむ 弱る。

○厳しかりつる 物事に巧みにすぐれた

○一人もあますまじ 一人も残すまい、

○一所もこそ云々 死なば諸共云つた

○死なば諸共云つた だらう。

ならば、我等が氣色に恐れて、出づまじきものを。」とぞいひける。あはれ、たゞ出でたらんよりも、有るかといふ聲について出でばやと思はれけるに、憎けなる聲して、河の邊より、「世になし源氏、参るや。」といひも果てざるに、太刀打ちふり、わつと喚いて出でたまふ。「湛海と見るは僻事か。かくいふこそ義經よ。」とて、追つかけ給ふ。今までは、とこそせめ、かくこそせめと言ひけれども、その期になりぬれば、三方へさつと散る。湛海もついて二段ばかりぞ逃げにける。「生きても死しても、弓矢取る者の、臆病程の恥やある。」とて、長刀を取りなほし、返し合はす。御曹司は、小太刀にて走り合ひ散々に打ち合ひ給ふ。もとよりの事なれば、切り立てられ、今は叶はじと思ひけん、長刀取りなほし、散散に打ちあひけるが、少しひるむ處を、長刀の柄を打ち給ふ。長刀からりと投げかけたる時に、小太刀を打振り、走りかゝりて、ちやうど切り給へば、切先頸の上にかゝるとぞ見えし、首は前へぞ落ちにける。年三十八にてぞ亡せにける。酒を好みし狸々は、樽のほとりにつながれ、悪を好みし湛海は、由なき者に與して亡せにけり。五人の者ども、これを見て、さしも厳しかりつる湛海だにもかくなりたり。ましてわれ／＼叶ふまじきとおもひて、皆ちり／＼にぞなりにける。御曹司これを御覽じて、「憎し、一人もあますまじ。湛海とつれて出づる時は、一所とこそいひつらん。きたなし、返し合はせよ。」と仰せありければ、いと足ばやにぞ逃げにける。彼處に追ひつめ、はたと切り、此處に追ひつめ、はた



○かまへて〜き  
つこ。必ず。  
○持ちて行き云々  
持つて行つてやつて  
驚かさう。  
○門をさして 門を  
鎖して。  
○口一丈 幅一丈。  
○無常をこそ覗け  
る 世の無常なこ  
の眞理を心に觀察し  
明らめた。  
○六韜兵法云々 義  
經のこをいふ。今  
湛海の手にかゝつて  
死なうとじてゐるた  
らう。  
○太刀のむね むね  
は棟で刀の背。  
○不便 かはいさう

と切り、枕を並べて二人切り給へり。残りの方々へ逃げにけり。三の首を取り集めて、天神の御前に杉のある下に、念佛申しおはしたりけるが、此の首をすててや行かん、持ちてや行かんと思召し、法眼が、かまへて〜首取りて見せよと誂へつるに、持ちて行きたくれて膽をつぶさんと思召し、三つの首を太刀の先にさし貫き歸りたまひ、法眼が許におはして御覽すれば、門をさして橋をはづしたれば、たゞ今たゞきて、義經といはば、よもあけじ。これほどの處は、はね越し入らばやと思召し、口一丈の堀、八尺の築土に、飛び上りたまふ。梢に鳥のつたふ如し。内に入り御覽すれば、非番當番の者ども伏したり。縁に上り見たまへば、火ほのくとか、けて、法華經の二卷目半巻ばかり、讀みて居たりけるが、天井を見あけて、世間の無常をこそ觀じける。六韜兵法を讀まんとして、一字をだにも讀まずして、今湛海が手にかゝらん。南無阿彌陀佛。」と獨言に申しける。あら憎の者の面や、太刀のむねにて打たばやと思召しけるが、女がなげかんこと、不便に思召して、法眼が命をば助けたまひけり。やがて内へ入らんと思召しけるが、弓矢を取る者の、立聞なんどしたるかと思はれんすらんとて、首をまた引きさけて、門の方へ出でたまふ。門の脇に花の木ありける下に、ほのくらし所あり。此處に立ち給ひて、「内に人がある。」と仰せありければ、内よりも、「誰。」と申す。「義經なり。此處あけよ。」と仰せありければ、これを聞き、「湛海を待つ處に、おはしたるは、よきことよもあらじ。あけて入れまらせん

○築地 泥土塗り瓦  
葺きの堀。  
○膽を消す 非常に  
驚き恐れる。  
○かまへて 必ず。  
○會釋云々 應接し  
ないではならぬと思  
つて。  
○さらぬ様 そんな  
事もない様子。  
○やる方もなし せ  
つない思ひのやるせ  
がない。  
○物怪 生霊死靈な  
どがついて祟りをす  
ること。  
○かしづき 愛し育  
てる。  
○自然の事あらは  
萬一の場合には。  
○後悔云々 一本後  
悔そらにたゞすま  
る。

か。」といひければ、門あけんとする者もあり、橋渡さんとする者もあり、走り舞ふ處に、何處よりか越えられけん、築地の上に、首三つ引きさけて出で來り給ふ。おのく膽を消し居る處に、人さきに内に入り、「大かた身に叶はぬことにて候ひつれども、かまへて〜首取りて見せよと仰せ候ひつる間、湛海が首取りてまるりたる。」とて、法眼が膝の上に投けられければ、興さめてこそ思へども、會釋せでは叶はじと思ひけん、さらぬ様にて、「かたじけなし。」とは申せども、よに苦々しくぞ見えける。「悦び入りて候。」とて、内に急ぎにけ入る。御曹司、今宵は爰に留まらばやと思召しけれども、女に暇こはせ給ひて、山科へとて出で給ふ。あかぬ名残の惜しければ、涙に袖を濡らし給ふ。法眼が女跡にひれふし、泣き悲しめども甲斐ぞなき。忘れんとすれども忘れず。まどろめば夢に見え、さむれば面影にそふ。思ひは彌まさりして、やる方もなし。冬も末になりければ、思ひの數や積りけん、物怪などといひしが、祈れどもかなはず、藥にても助からず、十六と申す年、終に歎き死になりけり。法眼はかねて物をぞ思ひける。いかならむ世にも有らばやと、かしづける娘には別れ、頼みつる弟子をば斬られぬ。自然の事あらば、一方の大將にもなり給ふべき義經は、中違ひ奉りぬ。彼といひこれといひ、一方ならぬ歎き、思ひ入りてぞありける。後悔そこにたえずとは、此の事なり。唯人は情あるべき浮世なり。



卷第三

一 熊野の別當亂行の事

○一人當千 一人の力で千人に當る。  
 ○中關白道隆 關白藤原兼家の子。正暦元年關白となる。  
 ○熊野の別當 紀伊熊野權現の法務を掌る僧職。  
 ○雲の上人 殿上人  
 ○師長 宇治左大臣賴長の子。太政大臣從一位。  
 ○通夜 寺社に參籠して徹夜して祈願すること。  
 ○王子々々 熊野行幸の時御休所毎に臨時熊野本社を移した所。京都から熊野までに九十九の王子社があった。  
 ○宿願をほごき 神佛の立願叶つて禮参りする。願ほごきをする。

義經の御内に聞えたる、一人當千の剛の者あり。族姓を尋ぬるに、天兒屋根の御苗裔、中關白道隆の後胤、熊野の別當辨せうが嫡子、西塔の武藏坊辨慶とぞ申しける。かれが出で来る由來を尋ぬるに、二位の大納言と申す人は、公達數多持ち給ひたりけれど、親に先だち皆うせ給ふ。年たけ齡傾きて、一人の姫君をまうけ給ひたり。天下第一の美人にて坐しければ、雲の上人我もくくと望みをかけ給ひけれども、更に用る給はず。大臣師長ねんごろに申されければ、さるべき由申されけれども、今年は忌むべき事あり、東の方は叶はじ。明年の春ころ、と約束せられけり。御年十五と申す夏の頃、いかなる宿願にか、五條の天神に参り給ひて、御通夜し給ひたりけるに、辰巳の方より俄に風吹き來りて、御身にあたると思ひ給ひければ、物狂はしく、いたはりぞ出で來給ひたる。大納言師長、熊野を信じ参らせ給ひける程に、「今度の病たすけさせたまへ。明年の春の頃は、參詣をとけて、王子々々の御前にて、宿願をほごき候べし。」と祈られければ、程なく平癒し給ひぬ。其の次の年の春、宿願をはらさせ給はん爲に、參詣あり。師長大納言殿よりして、百人同

○同者 同行の者。  
 ○三の山 熊野本宮新宮那智の三山。  
 ○内陣 本尊を安置する處。  
 ○行人 行者、修行者。  
 ○懺法 罪障懺悔のために修する法。  
 ○大衆 僧徒。  
 ○北の方 貴人の妻をいふ。  
 ○人の心云々 大衆が別當に對する誠意ある事を示さうご。  
 ○大衆のおもむき 大衆の心の赴き即ち大衆の發心。  
 ○はやりき 勇み立つてあせつた。  
 ○よろひ 著用する  
 ○ごきを作りて 闕の聲をあひて。  
 ○恥をはづべき侍 供人のうちでも武人で恥を恥しなけれはならぬ者。

者つけ奉りて、三の山の御參詣を事故なく遂げ給ふ。本宮せうしやう殿に御通夜ありけるに、別當も入堂したりけり。遙かに夜ふけて、内陣にひそめきたり。何事ならんと、姫君御覽する處に、「別當の参り給ひたる。」とぞ申したる。別當かすかなる燈火の影より、此の姫君を見奉り給ひて、さしも然るべき行人にて坐しけるが、未だ懺法だにも過ぎざるに、急ぎ下向して、大衆を呼びて、「いかなる人ぞ。」と問はれければ、「これは二位の大納言殿の姫君、右大臣殿の北の方。」とぞ申しける。別當「それは約束許りにてこそあるなれ。未だ近付き給はず候と聞くぞ。さきく大衆の、あはれ熊野に何事も出で來よかすと、人の心をも我が心をも、見んといひしは今ぞかし。出で立ちてあしきのなからん所に、同者を射ちらして、此の人を取りてくれよかし。別當が兒にせん。」とぞ宣ひける。大衆これを聞きて、「扱は佛法のあた、王法の敵とやなりたまはんずらん。」と申しければ、「臆病の至る處にてこそあれ。かかる事を企つるならひ、大納言殿師長、院の御前へ参り、訴訟申したまはば、大納言を大將として、畿内の兵こそ向はんずらめ。それは思ひまうけたる事なれ。新宮熊野の地へ、敵に足をふませばこそ。」とぞ宣ひける。先々の僻事と申すは、大衆のおもむきを、別當のしづめ給ふだにも、や、もすれば衆徒はやりき。いはんやこれは別當おこし給ふ事なれば、衆徒もつはものをすゝめけり。我もくと甲冑をよろひ、先さまに走り下りて、同者を待つ處に、又跡より大勢ときを作りて追つかけたり。恥をはづべき侍



○輿 姫君の乗つた輿。  
 ○我がも云々 別當の許は上の者下の人  
 の修行する處である。  
 ○政所 寺の所領や雑務を取扱ふ處。  
 ○返し合はず 逆襲する。再び襲撃する。

○切部の王子 紀伊日高郡切目村の王子  
 ○早馬 急使の馬。

どもみな逃げける。衆徒輿を取つてかへり、別當に奉る。我がもとは上下の行所なりければ、もし京方の者ありやとて、政所におき奉り、もろともに朝暮ひきこもりてぞおはしける。もし京より返し合はずする事もやと、用心きびしくしたりけり。されども私の計らひにてあらざれば、急ぎ都へはせ上りて、此の由を申したりければ、右大臣殿大きに憤り給ひて、訴へ申されたりければ、やがて院宣を下して、和泉、河内、伊賀、伊勢の住人どもを催して、師長、大納言殿兩大將として、七千餘騎にて、熊野の別當を追ひ出して、則ち別當になせ。」とて、熊野におしよせ給ひて攻め給へば、衆徒身を捨てて防ぐ。京方叶はじとや思ひけん、切部の王子に陣を取つて、京へはや馬を立て申されければ、「合戦遅々する仔細あり。其の故は、公卿僉議有りて、平宰相信成の御娘、美人にて坐ししかば、内へ召されさせ給ひけるを、今此の事によつて、熊野山滅亡せられん事、本朝の大事なり。右大臣には此の姫君を内より返し奉りたまはば、何の御憤りか有るべき。又二位の大納言の御婿、熊野の別當何か苦しかるべき。年たけたるばかりにてこそあれ。天兒屋根の御苗裔中關白道隆の御子孫なり、苦しかるまじ。」とぞせんぎ事了りて、切部の王子に早馬を立て、此の由を申されければ、右大臣、公卿僉議の上は申すに及ばず、とてうち捨てて歸りのほりたまふ。二位大納言は、われ獨りして憤るべきならずとて、うち連れ奉りて、上洛有りければ、熊野も都も靜かなりと雖も、や、もすれば兵ども、我らがする事は、宣旨院宣

○したん 指彈。つまはじき。誹謗すること。  
 ○限りある月 妊娠の限りある十箇月。  
 ○むか齒 前齒。  
 ○鬼神ござんなれ 鬼神にこそあるなれ。  
 ○しやつ そやつ。彼奴。  
 ○仇なりなんす 仇なりなんぞす。  
 ○ふしづけ 柴漬。罪人の身體を糞巻にし水に沈めること。  
 ○磔 はつけ。はりつけ。  
 ○それはさる事なれども、それは尤もな事ではあるが。  
 ○此の世一つならぬこと 現世だけの事ではなく過去の世界の因縁である。

にも従はばこそと、したんして、彌代を世ともせざりけり。扱姫君は別當に隨ひて、年月を經るほどに、別當は六十一、姫君に馴れて子をまうけんすることを嬉しけれ。男子ならば佛法の種をつがせて、熊野をも讓るべしとて、かくて月日を待つ程に、限りある月に生まれずして、十八月にぞ生まれける。

二 辨慶生まるゝ事

別當、此の子の遅く生まるゝ事不思議に思はれければ、産所に人を遣はして、「いかやうなる者。」と問はれければ、生まれ落ちたる不思議は、世の常の二三歳ばかりにて、髪は肩のかくる、程に生ひて、奥齒むか齒は、特に大きく生ひてぞ生まれけれ。別當に此の由を申しければ、「扱は鬼神ござんなれ。しやつを置いては、佛法の仇となりなんぞ、水の底にふしづけにもし、深山に磔にもせよ。」とぞ宣ひける。母これを聞き、「それはさる事なれども、親となり子と成る事も、此の世一つならぬことぞと承る。忽ちにか失はん。」となけき入りてぞおはしける處に、山の井の三位といひける人の北の方は、別當の妹なりしが、別當に、をさなき人の御不審をとひ給へば、「人の生まるゝと申すは、九月十月にてこそ極めて候へ。既に此の者は、十八月に生まれて候へば、助け置きても親のあたとも成るべく候へば、助け置く事候まじ。」と宣ひける。をば御前聞き給ひて、「腹の内にて久しく



○黄石 漢の張良に兵書を授けたといふ老人。  
 ○あら人神 現世で人と現はれた神生き神。  
 ○かしづける 愛し育てた。  
 ○髪のふぜい 髪の風情。髪の様子。  
 ○男になして叶ふまじ 俗人にしてはかなふまい。  
 ○三位殿 山の井の三位。  
 ○さかノし 恰何な、賢い。  
 ○不定 戒を犯して他人に確かに知れないこと。佛語。  
 ○せい 精。熟練して巧みなこと。  
 ○指南 教へ導く。

して生まれたる者、親の爲に悪しからんには候はず。それ唐の黄石が子、腹の内にて十年の齡を送り、白髪生ひて生まれける。年は二百八十歳。たけ低く色黒くして、世の人には變りけり。されども八幡大菩薩の御使者、あら人神といはれ給ふ。唯みづからに賜はり候へ。京へ具して上り、能くば男になして、三位殿に奉るべし。悪しくは法師にもなし。經の一卷も讀ませたらば、そうとうの身となりて、卻つて親をも導くべし。」と打ちくどき申されければ、さらばとて叔母に取らせける。産所に行きて、産湯をあびせて、鬼若と名を付けて、五十一日過ぎければ、京へ具して上り、乳母を付けて、もてなしかしづける程に、鬼若五歳にては、世の人十二三ほどに見えける。六歳の年、痲瘡といふものをして、いとゞ色も黒く、髪は生まれたるまゝなれば、肩より下へおひ下りて、髪のふぜいも男になして叶ふまじ、法師になさんとて、比叡の山の學頭西塔櫻本の僧正のもとに、申されけるは、「三位殿の爲には、養子にて候。學問の爲に奉り候。みめかたちは、參らするに付けて恥ぢ入りて候へども、心はさかくしく候。文の一卷もよませ給ひ候へ。心の不定に候はんは、直させ給ひて、いか様にも御計らひに任せ候。」とて、上せけり。櫻本にて學文する程に、せい、月日のかさなるに隨ひて、人に勝れてはかなくし。學文世にこえて器用なり。されば衆徒も、「形はいかにも悪かれ、學文こそ大切なり。」とて、いよく指南し給ひける。かくて學文に心をだにも入れなばよかるべき。力もよく、骨もふとく逞しくな

○児法師はら 寺に召使はれる童法師なご。  
 ○ぶよう 不用。亂暴不都合。又ぶようで武勇とするも通ずる。  
 ○師匠は云々 師匠は三千坊の學頭で彼はその學頭の兒であるからの意。  
 ○三千坊 比叡山延曆寺に三千もある僧舎。  
 ○人をはり 人を打ち。  
 ○不祥 縁起のわるいこと。義で不幸。  
 ○ひが事 不都合。心得ちがひ。  
 ○山上云々 このころ誤脱があるだらう。

る儘に、師の仰せにも隨はず、児法師ばらを語らひて、人も行かぬ御堂のうしろの山の奥などへ伴ひ行きて、腕おし、頸引、相撲などぞ好みける。衆徒此の事を聞きて、「わが身こそいたづら者ならめ、人の處に學文する者をだに、すかし出して不定になす事謂れなし。」とて、僧正のもとに、訴訟の絶ゆる事なし。かく訴へ來る者をば、讎敵の様に思ひ、其の人の方へ走り入りて、葎妻戸をさんぐにうち破りけれども、悪事もぶようも、鎮むべきやうぞなき。其の故は、父は熊野の別當なり、養父は山の井殿、祖父は二位の大納言、師匠は三千坊の學頭の兒にてある間、手をもさしてはよき事あるまじとて、唯うち任せてぞ狂はせける。されば相手はかはれども、鬼若はかはらず、いさかひの絶ゆることなし。答をにぎり人をはりければ、人々路次をも直にとほりえず、たま／＼逢ふ者も、道を避けなどしければ、其の時は異議なくとほして後、逢ひたる時取つて押へて、「さもあれ、過ぎし頃は、行きあひ參らせて候に、道をよけられしは、何の遺恨にて候ひけるぞ。」といひければ、恐ろしさに膝ふるひなどする者を、腕ねぢ、こぶしをもつて押し倒しねぢたふしなどするほどに、逢ふ者の不祥にてぞありける。衆徒これを僉議して、「僧正の兒なりとも、山の大事にて有るぞ。」とて、大衆三百人、院の御所へ參りて申しければ、「それ程のひが事の者をば、急ぎ追ひ失へ。」と院宣有りければ、大衆悦び、山上へ佛所に公卿僉議有りて、古き日記見給へば、六十一年に山上にかかる不思議の者出で來ければ、朝家の祈禱になる事



○山王の御輿云々  
延曆寺の僧徒が日枝神社の御輿を奉じて京都に来て強要をした。それをしようこの意。  
○嗚呼の者 たはけ者。馬鹿者。

○山に有りても 比叡山延曆寺に居ても

○山門 延曆寺。

○戒名 法師名。

有り。院宣にてこれを鎮めつれば、一日のうちに、天下無雙の願所五十四箇所ぞといふことあり。今年六十一年に相當る。唯捨て置き。とぞ仰せける。衆徒憤り申しけるは、「鬼若一人に、三千の衆徒と思召しかへられ候こそ、遺恨なれ。さらば山王の御輿をふり奉らん。」と申しければ、神には御領を參らせ給ひければ、衆徒、此の上はとてしづまりけり。此の事鬼若に聞かすなとて、かくし置きたりしを、いかなる嗚呼の者か知らせけん、「これは遺恨なり。」とて、いとゞさんぐくに振舞ひける。僧正もてあつかひて、「あらば有ると見よ。なくばなしと見よ。」とて、目も見せ給はざりけり。

### 三 辨慶山門を出づる事

鬼若、僧正のにくみ給へる由を聞きて、頼みたる師の御坊だに斯様に思はれんに、山に有りても詮なし、目にも見えざらん方へ行かんと、思ひ立ちて出でけるが、かくては何處にても、山門の鬼若とぞいはれんすらん。學文に不足なし。法師になりてこそ行かめとおもひて、髪剃り衣を取りそへて、美作治部卿といふ者の湯殿にはしり入りて、鹽の水にて手づから髪を洗ひ、所々おしぞりにしたりける。かの水に影をうつして見れば、頭は丸く見えける。かくては叶はじとて、戒名をば何とかいはましと思ひけるが、昔、此の山に悪を好む者あり、西塔の武藏坊とぞ申しける。二十一にて悪をしそめて、六十一にて死に

○端坐合掌 威儀を亂さず正しく坐つて兩手を合はせ。  
○がう 剛。  
○山上 比叡山。  
○みめわろく 容貌醜惡。  
○心いさう 心異相か。心の人並に異なつてゐることか。  
○あくがれ 心落ちつかず浮かれ出て。  
○書寫山 都路の西北。書寫山圓教寺永仁二年性空上人開基。  
○性空上人 高僧。橘善根の子。叡山慈慧の弟子。寛弘四年寂。  
○夏 四月十六日から七月十六日まで寺に籠つて修養すること。  
○がくさう 學頭。社僧の職名。  
○夏僧 夏籠りをしている僧。  
○こくさう 虚空藏。虚空藏菩薩をいふ。

けるが、端坐合掌して、往生を遂げたと聞く。我も其の名を付いて呼ばれたらば、がうになることもあらめ、西塔の武藏坊といふべし。實名は父の別當は辨せうと名のり、其の師匠はくわん慶なれば、辨せうの辨とくわん慶の慶とを取つて辨慶とぞ名乗りける。昨日までは鬼若、今日はいつしか武藏坊辨慶とぞ申しける。山上を出で、小原の別所と申す處に、山法師の住みあらしたる坊に、誰とむるとはなけれども、暫くは尊けにてぞ居たりける。されども兒なりし時だにも、みめわろく心いさうなれば、人もてなさず、まして訪ひ來る人もなければ、こゝをも幾程なくあくがれ出でて、諸國修行にとてまた出で、津國河尻に下り、難波瀧を眺めて、兵庫のしまなどいふ處をとほりて、明石浦より船に乗りて、阿波國について、燒山鶴が峯を拜みて、讃岐の志度の道場、伊豫のすかうに出でて、土佐の幡多又をがみけり。かくて正月も末に成りければ、また阿波國へぞ歸りける。

### 四 書寫山炎上の事

辨慶、阿波國より、播磨國にわたり、書寫山にまゐり、性空上人の御影を拜み奉り、既に下向せんとしたるが、同じくは一夏こもらばやおもひける。此の夏と申すは、諸國の修行者充滿して、餘念もなく勤めける。大衆はかくとうの坊に集會し、修行者は行ひ處につく。夏僧はこくさうの御堂にて、人について夏中のやうを聞きて、學頭の坊に入りけ



○推参 われからおして参る事。  
 ○長押 敷居の下に長くわたした材。  
 ○天兒屋根の御苗裔 藤原氏は天兒屋根命から出てる故にいふ。  
 ○退轉 修行して得た道位を過失によつて失ひあともどりすること。懈怠。  
 ○寝便 おたやかなし。  
 ○せんなし かひなし。

る。辨慶は推参して、長押の上にくけなる風情して、かくとうの座敷を、暫く睨みて居たりけり。かくとうどもこれを見て、「昨日の座敷にも有りとも覚えぬ法師の、推参せられ候は、いづくよりの修行。」と問ひければ、「比叡の山の者にて候。」と申しければ、「比叡の山はどれより。」「櫻本より。」と申す。「僧正の御弟子か。」と申せば、「さん候。」「御俗姓は。」と問はれて、こと／＼しけなる聲をして、「天兒屋根の御苗裔、中關白道隆の末、熊野の別當の子にて候。」と申しけるが、一夏の間はいかにも心に入りて、勤め退轉なく行ひ居たりける。衆徒も、初めの景氣今の風情、相違して見えたり。されば人にはなれて見えたり。穩便の者にて有りけるやとぞ譽めける。辨慶思ひけるは、かくて一夏も過ぎ、秋の初めにもなりしかば、また國に修行せんとぞ思ひける。されども名残を惜しみて、出でもやらで居たり。扱しも有るべきことならねば、七月下旬に、かくとうに暇はんとて行きたりければ、兒大衆酒宴してぞ有りける。辨慶、参じてせんなしと思ひて出でけるが、新しき障子一開立てたる處あり。此處に晝寢せばやと思ひて、暫く伏しけるに、其の頃書寫に、相手きはぬ、いさかひ好む者あり、信濃坊かいるんとぞ申しける。辨慶が寢たるを見て、多くの修行者見つれども、きやつほどの廣言して、にくけなる者こそなけれ。きやつに恥をあたへて、寺中をおひ出さんと思ひて、硯の墨すりながし、武藏坊が面に、二くだり物を書きたりけり。片面にはあしだと書く、片面には、書寫法師の足駄にはくとか

○平足駄 今の普通の下駄をいふ。  
 ○かんたへて 可笑しくて我慢が出来ないで。  
 ○偏執 かたいが。○けしきこそ指じて 機嫌をわるくした  
 ○詮なき事 かひもない事、詰まらぬ事  
 ○我一人が故云々 自分一人のために延曆寺の名譽を落さん事。  
 ○ならはして 懲らして。目にも見せて。  
 ○坊中へめぐり 僧侶の居所をまはり歩いて。  
 ○書寫法師 書寫山の法師等。  
 ○面をはりふせられぬ 顔をなぐりふせられた。  
 ○僉議 會議。

きて、辨慶は平足駄とぞ成りにけり、面をふめども起きもあがらず、と書き付けて、小法師ばらを二三十人あつめて、板壁をた、いて同音にとつと笑はせける。武藏坊、あしき處に推参したりけるやと思ひて、衣の袂引きつくるひて、衆徒の中へぞ出でにける。衆徒これを見て、目ひき鼻ひき笑ひけり。人はかんにたへて笑へども、我は知らねばをかしからず。人の笑ふに笑はずは、辨慶偏執に似たりと思ひ、共に笑顔してぞ笑ひける。されども座敷の體ふしぎに見えければ、辨慶は我が身の上と思ひて、拳を握り膝を立て、「何のをかしきぞ。」と、眼に角を立て睨み廻しけり。かくとうこれを見給ひ、「あはや此の者けしきこそ損じて見え候へ。いかさま寺の大事と成りなん。」と宣ひて、「詮なき事に候。御身の事にては候はぬぞ。よその事を笑ひて候。何のせんかおはすべき。」と宣へば、座敷を立つて、但馬の阿闍梨といふ者の坊、其の間一町許りあり。これも修行者のよりあひ處にてありければ、彼處へ行きあふ人々も辨慶を笑はぬ人はなし。怪しと思ひて、水に影をうつして見れば、つらに物をぞ書かれたる。さればこそ。これほどの恥にあたつて、一時なりとも有りてせんなし。何方へも行かんと思ひけるが、又打ちかへし思ひけるは、我一人が故に、山の名を下さん事こそ心うけれ。諸人をさん／＼に悪口して、咎むる者をばならはして、恥を雪ぎて出でばやと思ひて、人々の坊中へめぐり、さん／＼に悪口す。かくとう此のこととを聞きて、「何ともあれ、書寫法師、面をはりふせられぬと覺ゆる。此のこと僉議して、



○伏繩目のよろひ腹巻 白薄紫紺の並びて折れ曲つた様に染めた革で織した錦腹巻。  
 ○納殿 金銀衣服調度などを納めおく處。  
 ○唐櫃 脚のついた櫃。  
 ○揉烏帽子 鎧の下に著る揉みて軟かにした烏帽子。  
 ○引杖 引きすつて行く杖。  
 ○ふしめ うつむいて見ること。  
 ○善惡をよそにて聞けば 何やかやを他から聞けば。

此の中にひがことの者あらば、それを取りて、修行者に取らせて、大事をやめん。」とて、衆徒催して、講堂にしてがくとう詮議す。されども辨慶はなかりけり。がくとう使者を立てけれども、老僧の使のあるにも、出でざりけり。重ねて使あるに、東坂の上にさしのぞきて、後の方を見たりければ、二十三許りなる法師の、衣の下に、伏繩目のよろひ腹巻著てぞ出で来る。辨慶これを見て、こはいかに、今日は穩便の詮議とこそ聞きつるに、きやつが風情こそけしからね。ないく聞くぞ、衆徒僻事をなすならば、かうをこえ、修行者ひがことあらば、小法師原に、はなち合はせよといふなるに、かくて出で、大勢の中にとり籠められ叶ふまじ。我もさらば行きて出で立たばやと思ひて、がくとうの坊に走り入りて、こはいかにと、人のとふ返しをもせず、人も許さざりけるに、いつ案内は知らねども、納殿につと走り入りて、唐櫃一合取つて出で、襦の直垂に、黒絲緘の腹巻著て九十日潮らぬかしらに、揉烏帽子に鉢巻し、櫟の木をもつて削りたる棒の八角にかどを立てて、もとを一尺許りまろくしたるを、引杖にして、高足駄をはいて、御堂の前にぞ出で来る。大衆これを見て、「爰に出で来るものは何者ぞ。」といひければ、「これこそ聞ゆる修行者よ。」「あら怪しからぬ有様かな。此方へ呼びてよかるべきか、捨て置きてよかるべきか。」「捨て置きてよかるまじ。」「さらば目な見せそ。」とまうしける。辨慶これを見て、いかにともいはんかと思ひつるに、衆徒のふしめに成りつるこそ心得ね。善惡をよそにて聞けば、

○講堂 寺院の伽藍の一つで、教法を講演する堂。  
 ○中居の者 殿中の奥の間に勤め居る者。  
 ○催したり 集めた。  
 ○あさもそごも うんごもすんごも。  
 ○一定 必ず。きつこ。  
 ○からめかし からからさせて。  
 ○せんずる處 結局。  
 ○長押 敷居の下に横にわたした材。  
 ○ついたつて つき立つて。  
 ○狼藉 亂暴。  
 ○くわんたい 緩怠過失。さが。  
 ○けう 希有。珍しいや修行法師の面はの意。  
 ○みだけ高身を高く聳やかして怒るさま。

大事なり。近付きてきかばやと思ひ、走りよつて見ければ、講堂には老僧兒どもうち交りて、三百人許り居ながれたり。縁の上には中居の者ども、小法師原、一人も残らず催したり、残る處なく寺中上を下にかへして、出で来る事なれば、千人許りぞありける。その中に、あしく候ともいはず、足駄踏み鳴らし、肩をも膝をもふみ付けて通りけり。あともそともいはば、一定事も出で来りなんとと思ひ、皆肩をふまれて通しけり。階の下に行きて見れば、小袖どもひしとぬぎたり。我もぬぎて置かばやともひけるが、禍ひを除くに似たりと思ひ、はきながらからめかしてぞ上りけり。衆徒も咎めんとすれば、事みだれぬべし。せんずる處取りあひて詮なしとて、皆小門の方へぞ隠れける。辨慶は、長押の際を、足駄はきながら彼方此方へぞありきける。がくとう、「見苦しき物かな。さすが此の山と申すは、性空上人の建立せられし寺なり。然るべき人坐するうへ、幼き人の腰もとを、足駄はいて通るやうこそ奇怪なれ。」と咎められて、辨慶ついたつて申しけるは、「がくとうの仰せは勿論に候。左様に縁の上に、あしだはいて候だにも、狼藉なりと咎め給ふ程の衆徒の、何のくわんたいに、修行者のつらさをば、足駄にしてはかれけるぞ。」と申しければ、道理なれば衆徒音もせず。中々はなち合はせて置きたらば、がくとうの計らひに、いか様にもすかして出すべかりしを、禍ひおこりける。信濃坊これを聞きて、「けうなるべし。修行法師めが面や。」とるたけ高になりて申しける。「あまりに此の山の衆徒は、きやうこうが過



○日を見せて ひざ  
いめにあはせて。  
○いでならばさん  
さあ懲らしめよう。  
○えせ者 如何はし  
き者。馬鹿者。

○雅打 横なぎに打  
つこと。  
○くの木 くぬぎ。  
○すびつ 園庭裏又  
は角火鉢など。  
○一定か云々 きつ  
まかこの法師め。  
○かう かうべの誤  
りか。  
○ぢたい 元來。

ぎて、修行者めらに、目を見せて、すでに後悔し給ふらんものを、いでならばさん。」とて  
つと立つ。あは事出できたりとて、辨慶これを見て、「面白し、彼奴こそ相手きらはす  
のえせ者よ。おのれが腕のぬくるか、辨慶が腕のくだくるか。思へば、辨慶がつらに物を  
書きたる奴か。にくい奴かな。」とて、棒取り直し待ちかけたなり。かいゑんが寺の法師原、  
五六人座敷に在りけるが、これを見て、「見苦しく候。あれほどの法師、縁より下に蹴落し  
て、首の骨ふみ折つてすてん。」とて、衣の袖を取つて結び肩にかけ、喚き叫んでかゝるを  
見て、辨慶「いやと立ち上り、棒を取つて直し、薙打に一度に縁より下になぎ落しける。  
かいゑんこれを見て走り立ちて、あたりを見れども打つべき杖なし。末座を見れば、くの  
木を打切りくくべたる燃えさしをおつ取り、すびつ押しにじりて、「一定か、わ法師。」と  
て、走りかゝる。辨慶頻りに腹を立てて、持つて開いて丁ど打つ。かいゑん、走り違へて  
むすど打つ。辨慶がしと合はせて、潛り入りて、左手のかひなさしのべ、かう攫んでえい  
と引きよせ、右手のかひなをもつて、かいゑんが股をつかみそへて、目より高くおしあけ  
て、講堂の大庭の方へ行く。衆徒これを見て、「修行者御免候へ。それはぢたい酒狂する者  
にて候ぞ。」と申しければ、辨慶「見苦しく見えさせたまふものかな。日頃の約束には、修  
行者の酒狂は衆鎮め、衆徒の酒狂をば修行者鎮めよとの御約束と承り候ひしかば、命を  
ば殺すまじ。」といつて、一振ふつて、「えいや。」といひて、講堂の軒の高さ、一丈一尺あり

○ひしひよこ 歴し  
つけ砕けよこ。  
○小腕 小うで。  
○燃えざし 燃えの  
こり。  
○かう堂 講堂。書  
院の伽藍の一。  
○多寶の塔 多寶如  
來の舍利を安置した  
塔に擬して作つた塔  
○文殊堂 文殊菩薩  
の像を安置してある  
堂。  
○性空上人の御影堂  
性空上人の像を置  
いてある堂。  
○崖作り 崖の上に  
かけわたして造るこ  
と。  
○築土 泥塗り瓦葺  
きにした土塀。

ける上に、投げ上げたれば、一たまりもたまらず、ころ／＼と轉び落ち、雨おち石た、き  
にどうどおつる。取つて押へて、骨は砕けよ、脛はひしけよと踏みたり。左手の小腕ふみ  
折り、右手のあばら骨二枚損ず。中々にいふにかひなしとて、いふばかりもなし。かいゑ  
んが持ちたる燃えざしを、さらば捨てせで、持ちながら投げあけられて、かう堂の軒に  
打ちはさむ。折ふし風は谷より吹きあけたり。かうだうの軒に吹き付けて、焼けあがりた  
り。九間の講堂、七間の廊下、多寶の塔、文殊堂、五重の塔に吹き付けて、一字ものこら  
ず、性空上人の御影堂、これを初めて堂塔社々の數、五十四箇所ぞ焼けたりける。武藏  
坊これを見て、現在佛法の仇と成るべし。咎をだに犯しつる上は、まして大衆の坊々ども  
は、助け置きて何にかせんと思ひて、西坂本に走り下り、松明に火を付けて、軒を並べた  
る坊々に、一々に火をぞ付けたりける。谷より嶺へぞ焼けて行く。山を切りて崖作りにし  
たる坊なれば、何かは一つも残らず、やう／＼残るものとは、石すゑのみ残りけり。二  
十一日の巳の時許りに、武藏坊は、書寫を出で京へぞ行きける。其の一日歩み、その夜  
もあゆみて、二十二日の朝に、京へぞ著きにける。其の日は都大雨大風吹きて、人の往來  
もなかりけるに、辨慶装束をぞしたりける。長直垂に、赤き袴をぞ著たりける。いかにし  
てか上りけん、さ夜更け人静まりて後、院の御所の築土に上り、手を廣げて火をともし、  
大の聲にてわつと喚きて、東の方へぞ走りける。又取つてかへし、門の上につい立つて、



○淺まし 驚きあきれるべし。  
 ○早馬 急使の馬。  
 ○院宣 上皇の宣旨  
 ○鬼若が事ごんなれば 鬼若の事にこそあるなれば。  
 ○山上の大事 比叡山延暦寺の大事。  
 ○鎮めたらんこそきみならぬ 鎮めたらんこそきみならぬいふあひだ。きみは氣味たらし。  
 ○詮する處 結局。  
 ○しやつ 彼奴。そやつ。罵つていふ詞。  
 ○糾問 たゞし問ふ  
 ○生きてはらはん事 生きてのけること  
 ○不定 たしかでない。  
 ○白狀 己の罪狀を申したること。又其の申立てを書いたものもいふ。

恐ろしげなる聲にて、「あら淺まし、いかなるふしぎにてか候やらん。性空上人の手づからみづから立て給ひし書寫の山、昨日のあした、大衆と修行者との口論によりて、堂塔五十四箇所、三百坊、一時に煙と成りぬ。」と呼ばはつて、かきけす様に失せにけり。院の御所にはこれを聞召し、「何故書寫は焼けたる。」と早馬を立てて御尋ねあり、「誠に焼けたらばがくとうを初めとして、衆徒を追ひ出せ。」との院宣なり。寺中の下へ向ひて見れば、一字も残らず焼けければ、全く時を移さず、参りて陳じ申さんとて馳せ上り、院の御所に参じて、陳じ申しければ、「さらば罪科の者を申せ。」と仰せ下さる。「修行者には武藏坊、衆徒にはかいゑん。」と申す。公卿これを聞き給ひて、「扱は山門にありし鬼若が事ごんなれば、これが悪事、山上の大事にならぬさきに、鎮めたらんこそきみならぬ。かいゑんが悪事、是非なし。詮する處かいゑんを召せ。かいゑんこそ、佛法王法の怨敵なれ。しやつを取つて糾問せよ。」とて、津國の住人、昆陽野太郎承つて、百騎の勢にて馳せむかひ、かいゑんを召して院の御所に参る。「汝一人が計らひか、與したる者の有りけるか。」と尋ねらる。糾問厳しかりければ、とても生きてはらはん事不定なれば、日頃にくかりし者を入ればや、と思ひて、與したる衆徒とては十一人までぞ白狀に入れたりける。又昆陽野太郎馳せ向ふ處に、かねて聞えければ、さきだて十一人参り向ふ。されども白狀に載せたりとて召し置かる。陳するに及ばず、かいゑんは終に責め殺さる。死しける時も、「われ一人の咎ならぬ

○かくいはざる云々 かくいはなくても勿論の事である。  
 ○居ながら 坐つて居ながら。  
 ○思ふやうにあたり こんなに通りにあつた事はない。

○胡藤 矢を入れて背に負ふ具。

○御利生 神佛の御利益。

に、残りやば失はれずば、死すとも悪靈とならん。」とぞいひける。かくいはざるだにも有るべし。さらば斬れとて十一人も皆斬られにけり。武藏坊都にありけるが、これを聞きて「かかる心地よき事こそなけれ。居ながら敵思ふやうに、あたりたる事こそなけれ。辨慶が悪事は、朝の御祈りに成りける。」とて、いと悪事をぞしたりける。

五 辨慶洛中にて人の太刀を取りし事

辨慶思ひけるは、人の重寶は千そろへて持つぞ。奥州の秀衡は、名馬千疋鐵千領もつ。松浦の大夫は、胡藤千腰弓千張。斯様に重寶を揃へて持つに、我々はかほりのなければ、替へて持つべき様もなし。詮する所、夜に入りて京中に佇みて、人の佩きたる太刀千振を取つて、我が重寶にせんとおもひ、夜なく人の太刀を奪ひ取る。しばしこそ有りけれ。「當時洛中に長一丈許りある天狗法師のありて、人の太刀を取る。」とぞ申しけれ。かくて今、年も暮れければ、次の年の五月の末、六月の初めまでに、多くの太刀を取つたり。樋口烏丸の御堂の天井におく。數へ見たりければ、九百九十九腰こそ取りたりける。六月十七日五條の天神に参りて、夜と共に祈念申しけるは、「今夜の御利生に、よからん太刀を與へてたび給へ。」と祈誓し、夜深ければ天神の御前に出で、南へ向つて行きければ、人の家の築土のきはに佇みて、天神へ参る人の中に、よき太刀持ちたる人をぞ待ち居たる。曉



○堀河を下りに堀河の通りを南に向つて進み。  
 ○男やらん 俗人であらうか。  
 ○さしくみみて 身をかがめて。  
 ○胸板 鎧の胸の前面の上部、化粧板の上。  
 ○心も及ばぬ 何ともかともいはいれぬ。  
 ○ひるます 氣力を落さず、懸せず。  
 ○けなけ かひなく、殊勝な強さうな。  
 ○左右なく云々 何のかれこれもなく通すことは出来ない。  
 ○さるをこの者 左様な馬鹿者。  
 ○見參に參らん お目に掛りませうの意で討ちか、らうとする意を云つたのである。

方に成りて堀河を下りに行きければ、面白く笛の音こそ聞えけれ。辨慶これを聞きて、面白や、さ夜ふけて、天神へ參る人の吹く笛は、法師やらん男やらん、よからん太刀を持ちたらば取らんと思ひて、笛の音の近付きければ、さしくみみて見れば、未だ若き人の、白き直垂に胸板を白くしたる腹巻に、金作の太刀の、心も及ばぬをはかれたり。辨慶これを見て、あはれ太刀や。何ともあれ、取らんする物と思ひて、待つ處に、後に聞けば、恐ろしき人にてぞありける。辨慶はいかでか知るべき。御曹司は見給ひて、あたりに目をも放たれず。木のもとを見給ひければ、けしからぬ法師の、太刀わきばさみて立ちたるを見給へば、彼奴はたゞ者ならず、此の頃都に人の太刀を奪ひ取るものは、きやつにてありと思はれて、少しもひるますか、り給ふ。辨慶、さしもけなけなる人の、太刀をだにも奪ひ取るに、ましてこれ程なるやさ男、よりにて乞はば姿にも聲にも怖ぢて出さんすらん。實にくれずば、突き倒し奪ひ取らんと、支度して、辨慶あらはれ出でて申しけるは、「唯今靜まりて敵を待つ處に、けしからぬ人の物具して通り給ふこそ、怪しく存じ候へ。左右なくえこそ通すまじけれ。然らずば其の太刀こなたへ賜はりて、通られ候へ。」と申しければ、御曹司、これを聞き給ひて、「此の程さるをこの者ありとは聞き及びたり。左右なく得こそ取らすまじけれ。ほしくばよりにて取れ。」とぞ仰せられける。「さて見參に參らん。」とて、太刀を抜いて飛んでかゝる。御曹司も小太刀を抜いて、築土のもとに走りより給ふ。武藏坊

○弓手 左。  
 ○さるをこの者 斯様な馬鹿者。  
 ○ほしさに取りたる 欲しいから怒のために取つて行つたと思ふたらうから。  
 ○取らすまじ やるぞ。  
 ○築土の覆ひ 築土の屋根。  
 ○つらゆに 情なく、ゆましうに。  
 ○念なく御邊云々 あなたは残念になさつた事であるわい。  
 ○山法師 延暦寺の僧徒。  
 ○人の器量云々 身體の様子に似ず、弱い奴であるわい。  
 ○宙 虚空。空中。  
 ○大國 支那。  
 ○穰王 周の穰王のことたらう。

これを見て、「鬼神ともいへ、當時我を對手にすべき者こそ覺えぬ。」とて、もつて開いて丁ど打つ。御曹司、「彼奴はけなけ者かな。」とて、電の如くに弓手の脇へつと入り給へば、うち開く太刀にて、築土の腹に切先打ち立て、抜かんとしける隙に、御曹司走りよりて、左手の足を指し出して、辨慶が胸をした、かに踏み給へば、持つたる太刀をがらりと捨てたるを取つて、えいやといふ聲のうちに、九尺許りありける築土に、ゆらりと飛び上り給ふ。辨慶胸いたく踏まれぬ。鬼神に太刀とられたる心地して、呆れてぞ立つたりける。御曹司、「これより後に、かかる狼藉すな。さるをこの者有りと、かねて聞きつるぞ。太刀も取りて行かんとおもへども、ほしさに取りたると思はんする程に、取らすまじ。」とて、築土の覆ひに押しあてて、踏み歪めてぞ投げかけ給ふ。太刀取つて押直し、御曹司の方をつらけに見やりて、「念なく御邊はせられて候ものかな。常に此の邊におはする人と見るぞ。今宵こそ仕損ずるとも、これより後に於ては心ゆるすまじき物を。」とつぶやき、ぞ行きける。御曹司、これを見給ひて、何ともあれ、きやつは山法師にてぞ有るらんと思召しければ、「山法師人の器量に似ざりけり。」と宣へども、返事もせず、何ともあれ、築土よりおり給はん處を斬らんする物と思ひて、待ちかけたり。築土よりゆらりと飛びおりたまへば、辨慶太刀打ちふりてつと寄る。九尺の築土よりおり給へると覺えしが、三尺許りおちつかで、宙に坐しけるが、又取つて返し、上にゆらりと飛び上り給ふ。大國の穰王は、六







○經遊ぼして 讀經せられて。  
 ○ふみはたはり 踏みはたかつて。足をひろけ立つて。  
 ○尻籬 毛皮で造つた太刀の鞘をおほふもの。  
 ○参りにて候 参詣の着であります。  
 ○ありつる人 かの。件の人。  
 ○木の下萱のちみ云 木や萱の下で讀經申しても。  
 ○かたぐ 貴い身分の人々。  
 ○人推参卑陋 人がましく無理におして来ること無禮だ。  
 ○御邊 御身。そなた。  
 ○持經者 常に經、特に法華經を讀誦する者。  
 ○甲の聲 高い調子の聲。乙の聲の對。  
 ○あいやづき 多いやと掛聲して突くこと。

通りけり。御曹司の、經遊ぼして居給へる後にふみはたばりて、立ち上りけり。御燈の影より人これを見て、「あら嚴しの法師の、丈の高さよ。」とぞ申しける。何として知りてこれまで來たるらんと、御曹司は見給へども、辨慶は見付けず。唯今までは男にておはしつるが、女の裝束にて、衣打ちかづき居たまひけり。武藏坊、思ひ煩ひてぞありける。中々是非なく推参せばやと思ひ、太刀の尻籬にて、脇の下をした、かにつき動かして、「兒か女房か。これも参りにて候ぞ。彼方へよらせ給へ。」と申しけれども、返事もし給はず。辨慶、さればこそ、たゞ者にてはあらず。ありつる人ぞとおもひ、又した、かにこそ衝いたりけれ。その時御曹司仰せられけるは、「不思議の奴かな。おのれが様なる乞食は、木の下萱のもとにて申すとも、佛の方便にてましませば、聞召し入れられんぞ。かたぐおはします處にて、狼藉なり。そこ退き候へ。」と仰せられけれども、辨慶「情なくも宣ふ物かな。昨日の夜より見参に入りて候かひもなく候。其方へ参り候はん。」と申しも果さず、二疊の疊をのり越え、御側へ参る。人推参卑陋なりとにくみける。かかりける處に、御曹司の持ち給へる御經をおつ取りて、さつと開いて、「哀れ御經や。御邊の經か、人の經か。」と申しける。されども返事もし給はず、「御邊も讀み給へ、我も讀み候はん。」といひて讀みけり。辨慶は西塔に聞えたる持經者なり。御曹司は鞍馬の兒にて、習ひ給ひたれば、辨慶が甲の聲御曹司の乙の聲、入りちがへて、二の巻半巻許りぞ讀まれたる。参る人のあいやづきも、

○行人 行者。修行者。

○たまらぬ人 さまらぬ人。

○いざさせたまへ さあ御出でなさいませ。

○分内 境内。  
 ○目をさます 驚く  
 ○おりあうて 共に  
 おりて來て。  
 ○退いつ進んづ 退いたり進んだりして

○行道 各人數列を作つて讀經しながら佛又は佛殿をめぐる歩く儀式。  
 ○下になる云々 負けるのでこそあるわい。

はたとしづまり、行人の鈴の聲も止めて、これを聴聞しけり。萬々世間澄み渡りて、尊さ心も及ばず。暫くありて、「知る人のあるに、立ちよりて又こそ見参せめ。」とて立ち給ふ。辨慶これを聞きて、「現在目の前に、坐する時だにも、たまらぬ人の、いつをか待ち奉るべき。御出で候へ。」とて、御手を取りて引き立て、南面の扉のもとに行きて、申しけるは、「持ち給へる太刀の眞實ほしく候に、それ給ひ候へ。」と申しければ、「これは重代の太刀にて叶ふまじ。」「さ候はば、いざさせたまへ。武藝に付きて勝負次第に賜はり候はむ。」と申しければ、「それならば参り逢ふべし。」と宣へば、辨慶頓て太刀を抜く。御曹司も抜き合せ、さんぐくに打ち合ふ。人これを見て、「こはいかに御坊のこれ程分内も狭き處にて、しかも幼き人とたはぶれば何事ぞ。その太刀さし給へ。」といへども、聞きも入れず。御曹司上なる衣を抜ぎて棄て給へば、下は直垂腹巻をぞ著給へる。此の人も、たゞ人にはおはせざりけりとて、人目をさます。女や尼童ども、あわてふためき、縁より下へ落つる者もあり、御堂の戸をたて、入れじとする者もあり。されども二人は馳て舞臺へひいておりあうて戦ひける。退いつ進んづ打ちあひける間、初めは人もおちて寄りざりけるが、後には面白さに、行道をする様に、つきてめぐりこれを見る。よそ人いひけるは、「抑兒がまさるか、法師がまさるか。」「いや兒こそまさるよ。法師は物にてもなきぞ。はや弱りて見ゆるぞ。」と申しければ、辨慶これを聞きて、扱は早、我は下になるござんなれとて、心細く思



○前世の事 前世からの因縁。  
 ○具して 引連れて  
 ○四條の上人 四條室町に居た正門坊。俗名鎌田三郎正近。  
 ○六波羅 清盛の邸も三平正盛の邸であつたが清盛大いに修築して邸とした。  
 ○奥へ下らん 奥州へ下らん。  
 ○木曾がもと 源義仲のもと。  
 ○かくて御渡り候へば 斯様にして御出でになるから。  
 ○催し よび集め。  
 ○兵衛佐殿 伊豆に居た源頼朝。

ひける。御曹司も思ひ切り給ふ。辨慶は思ひ切つてぞ打ちあひける。辨慶少し打ちはづす處を、御曹司走りか、つて斬りたまへば、辨慶が弓手の脇の下に、きつさを打ちこまれ、ひるむ處を太刀の背にて、さんぐくに打ちひしぎ、枕に打ちふして上に打乗りゐて、「さて従ふや否や。」と仰せられければ、「これも前世の事にてこそ候はん。さらば従ひ参らせん。」と申しければ、著たる腹巻を御曹司重ねて著給ひて、二振の太刀を取り、辨慶を先に立てて、その夜の中に、山科へ具して坐し、疵を癒して、其の後連れて京へ坐して、辨慶と二人して、平家を狙ひ給ひける。其の時見参に入り始めてより、心ざし又二つなく、身にそふ影の如く、つき添ひ奉り、三年に攻めおとし給ひしにも、度々の高名を極めぬ。奥州衣川の最後の合戦まで、御供して終に討死してける武藏坊辨慶これなり。かくて都には、九郎義経、武藏坊といふ兵士を語りひて、平家をねらふと聞えありけり。坐しける處は、四條の上人が許に坐する由、六波羅へこそ訴へたり。六波羅より大勢おしよせて、上人をとる。その時御曹司おはしけれども、手にもたまらず失ひたまひけれ。御曹司、此の事もれぬ程にてあれ、いざや奥へ下らんとて、都を出でたまひ、東山道にかゝりて、木曾がもとにおはして、「都の住居かなひがたく、奥州へ下り候へ。かくて御渡り候へば、萬事は頼もしくこそ思ひ奉れ。東國北國のつはものを催したまへ。義経も奥州よりさし合はせて、本意を遂げ候はん」とこそ思ひ候へ。これは伊豆國近く候へば、常に兵衛佐殿の御方へ

○平泉 陸中國平泉藤原秀衡が居た。

○兼隆 伊豆の日代  
 ○大場三郎 景親。  
 ○股野五郎 景尚。  
 景親の弟。  
 ○三浦 三浦半島。  
 ○岬 三浦の南端三崎。

○洲の崎、小湊、那古、能島 いづれも安房海岸の地名。

も、御おとづれ候へ。」とて、木曾が許より送られて、上野の伊勢三郎がもとまでおはしけれ。これより義盛御供して、平泉へ下りけり。

七 頼朝謀叛の事

治承四年八月十七日に、頼朝謀叛起し給ひて、泉の判官兼隆を夜討にして、同じき十九日、相摸國小早河の合戦にうち負けて、土肥の杉山に引き籠りたまふ。大場三郎、股野五郎、土肥の杉山を攻むる。二十六日のあけほのに、伊豆國真徳が崎より船に乗りて、三浦を心ざしておし出す。折節風烈しくて、岬へ舟をよせかねて、二十八日の夕暮に、安房國洲の崎といふ處に、御舟をはせ上げて、其の夜は、瀧の口の大明神に御通夜ありて、夜と共に祈誓をぞ申されけるに、明神の示し給ふぞと覺しくて、御寶殿の御戸をいつくしき御手にて押し開き、一首の歌をぞあそばしける。

みなもとはおなじながれぞいはし水たれせき上げよ雲の上まで  
 兵衛佐殿夢うちさめて、明神を三度拜し奉りて、

みなもとはおなじなかれぞいはし水せきあけて給へ雲の上まで  
 と申して、明くれば洲の崎を立ちて、ばんどう、ばんさいにかゝり、眞野の館を出で、小湊のわたりして、那古の観音をふし拜み、雀鳥の大明神の御前にて、かたの如くの御神樂



○保元に爲義 保元の亂に源爲義崇徳上皇の軍に従ひ戦ひ敗れて殺さる。  
 ○平治に義朝 平治の亂に藤原信賴に身方し敗れて尾張に逃ひ長田忠致に殺さる。  
 ○源氏思ひ立ち 源賴政兵を擧げたことをいふ。  
 ○不運の宮 高倉宮以仁王。  
 ○宗徒の輩 重たつたる者。  
 ○りよう島 安房龍島。  
 ○介八郎 上總介平廣常。  
 ○兵衛佐殿 源賴朝。  
 ○黒つばの矢 黒い鳥の羽の矢。  
 ○塗籠藤 弓の幹を藤で隠し塗りこめたもの。

を參らせて、龍島に著き給ひぬ。加藤次申しけるは、「悲しきかなや、保元に爲義斬られ給ふ、平治に義朝討たれ給ひて後は、源氏の子孫皆絶えはてて、弓馬の名埋んで、星霜を送り給ふ。たま／＼も源氏思ひ立ち給へば、不運の宮に與し參らせて、世を損じ給ふこそかなしけれ。」と申しければ、兵衛佐殿仰せられるは、「かく心切くな思ひそ。八幡大菩薩、いかでか思召し捨てさせ給ふべき。」と、諫め給ひけるこそ頼もしくおほゆれ。さる程に三浦の和田小太郎、佐原十郎、栗濱の浦より小舟にとり乗りて、宗徒の輩三百餘人、りよう島へ參りて源氏につく。安房國の住人、町野太郎、案内大夫、是等二人を大將として、五百餘騎馳せ來り、源氏につく。源氏八百餘騎になり、いと力つきて、鞭を上げてうつほどに、安房と上總の境なるつくしうみの渡りをして、上總國、佐貫のえだ濱を急がせ給ひて、磯が崎をうち通りて、篠部、いかいしりといふ處につき給ふ。上總國の住人、いほう、いなん、廳北、廳南、うさ、山のへ、あひかくはのかみの勢、都合一千餘騎、すゑかはといふ處に、馳せ來つて、源氏に加はる。されども介八郎はいまだ見えす。私に廣常申しけるは、「抑兵衛佐殿の、安房上總に打越えて、二箇國の軍兵をそろへ給ふなるに、未だ廣常が許へ、御使を賜はらぬこそ心得ね。今日待ち奉りて、仰せ蒙らずは、千葉葛西を催して、きさうとの濱におし向ひて、源氏を引き立て奉らん。」と議する處に、藤九郎盛長、襪の直垂に、黒草織の腹巻に、黒つばの矢負ひ、塗籠藤の弓持ちて、介八郎のもとに

○見參 面會。  
 ○御教書 御命令書

○黨 地方豪族で族類廣く兵士の一團をなしてゐるもの。  
 ○阪東 足柄碓氷の東。利根川筋の大平野。關東八州。  
 ○在五中將 在原業平。但し墨田河は業平が名付けたのではない。  
 ○すむた 墨田。  
 ○櫓をかき 物見の高櫓を造り。

ぞ來りける。上總介殿に見參と申しければ、兵衛佐殿の御使と申せば、嬉しく思ひ、いそぎ出で逢ひて對面す。御教書をたまはり拜見して、家の子郎等も差遣はせよと、仰せられんとこそ思ひつるに、今まで廣常が、遅く參るこそ奇怪なれと、書き給ひたるを打見て、「あはれ殿の御書かな。かくこそあらまほしけれ。」とて、則ち千葉介の許へ送る。葛西、豊田、うらの守、上總介のもとへ馳せよりて、千葉上總介を大將軍として、三千餘騎開發の濱に馳せ來り、源氏につく。兵衛佐殿、四萬餘騎になりて、上總の館につきたまふ。かくする程にこそ久しけれ。されど八箇國は、源氏に心ざしある國なりければ、我も／＼と馳せ參る。常陸國には、しらと、行方、志田、東條、佐竹の別當秀義、たけちの平武者太郎、しほ道綱、上野國には、大胡太郎、山かみさゑよりの小太郎重房、同じく喜三郎重義、黨には、丹、横山、馳せ參る。畠山、稻毛は未だ參らず。秩父の莊司、小山田の別當は、在京によりて參らず。相摸國には、本間澀谷馳せ參る。大場、股野、山内は參らず。治承四年九月十一日、武藏と下野の境なる松戸の莊、市河といふ處に著き給ふ。御勢八萬九千とぞ聞えける。爰に坂東に名を得たる大河一つあり。此の河の水は、上野國刀根の莊、藤原といふ處より落ちて水上とほし。末にくだりては在五中將の墨田河とぞ名付けたる。海より潮さしあけて、水上には雨ふり洪水岸を浸して流れたり。偏に海を見る如く、水にせかれて五日逗留し給ひ、すむだのわたり兩處に陣取りて、櫓をかき、やぐらの柱に



○浮橋 筏又は船を浮べ並べて橋としたもの。

○知行所 領地。支配する土地。

○石濱 隅田川沿岸で今の東京橋場今戸一帯の地。

○神妙 殊勝。奇特。

○泰衡 藤原秀衡の子。

は、馬をつないで、源氏を待ちかけたなり。兵衛佐殿は、これを御覽じて、「彼奴が首取れ。」と宣へば、急ぎやぐらの柱を切りおとして、筏にし、市河に参り、葛西の兵衛について、見参に入るべき由、申したりけれども、用る給はず。重ねて申しければ、「いかさまにも、頼朝をそねむと思ふぞ。伊勢加藤次心ゆるすな。」と仰せられける。江戸太郎色を失ひける處に、千葉介、近所に有りながら、いかゞ有るべき。成胤申さんとて、御前にかしまつて、不便の事を申しければ、佐殿仰せられけるは、「江戸太郎八箇國の大福長者と聞くに、頼朝が多勢、此の二三日水にせかれて渡しかねたるに、水のわたりに浮橋を組んで、頼朝に、加勢を武藏國王子板橋につけよ。」とぞ宣ひける。江戸太郎承りて、「首を召さる、ともいかでか渡すべき。」と申す處に、千葉介、葛西兵衛を招きて申しけるは、「いざや江戸太郎を助けん。」とて、兩人が知行所は、今井、栗河、かめなし、うしまと申す處より、海人の釣舟を數千艘上せて、石濱と申す處は江戸太郎が知行所なり、折節西國舟の著きたるを、數千艘あつめ、三日の内に浮橋をくみて、江戸太郎に合力す。佐殿御覽じ、神妙なる由仰せられ、さてこそふとひ墨田打越えて、板橋につき給ひけり。

八 頼朝謀叛により義經奥州より出で給ふ事

さる程に佐殿の謀叛、奥州に聞えければ、御弟九郎義經、元吉の冠者泰衡を召して、秀

○泉の冠者 秀衡の三男泉三郎忠衡。  
○具したく 整へ揃へて奉るたく。  
○こり敢へざりければ 早急の事だからかつかく、辛うじて。  
○馬の腹筋馳せ切り 馬をはしく馳せて馬の腹の筋を切る程急がせ。  
○揉みにもうで入り 亂れせり會ひせり合つて。  
○ミ、ろがけ ざんざん駆け。  
○室の八島 下野國國府村總社にある大神神社。

衡に仰せけるは、「兵衛佐殿こそ、謀叛をおこして、八箇國を従へて、平家を攻めんとて、都へ上り給ふと承りて候へ。義經かくて候こそ心苦しく候へば、追ひ付き奉りて、一方の大將軍をも望まばや。」とぞ仰せられける。秀衡申しけるは、「今まで君の思召し立たぬ事こそ、僻事にて候へ。」とて、泉の冠者を呼びて、「關東に事出で來、源氏打ちいで給ふなり。兩國の兵ども催せ。」とぞ申しける。御曹司、仰せられけるは、「千騎萬騎も具したく候へども、事延びて叶ふまじ。」とて、うち出で給ふ。とり敢へざりければ、まづかつく三百餘騎を奉りける。御曹司の郎等には西塔の武藏坊、また園城寺の法師の尋ねて参りたる常陸坊、伊勢三郎、佐藤三郎次信、同四郎忠信、これらを先として三百餘騎、馬の腹筋馳せ切り、脛砕くるをも知らず、揉みにもうで馳せ上る。あつかしの中山馳せ越えて、安達の大城うち通り、行方の原し、ちを見たまへば、「勢こそまばらに成りたるぞ。」と仰せられけるに、「或は馬の爪かかせ、或は脛を馳せ砕きて、少々道にとまり、これまでは百五十騎御座候。」と申しければ、「百騎が十騎ならむまでも、打てや者共、後をかへり見るべからず。」とて、とろがけにて歩ませける。木津川を打過ぎて、さけはしの宿に著きて、馬を休めて、絹河のわたりして、宇都宮の大明神ふし拜み参らせ、室の八島をよそに見て、武藏國足立郡、こかは口につき給ふ。御曹司の御勢、八十五騎にぞなりにける。板橋に馳せつきて、「兵衛佐殿は。」と問ひ給へば、「一昨日こゝを立たせ給ひて候。」と申す。武藏の國府



○伊豆の國府 伊豆三島。  
 ○浮島が原 駿河國須戸沼附近の原野。

の六所の町につきて、「佐殿は。」と仰せければ、一昨日通らせ給ひて候。相摸の平塚に。」とぞ申しける。平塚につきて聞き給へば、「はや足柄を越え給ひぬ。」とぞ聞えける。いと心許なくて、駒を早めて打ち給ひける程に、足柄山うち越えて、伊豆の國府に著きたまふ。「佐殿は昨日此處を立ち給ひて、駿河國千本の松原浮島が原に。」と申しければ、さては程近しとて、駒を早めてぞ急がれける。

○佐殿 兵衛佐殿。頼朝。

○木曾 源義賢の子義仲。

○甲斐の殿原 甲斐の源氏には逸見武田小笠原などがある。

○假名實名 通稱と名乗りと。

○色白く尋常なるが色白くすぐれた者が。

○紫裾濃 鎧の袖草摺を上を淡く下を濃く緘したるもの。

○白星の五枚兜 兜の星を銀にして鎧の五枚あるもの。

○猪頸に著 背を仰のきて著る。

○繁藤の弓 藤を繁く巻いた弓。

○鎌倉殿 頼朝。

卷第四

一 頼朝義經に對面の事

九郎御曹司浮島が原に著き給ひ、兵衛佐殿の陣の前、三町ばかり引き退いて陣を取り、しばらく息をぞ休められける。佐殿これを御覽じて、「爰に白旗白印にて、清けなる武者五六十騎ばかり見えたるは、誰なるらん覺束なし。信濃の人々は、木曾に従ひて止まりぬ。甲斐の殿原は二陣なり。いかなる人ぞ、假名實名を尋ねて参れ。」とて、堀彌太郎を御使にて遣はされ、家の子郎等數多引き具して参る。間をへだてて彌太郎一騎す、み出で申しけるは、「こゝに白じるしにておはしまし候は、誰人にて渡らせ候ぞ。假名實名を慥かに承り候へと、鎌倉殿のおほせにて候。」と申しければ、其の中に二十四五ばかりなる男の、色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧の、裾金物うちたるを著、白星の五枚兜に、鉄形打ちて猪頸に著、大中黒の矢おひ、繁藤の弓持ちて、黒き馬の太く逞しきに乗りたるが、歩ませ出でて申されけるは、「鎌倉殿も知ろしめされて候。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候て居候ひつるが、御謀叛のよし承り、夜を日につきて、馳せ参じて候。見参に入れて給ひ候へ。」と仰せられければ、堀彌太郎、さては御兄弟にてまし



- 乳母子 乳母の子
- 傳音者の子
- 色代 挨拶
- 見参せん 御目に掛らう
- 佐藤三郎 繼信
- 同四郎 忠信
- 伊勢三郎 義盛
- 八箇國 關東八國
- 大名小名 將軍の家臣で領地の大小なるもの小なるもの
- 敷皮 毛皮の敷物
- 心のゆく程 氣のすむほど
- 頭殿 左馬頭源義朝。頼朝義經の父
- 池の尼 清盛の繼母。頼盛の母
- 伊東 伊東祐親
- 北條 北條時政

ましけりと、馬より飛んで下り、御曹司の乳母子、佐藤三郎をよび出して色代あり。彌太郎、一町ばかり馬を曳かせけり。かくて佐殿の御前に参り、此の由を申し上げければ、佐殿は善悪に、騒がぬ人にておはしけるが、今度は殊の外嬉しけにて、「さらば、これへおはしまし候へ。見参せん」とのたまへば、彌太郎頼て参り、御曹司に、此の由を申す。御曹司、大きに悦び、急ぎ参り給ふ。佐藤三郎、同四郎、伊勢三郎これら三騎召し連れて参らる。佐殿御陣と申すは、大幕百八十町ひきたりければ、その内は、八箇國の大名小名並み居たり。各敷皮にてぞありける。佐殿、御座敷には、疊一疊敷きたれども、佐殿も敷皮にぞおはしける。御曹司、兜を脱ぎて童にもたせ、弓取りなほし、幕のきはに畏まりてぞおはしける。その時、佐殿敷皮をさり、我が身は、疊にぞ直られける。「それへへ」とぞ仰せらる。しばらく辭退して、敷皮にぞなほられける。佐殿は、御曹司をつくんと御覽じて、先づ涙にぞ咽ばれける。御曹司もそのいろは知らねども、共に涙にむせび給ふ。互に心のゆく程泣きて後、佐殿涙を抑へて、「さても頭殿に、おくれ奉りて、その後、御ゆくへを承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝、池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候ひし程に、奥州へ御下向の由は、幽に承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと思召し忘れ候はで、とりあへず御上り候こと、申し盡しがたく、悦び入り候。これ御覽候へ。か

- 平家の討手 平家を征討する軍
- 御邊 御身
- 八幡殿 源義家
- 後三年の合戦 義家清原真衡を助けて武衛家衡を金盃欄に攻め、三年にして平らけた
- 御擁護 神佛がまもること
- 新誓 心に一定の誓ひを立てて神佛の冥助を祈ること
- 威應 衆生の威を佛の應と互に通じて融合すること
- 刑部丞 新羅三郎義光。義家の弟
- 路次 途中
- 栗屋川 陸奥國
- 亡魂の憤りを休めん 爲義頼朝などが平家のために怨みを懐いて死んだその靈を慰めよう
- さかくの返事 何ともかきも返事

かる大事をこそ、思ひ企て候へ。八箇國の人々を初めとして候へども、皆他人なれば、身の一大事を申し合はする人もなし。みな平家に相従ひたる人々なれば、朝頼がよわけを守りたまふらんと思へば、夜もよもすがら、平家のことのみ思ひ、またある時は、平家の討手上せばやと思へども、身は一人なり、頼朝自身す、み候へば、東國おほつかなし。代官を上せんとすれば、心やすき兄弟もなし。他人を上せんとすれば、平家と一つになりて御つて東國をや攻めんと存する間、それも叶ひがたく、今御邊を待ち付けて候へば、故左馬頭殿、蘇生らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。我等が先祖八幡殿の、後三年の合戦に、むなうの城を攻められしに、多勢皆亡はされて、無勢になりて、栗屋川のはたにおし下りて、幣帛を捧げて、王城をふし拜み、南無八幡大菩薩、御擁護をあらためず、今度の壽命を助けて、本意をとけさせて給へと祈誓せられければ、まことに、八幡大菩薩の感應にや有りけん、都におはする御弟、刑部丞は内裏に候ひけるが、俄に内裏をまぎれ出で、奥州の覺束なきとて、二百餘騎にて下られける。路次にて勢、うち加はり、三千餘騎にて、栗屋川に馳せ来て、八幡殿と一つになりて、終に奥州をしたがへ給ひける。その時の御心も、頼朝御邊を待ちえ参らせたる心も、いかでかこれにまさるべき。今日より後は、魚と水のごとくにして、先祖の恥を雪ぎ、亡魂の憤りを休めん」と宣ひもあへず涙を流し給ひけり。御曹司は、とかくの返事もなくして、袂をぞしほられける。これを見て大名小



○配所 配流されて  
 る土地。頼朝の配  
 所伊豆の伊東。  
 ○方便をつくる 義  
 經を除かうと手立て  
 をする。  
 ○故頭殿云々 故父  
 義朝にお目に掛る心  
 持がして。  
 ○上洛 京都に上る  
 ○宗盛父子 宗盛と  
 其の子清宗。  
 ○院 後白河上皇。  
 ○内 後鳥羽天皇。  
 ○見参に入つて 拜  
 調する。  
 ○大夫判官 五位で  
 檢非違使尉。  
 ○大臣殿 内大臣宗  
 盛。  
 ○腰越 相摸鎌倉附  
 近。

名、たがひの心の中おしはかられて、みな袖をぞ濡らされける。暫くありて、御曹司申されけるは、「仰せの如く、幼少の時御目にかゝりて候ひけるやらん。配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ参り、十六までかたの如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、内々平家方便をつくる由、承り候間、奥州に下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御謀叛の由承りて、取りあへず走せまるる。今は君を見奉り候へば、故頭殿の、御見参に入り候心地してこそ候へ。命をば、故頭殿に参らせ候。身をば、君にまゐらす上は、いかゞ仰せに従ひ参らせでは候べき。」と申しも敢へず、又涙をながし給ひけるこそ哀れなれ。さてこそ、この御曹司を大將軍にて上せ給ひけり。

二 義經平家の討手に上り給ふ事

御曹司、壽永三年に上洛して平家を追ひ落し、一の谷、八島、檀の浦、所々の忠をいたし、さきがけ身をくだき、終に平家を攻めほろほして、大將軍、前の内大臣宗盛父子を生捕り、三十人具足して上洛し、院内の見参に入つて後、去んぬる元暦元年に、檢非違使五位の尉になり給ふ。大夫判官、宗盛父子を具足して、腰越に著き給ひし時、梶原申しけるは、「判官殿こそ大臣殿父子を具足して、腰越に著かせ給ひて候なれ。君は、如何御計らひ候。判官殿は、身に野心をさしはさみたる御事にて候。その義如何と申すに、一の谷の合

○本三位の中將 平  
 重衡。  
 ○三河殿 頼朝の弟  
 三河守範頼。  
 ○義經が手に云々  
 重衡以下の捕虜は義  
 經の手に渡るべきに  
 範頼の手に渡つて奇  
 怪の事であるの意。  
 ○土肥次郎 土肥實  
 平。  
 ○左右なく さかく  
 の事もなく。さうさ  
 なく。  
 ○八島 讃岐古高松  
 の北。  
 ○檀の浦 長門國馬  
 関海峡の北。  
 ○つめ軍 敵を追い  
 つめて戦ふこと。

戦に、城三郎高家、本三位の中將以下取り奉り、三河殿の手に渡りて候を、判官大に怒りたまひて、三河殿は、大方のことにてこそ。義經が手にぞ渡るべきものを、奇怪の者のふるまひかな。よせて討たんと候ひしを、景時が計らひに、土肥次郎が手に渡してこそ、判官はしづまり給ひしなれ。その上平家を打ち取つては、關より西をば義經賜はらん。天に二の日なし、地に二人の王なしといへども、此の後は、二人の將軍やあらんすらんと、仰せ候ひしぞかし。かくて武功の達者、一度も馴れぬ船戦にも、風波の難を恐れず、舟ばたを走りたまふこと、鳥の如し。一の谷の合戦にも、城は無雙の城なり、平家は十萬餘騎なり。身方は六萬五千餘騎なり。城は無勢にて、寄手は多勢こそ、軍の勝負は決し候に、城は多勢、案内者、寄手は無案内の者共なり。たやすく落つべきとも見え候はざりしを、鴨鳥越とて、鳥獸も通ひがたき巖石を、無勢にて落し、平家を終に追ひおとし給ふことは、凡夫のわざならず。今度、八島の軍に、大風にて波おびたしくして、船の通ふべきやうもなかりしを、たゞ舟五艘にてはせ渡し、僅かに五千餘騎にて、左右なく八島の城におしよせて、平家の數萬餘騎を追ひおとし、檀の浦のつめ軍までも、終に弱氣を見せたまはず。漢土本朝にも、これほどの大將軍、いかでか有るべきとて、東國西國の兵ども、一同に仰ぎ奉る。野心を挟みたる人にておはすれば、人ごとに情をかけ、侍までも目をかけられし間、侍どもあはれ頼むべき主かなと、この殿に命を奉らん事は、塵よりも



○いぶせく 厭はし  
く氣の晴れない。  
○御一期のほど 御  
一生運の開。  
○御果報 御幸運。  
○さりとも 頼朝  
一代の開は頼朝の幸  
運だからそれでも別  
段の事もあるまいが  
の意。  
○九郎 義經。  
○逆櫓 八島の戦ひ  
に梶原が櫓にも軸に  
も櫓をつけ舷に櫓を  
設けて進退に自由  
しようを提議して義  
經に排せられた事。  
○あまなふ 甘鯛。  
○起請 神佛に誓ひ  
を立てて偽りない事  
を書いた文書。誓紙  
起請文。  
○大臣殿 捕虜にな  
つてゐる重衡。  
○向顔 顔を向きあ  
はせること。  
○二位殿 頼朝。但  
し頼朝正二位になつ  
たのは文治五年で此  
の時は二位ではなかつた。  
○川越太郎 武藏の  
士。川越太郎重房。

惜しからじと申して、心をかけ奉りて候。それに左右なく、鎌倉中に入れまらせたまひて御座候はんこと、いぶせく候。御一期のほど、君の御果報なれば、さりともと存じ候。御子孫の世には、いかゞ候はんすらん。又御一言申しても、何とか御座候はん。」と申しければ、君この由を聞召して、「梶原が申すことは、偽りなどはあらじ。なれども一方を聞きて、相はからはんことは、政道の汗る、所なり。九郎が著きたるなれば、明日これにて、梶原に問答せさせ候べし。」と仰せられける。大名小名、これを聞きて、「今の御説のごとくにてぞ。判官もとよりあやまり給はねば、もし助かり給ふことも有りなん。されども景時が、逆櫓立てんと論のやまざる處に、檀の浦にて互に先がけ争ひて、矢筈を取り給ひし其の遺恨に、かやうに讒言まうせば、終には如何あらんすらん。」と申しける。召し合はせんと仰せられいふ時に、梶原あまなふの宿所に歸りて、偽りまうさぬ由、起請を書きて參らせければ、この上はとて、大臣殿をば腰越より鎌倉にうけ取り、判官をば腰越に止めらる。判官「先祖の恥をきよめ、亡魂の憤りを休め奉る事は本意なれども、随分二位殿の氣色にあひかなひ奉らんとてこそ、身を碎きては振舞ひしか。恩賞に行はれんずるかと思ひつるに、向顔をだにも遂げられざる上は、日來の忠も益なし。あはれ、これは梶原めが讒言ござんなれ。西國にて切りも棄つべきやつを、哀憐をたれてたすけ置きて、敵となしぬるよ。」と後悔したまへども、甲斐ぞなき。鎌倉には、二位殿、川越太郎を召して、「九

○院 後白河法皇。

○御説 御命令。

○島山 島山重忠。

○他人と親しきこと云  
云 他人と親類を  
比較して云へば。  
○年來の忠 義經が  
數年來の忠を盡した  
こと。  
○見参して 見参の  
贈物としての意。  
○勲賞 獎勵するた  
めの賞與。

郎が院の御氣色よきまゝに、世を亂さんと、内々たくむなり。西國の侍ども附かぬさきに、腰越に馳せ向ひ候へ。」と、仰せられければ、川越申されけるは、「何事にて候へ、君の御説を背き申すべきにては候はねども、且は知らしめして候やうに、娘にて候者を、判官殿の召しおかれて候間、身に取りてはいたはしく候。他人に仰せ付けられ候へ。」と申し捨ててぞ立たれける。道理なれば、重ねても仰せ出されず。また島山を召して、仰せられけるは、「川越に申し候へば、親しくなり候とて、叶はじと申す。さればとて、世を亂さんとふるまひ候九郎を、其のまゝ、置くべきやうなし。御邊うち向ひ候べし。吉例なり。さも候はば、伊豆、駿河、兩國を奉らん。」と仰せられければ、島山、萬に憚らぬ人にて申されけるは、「御説背き難く候へども、八幡大菩薩の御誓ひにも、人の國より我が國、他人よりも我が人をこそ守らんとこそ承り候へ。他人と親しきといひ較ぶれば、たとふる方なし。梶原と申すは、一旦の便によりて、召しつかはる、者なり。彼が讒言により、年來の忠と申し、御兄弟の御中と申し、假令御恨み候とも、九國にてもまるらさせたまひて、見参とて、重忠に賜ひ候はんずる伊豆、駿河兩國を勸賞の引出物にまるらさせたまひ、京都の守護に、置き參らせたまひ候て、御後を守らさせたまひて候はん程の御心やすきことは、何事か候べき。」と憚る所なく申し捨てて立たれける。二位殿ことわりと思召しけるにや、其の後、仰せ出さる、こともなし。腰越にこのことを聞きたまひて、野心をさしはさまざる



旨、數通の起請文を書き進じられけれども、猶御承引なかりければ、重ねて申狀をぞ参らせられける。

三 腰越の申狀の事

○起請文 神佛に誓ひを立てて偽りなき事を書いたもの。  
○申狀 事情を申し陳べる書狀。  
○會替の恥辱 越王幻踐の故事。  
○素意 もこよりの意志。  
○故亡父 故父義朝  
○尊靈再誕の縁云々 故父の尊靈が再び生まれ出て來られる機縁がなればこの悲歎を申し述べられない。  
○故頭殿 故左馬頭義朝。  
○御世界の間 御他界になつた故。他界はよその世界へ行く義で、死ぬこと。  
○龍門の牧 大和國宇多郡吉野郡の間にある龍門山の邊であらう。牧は牧場。  
○安堵のおもひに住せず 安心の氣分に落ちつかず。  
○經廻 廻りあるること。  
○難治 難事。難儀。

源義經、恐れながら申しあぐる意趣は、代官の其の一に選ばれ、敕宣の御使として、朝敵を傾け、會稽の恥辱をすゞぐ、勳功に行はるべき處に、思ひの外、虎口の讒言によつて、莫大の勳功を黙止せられ、義經犯す事なうして咎を蒙り、過誤なしといへども、功ありて御勳氣を蒙るの間、空しく紅涙に沈む、讒者の實否をたゞされず、鎌倉中へだに入れられざるの間、素意を陳ぶるに能はず、徒らに數日をおくる。此の時に當つて、長く恩顔を拜し奉らず。骨肉同胞の儀、既に絶え、宿運、極めて空しきに似たるか。將又、前世の業因を感じるか。悲しきかな、此の條、故亡父の尊靈、再誕の縁にあらずんば、誰人か愚意の悲歎を申しひらかん。何れの輩か哀憐を垂れんや。事あたらしき申し狀、述懐に似たりといへども、義經、身體髮膚を、父母に受け、いくばく時節を経ずして、故頭殿、御世界の間、孤子となつて、母の懷中に抱かれて、大和國宇多郡、龍門の牧に起きしより以來、一日片時も安堵のおもひに住せず、かひなき命を存すといへども、京都の經廻、難治の間、身を在々所々に隠し、邊土遠國をすみかとして、土民、

○交契忽ち云々 頼朝と黃瀬川で會見し幸福が熟して。  
○嶺々 山の繼えたさま。  
○漫々 海の廣いさま。  
○亡魂 亡父義朝や亡祖父爲義なごのなきたましひ。  
○五位の尉 檢非違使尉。  
○牛王寶印 神社佛寺から出す符印で、熊野のは其の神が安語の罪を誂すといふので其の裏に誓ひを書いて誓紙とする。  
○冥道 冥途であるが、こは諸佛をいふ。  
○貴殿 因幡守大江廣元をいふ。

百姓等に、服せらる。然れども交契忽ちに純熟して、平家の一族追討の爲に上洛せしむる。先づ木曾義仲を誅戮の後、平家を攻め傾げんが爲に、ある時は岷々たる巖石に、駿馬に鞭つて、敵のために、命を滅ぼさんことを願みす。ある時は、漫々たる大海に、風波の難を凌ぎ、身を海底に沈めん事をいたますして、屍を鯨鯢の腮にかく。然のみならず、甲冑を枕とし、弓箭を業とする本意、しかしながら、亡魂の鬱憤をやすめ奉り、年來の宿望を遂げんと欲する外は他事なし。剩へ、義經五位の尉に補任せらる、の條、當家の重職、何事かこれにしかん。然りと雖も、今愁へ深く歎き切なり。佛神の御助けにあらざるより外は、いかでか愁訴を達せん。これによつて、諸寺、諸社の、牛王寶印の裏を以て、全く野心を挾まざるむね、日本國中大小の神祇、冥道を請じおどろかし奉りて、數通の起請文をかき進ずると雖も、猶以て御宥免なし。それ我が國は神國なり。神は非禮をうけ給はず。頼む所他にあらず、偏に貴殿廣大の御慈悲を仰ぎ、便宜を窺ひ、上間に達せしめ、秘計をめぐらし、過誤なきむねに、宥せられ、放免に預らば、積善の餘慶家門に及び、榮華を長く子孫に傳へ、よつて年來の愁眉を開き、一期の安寧を得んこと書紙につくさず。併しながら、省畧せしめ候ひをはんぬ。義經、誠恐謹言。

元曆二年六月五日



進上 因幡守殿

- 因幡守 大江廣元
- 二位殿 頼朝
- 院 後白河院
- 梶原 梶原景時
- 憤りやすからず 憤りやう容易ならず

とぞ書かれたる。これを聞召して、二位殿を始め奉りて、御前の女房達にいたるまで、涙をぞ流されける。さてこそ暫くさし置かれけれ。判官は、都に院の御氣色よくて、京都の守護には、義經に過ぎたる者あらじとの御氣色なり。萬事あふぎ奉る。かくて秋も暮れ冬の初めにもなりしかば、梶原が憤りやすからずして、頻りに讒言申しければ、二位殿、さもと思はれける。

四 土佐坊義經の討手に上る事

- 土佐坊 土佐坊昌俊
- 鎌倉殿 頼朝
- 源太 梶原景時の長子景季
- 和田 義盛
- 畠山 重忠
- 九郎 義經
- 川越太郎 重房
- 縁あればとて 川越太郎重房は義經の舅で義理の親子であるからとて

「二階堂の土佐坊召せ。」とて、召されけり。鎌倉殿よき所に坐して、土佐坊召されまる。梶原、「土佐参じて候。」と申しければ、鎌倉殿これへと召す。御前にかしこまる。源太を召して、「土佐に酒飲ませよ。」と御説ありければ、梶原、殊の外にもてなしけり。鎌倉殿仰せられけるは、「和田、畠山に仰せけれども、敢てこれを用るす。九郎が都に居て、院の御氣色よき儘に、世を亂さんとする間、川越太郎に仰せけれども、縁あればとて用るす。土佐より外に頼むべき者なし。しかも都の案内者なり。上りて九郎を打ちて参らせよ。其の勳功には、安房、上總を賜はるべき。」とぞ仰せられける。土佐申しけるは、「かしこまり承り候。御一門をほろほし奉れと、仰せを蒙り候こそ、歎き入り存じ候。」と申しければ、

- 色代 挨拶、會釋
- ありつる物 あひの品物
- 納殿 金銀衣服調度などを納め置く所
- 手鉾 片手で持ちあつかふ鉾
- 蛭巻 柄を藤又は銀で間をおいて巻くこと
- 目貫 刀剣などの柄と中身を貫いた金具、又その頭だけをいふ。こゝはその釘と別に頭を細貝にしたもの
- 千手院 大和國上長岡村蓋口千手院の門前に住んだ一派の刀劍匠
- させる寄合 その様な寄せ合はせの
- 楯つき軍 對抗戦
- 手勢 手下の軍勢
- 徳分 得た分。ミりたか

鎌倉殿、氣色大きにかはり、悪しく見えさせたまへば、土佐謹んでこそ候ひける。重ねて仰せられけるは、「さては九郎に組したるにや。」と仰せければ、詮する處、親の首切るも、君の命なり。上と上との合戦には、侍、命を捨てずしては討つべきにあらずと思ひ、「さ候はば、仰せに隨ひ候はん。恐れにて候へば、色代ばかり。」と申す。鎌倉殿、「さればこそ、土佐より外に、誰か向ふべきと思ひつるに、すこしも違はず。源太これへ参り候へ。」と仰せられければ、畏まつてぞ居たりける。「ありつる物は、如何に。」と仰せありければ、納殿の方よりして、身は一尺二寸ありける手鉾の、蛭巻白くしたるを、細貝を目貫にしたるを、持ちて参る。「土佐が膝の上に置け。」とぞ宣ひける。「これは大和の千手院につくらせて、秘藏して持ちたれども、頼朝が敵打つには、束長き物を先とす。和泉判官を討ちしときに、やすく首を取りて、参らせたりしなり。これを持ちてのほり、九郎が首をさし貫き参らせよ。」と仰せられけるは、情なくぞ聞えける。梶原を召して、「安房上總の者共、土佐が供せよ。」とぞ仰せられける。承りて、詮なき多勢かな。させる寄合の、楯つき軍はすまじい。ねらひよりて夜討にせんとおもひければ、「大勢は詮なく候。土佐が手勢ばかりにて、上り候はん。」と申す。「手勢はいか程あるぞ。」と宣へば、「百人ばかりは候らん。」「さては不足なし。」とぞ仰せられける。土佐思ひけるは、大勢を連れ上りなば、若しおほせたらん時、勳功を配分せざらんも悪し。せんとすれば、安房、上總、畠多く田はすくなし。徳分すく



○引出物 獲宴の時賜はる物。  
 ○二階堂 鎌倉桂柄の東北の山谷。  
 ○所知入り 知行を受けた大名が始めてその領地に入る事。  
 ○主の世におはせば 主人が世に出で時めかるれば我等も出世のできぬ事はないと。  
 ○うち任せての 尋常の。  
 ○淨衣 白い狩り衣。  
 ○しで 注連繩などに下ける切った紙。  
 ○頭巾 修験者の被るづきん。  
 ○尾がみ 尾髪。馬の尻尾。  
 ○熊野の初穂物 熊野神社に供へる品物。  
 ○鎌倉殿の吉日云々 頼朝の年まはりには吉日にあたり義經には凶日にあたる日を選び。  
 ○あからさま つかちよつた。

なくて不足なりと、酒飲むかた口に案じつ、御引出物たまはりて、二階堂に歸り、家の子郎等をよびて申しけるは、「鎌倉殿より、勳功をこそ賜はりて候へ。急ぎ京のほりして、所知入りせん。疾く下りて用意せよ。」とぞ申しける。「それは常々の奉公か、また何によりての勳功に候ぞ。」と申せば、「九郎判官殿を討ちて參らせよとの仰せ承りて候。」といひければ、物に心得たるものは、「安房上總も、命ありてこそ取らんすれ。生きてふたたび歸らばこそ。」と申す者もあり。或は、「主の世におはせば、我等も、なか世にならざるらん。」と勇む者もあり。されば心はさまざまなり。土佐は、もとより賢き者なれば、うち任せての京上りの體にてはかなふまじとて、白布をもつて、皆淨衣を拵へて、烏帽子にしでを付けさせ、法師には頭巾にしでを付け、引かせたる馬にも、尾がみにしで付け、神馬と名づけ引きける。鐵腹巻を入れたる唐櫃を、薦にて包み注連を引き、熊野の初穂物といふ札を付けたり。鎌倉殿の吉日、判官殿の悪日を選び、九十三騎にて鎌倉を立ちて、其の日は酒勾の宿にぞ著きたりける。當國の一の宮と申すは、梶原が知行の處なり。嫡子の源太をくだして、白栗毛なる馬白草毛なる馬二匹に、白鞍置かせてぞひきたる。これにもしで付け、神馬と名付けたり。夜を日につぎて打つ程に、九日と申すに京に著く。未だ日高しとて、四の宮河原などにて日を暮し、九十三騎を二手に分けて、あからさまなるやうにて、五十六騎にて、我が身は京へ入りけり。残り引きさがりて入りけり。祇園大路を通りて、

○判官殿の御内 義經の家來。  
 ○堀川殿 義經の邸。  
 ○道者 打ちつれて神社佛寺に參詣する旅人。

○しかんくに教へける かやうくを教へた。  
 ○身の一期見物は京一生涯で見物するに京が第一等である。  
 ○くだんの事 かの事件。  
 ○源三 江田源三。

河原をうち渡りて、東の洞院を下りに打つほどに、判官殿の御内に、信濃國の住人に、江田源三といふ者あり。三條京極の女の許に通ひけるが、堀川殿を出でて行くほどに、五條の東の洞院にて、はたと行き逢ひたり。人の屋陰のほの暗き處にて見ければ、熊野まうでと見なして、いづくよりの道者やらんと、先陣をとほして、後陣を見れば、二階堂の土佐と見なして、土佐が此のごろ、大勢にて、熊野詣ですべしとこそ覺えねと思ひ案するに、吾等が君と鎌倉殿と御不和になりたまへば、何となくよりて問はばやと思ひけれども、ありの儘にはよもいはじ。なか／＼知らぬ由して、土佐が下人めをすかして問はばやと、思ひて待つ所に、案の如く、後ればせの者ども、「六條の坊門油の小路へは、何方へ行くぞ。」と問ひければ、しかんくに教へける。江田は、彼が袖をひかへて申しけるは、「これは何れの國の、誰と申す御大名ぞ。」と問ひければ、「相摸國、二階堂土佐殿。」とぞ申しける。跡より來るもの申しけるは、「さもあれ、身の一期、見物は京とこそ聞くに、何ぞ日中に京入りやばし給はで、道にて日をくらし給ふぞ。ことさら重荷は持ちたり、夜は暗し。」と眩きければ、今一人がいひけるは、「心みじかき人のいひやうかな。一日も逗留あらば、見んすらん。」といひければ、今一人の男の申しけるは、「和殿原も今宵ばかりこそ静かならんすれ。明日は都はくだんの事にて、大亂にてあらんすれ。されば我々までも如何あらんすらん、と恐ろしさよ。」と申しければ、源三これを聞きて、かれらが跡につきて物語をぞしたりけ



○地體 本来のまこと。  
 ○難され たまされ  
 ○披露は詮なく候  
 告げひろめられては  
 困ります。  
 ○いはんずるやう  
 言はうやう。  
 ○せんに 先に。ま  
 づ。  
 ○最初 最初に。  
 ○尾籠 をこのあて  
 字を音讀したので、  
 無禮の意。  
 ○きつと参るべき  
 必ず参らなければな  
 らぬこ。  
 ○屈強 極めて力強  
 い。  
 ○三つの御山 熊野  
 の本宮新宮那智。  
 ○宿願 前からの祈  
 願。  
 ○随分 相應に。頗  
 る。  
 ○路次 途中。

る。「これも地體は、相摸國の者にて候ひしが、主に付きて、在京して候が、我が國の人と聞けば、いとよなつかしく存じ候。」などと賺されて、「同國の人と聞けば、申し候ぞ。實に鎌倉殿、御弟九郎判官殿を、討ち参らせよとの討手の御使を賜はりて上られ候。披露は詮なく候。」と申しける。江田これを聞きて、我が宿所へ歸るに及ばず、堀川殿に走り参り、此の由を申し上ぐ。判官は少しも騒がず、「さこそあらんすらん。さりながら御邊行き向ひて、土佐にいはんずるやうは、これより關東に下したる者は、京都の仔細をせんに鎌倉殿へ申すべし。また關東より上らん者は、最前に義經が許に來りて、事の仔細を申すべき所に、今まで遅くまるる、尾籠なり。きつと参るべきと、時刻をうつつさず、召して参れ。」と仰せられける。江田承りて、土佐が宿所油の小路に行きて見れば、馬ども皆鞍おろし、湯洗ひなどしける。また傍を見れば屈強の兵士、五六百人並み居て、何とは知らず評定しける。土佐坊は、脇息によりかゝりて居ける所へ、江田、つゝと行きて、仰せ含めらる、旨をいひければ、土佐、陳じ申しけるやうは、「先づ珍らしう候江田殿、さて某、上洛のこと、別の仔細にて候はず。鎌倉殿、三つの御山へ、宿願の御事候て、御代官に熊野へ参詣仕り候。鎌倉には、さしたることも候はず。最前に参じ候はんと、随分存じ候ひしに、路次より風の心地あしく候ゆゑ、今夜養生を仕り、明日参じ、御目見えを仕るべき由、申し含め、たゞ今子にて候者を進じ候はんと存する折節、御使に預り、畏まり入り候

○御邊 おん身。そ  
 なた。  
 ○をめたる 臆した  
 怖れひるんだ。  
 ○向後 以後。今よ  
 り後。  
 ○出仕無益なり 動  
 めに出ること無用で  
 ある。出勤するに及  
 ばない。  
 ○いしくも 神妙に  
 も。奇特にも。よく  
 も。  
 ○不思議 奇怪な事  
 ○五枚兜 鎧の五枚  
 ある兜。  
 ○裸背馬 鞍を置か  
 ない馬。はたか馬。  
 ○雜色 雜役に使ふ  
 卑しい召使。  
 ○郎等 従者。家來。  
 ○土器 素焼の杯。  
 ○横座 横手の座席  
 ○ねめまはし 睨み  
 まはし。  
 ○堀川殿 義經の邸

由申させまたへ。」と申しければ、江田は歸りまゐり、この由を申す。判官殿、日頃は侍共に向ひ、御言葉を荒々しくも、宣はざりしかども、唯今は大きに怒つて、宣ひけるは、「土佐め程の法師、異議をいはせけるは、偏に御邊がをめたるによつてなり。向後の出仕無益なり。」と大きに怒り給へば、江田は、御前をまかり立ち、宿所へもかへらず、御前を隔てて居たりけり。武藏坊は、御酒宴過ぎし時、我が宿所へ歸りしが、御内に人も無くおはすらんと思ひて参りける。判官御覽じて、「いしくも参りたまひ候。たゞ今かかる不思議こそあれ。其の法師、いそぎ引つ立てまるれとて、江田源三を遣はして候へば、土佐が返事に隨ひて、歸り來るなり。御邊ゆき向つて、土佐を召してまるれ。」と仰せられければ、「畏まつて承り候。」とて、御前を罷り立ち、思ふ程こそ出で立ちけれ。黒革絨の鎧著、五枚兜の緒をしめ、四尺五寸の太刀をはき、判官殿の祕藏せられたる大黒といふ名馬に、裸背馬にぞ乗りにける。人數多にて叶ふまじと、雜色一人召し具して、土佐が宿へぞうち入りける。土佐が居ける座敷の縁の上にゆらりとあがり、簾をさつと打ちあけて、座敷の體を見ければ、郎等ども七八十人許り並み居て、夜討の評定をぞしける。もとより臆せぬ武藏にて、郎等共をはたと睨み、「一人々御免候へ。」といふ儘に、銚子土器蹴ちらかし、土佐が居たる横座に、むすと鎧の草摺を居かけて、座敷の體をねめまはし、其の後土佐をはたとにらみ、「いかに御邊は、いかなる御代官なりとも、在京あるならば、まづ堀川殿へ参り



○仔細 委しい様子  
こまかな事情。  
○荒けなく あらあ  
らしく。亂暴に。  
○色を損じ 顔色を  
かへて。  
○案ふかき 思案深  
き。思慮深い。  
○やがて歸らん 土  
佐が堀川殿へ行かう  
として家來にいふ語  
○暫く 暫くお待ち  
下さい。  
○よわ腰 腰の左右  
の細い所。  
○鞍壺 鞍の上の人  
の乗る所。  
○廣廂 廂の間。貴  
の子の内側の所。  
○看病 療養。

て、關東の仔細を申さるべきに、今まで遅參は尾籠の致す所なり。」とさも荒けなくいひければ、土佐坊、仔細をいはんとする處に、辨慶いはせも果てず、「申すべき事あらば、君の御前にて、随分陳じ申されよ。出でさせ給へ。」と手を取つて引きたつる。兵ども、これを見て色を損じ、土佐思ひ切り給ふ程ならば、打ち合はんずる體なれども、さすがに案ふかき土佐坊にて、さらぬ體にもてなし、「やがて歸らん。」と申しける程に、侍共も力及ばず、「暫く、馬に鞍置かせん。」といひけるを、「辨慶が馬のある上は、唯々これに乗り給へ。」とて、土佐が小腕を、むずと取り引きたつる。土佐も聞ゆる大力なりしかども、辨慶に引き立てられて、縁のきはまで出でにける。武藏が下人心得て、縁のきはに馬を引きよせたりければ、辨慶、土佐がよわ腰、むずと抱き、鞍壺にどうと乗せ、我が身も後馬にむずとのり、手綱土佐に取りさせて叶はじとおもひ、うしろより取り、鞭に燈を合はせて、六條堀河に馳せつき、其の由申し上げたりければ、判官、南面の廣廂に出で向ひ給ひて、土佐を近く召して、事の仔細を尋ね給ふ。土佐陳じ申しけるやうは、「鎌倉殿の御代官に、熊野にまゐり候。江田殿に申し上げ候如く疾くまゐり候て、鎌倉の様をも申し上げ候はんと存じ候ひつれども、路次より風の心地にて候間、少し看病仕り罷り出でんと存じ候ところへ、御使重なり候ほどに、恐れ存じ候て參りて候。」と申す。判官聞召し、「おのれは義經追討の使として、上るところ聞け。勢をばいかほど持ちたるぞ。」と、仰せられければ、土佐、謹

○ゆめ／＼ ゆめさ  
ら。少しも。更に。  
○何れか君云々 頼  
朝も義經もごちらも  
我が主君である。  
○權現も示現云々  
熊野權現も神の靈驗  
を示し現はれられる  
だらう。  
○生疵 癒えないな  
まなましい疵。  
○左様の仁 左様な  
人。  
○三つの御山 本宮  
新宮那智。  
○それはや争ふ そ  
れでもなほ言ひ争ふ  
か。  
○熊野の牛王 熊野  
から出す護符。起請  
誓紙に使ふ。  
○五體 體驅。  
○出でさま 出る時  
○冥罰 人知れず被  
る神佛の罰。  
○うち解くること  
氣を許し警戒せぬ事

んで申しけるは、「ゆめ／＼存じよらざることに候。人の讒言にてぞ候らん。何れか君に  
て渡らせたまはぬ。定めて權現も、示現しまし／＼候はん。」と申せば、「西國の合戦に疵を  
かうぶり、未だ其の疵癒えぬ輩が、生疵持ちながら、熊野參詣に苦しからぬか。」と仰せ  
られければ、「左様の仁、一人も召し具せず候。熊野三つの御山の間、山賊みち／＼候と  
承り候間、若きやつばらを少々召し具して候。それを人の申し候はん。」判官仰せられける  
は、「汝が下部どもの、明日京都は、大戦にてあらんずるぞと言ひけるぞ。それはや争ふ。」  
と仰せられければ、土佐、申しけるは、「かやうに人の無實を申し付くるに置いては、私  
には陳じ開きがたく候。御免蒙り候て、起請文を書き候はん。」と申しければ、判官「神は  
非禮をうけ給はずといへば、疾く／＼起請を書け。免すべし。」との御説にて、熊野の牛王  
七枚に書かせ、三枚は八幡宮に納め、一枚は熊野に納め、今三枚は土佐が五體に納めよ。」  
とて、焼きて灰になして飲みにけり。「此の上は。」とて許されぬ。土佐ゆるされて出でさま  
に、時刻うつしてこそ、冥罰も神罰も蒙らぬ。今宵をば過すまじものをと思ひける。宿へ  
歸りて、今宵寄せすばかなふまじきとて、各ひしめきける。判官の御前には、武藏を始  
めとして、侍ども申しけるは、「起請と申すは、小事にこそ書かすれ。これ程の大事に、  
今宵は御用心有るべく候。」と申せば、判官は、「何程のことかあらん。」と宣ひける。「さりな  
がら、今宵はうち解くること候まじ。」と申せば、判官「今宵何事も有るならば、唯義經に



○賢々 才智あつて賢い。  
 ○はした者 下司。  
 ○氣色を見て 様子を見て。  
 ○落ちざりければ 白狀しなかつたが  
 ○白川 京都の北郊  
 ○いんぢ 印地。印地打。兒童が機を投  
 け合ふこころから轉じてならず者あぶれ者  
 ○武藏坊 辨慶。  
 ○片岡 片岡八郎弘常。  
 ○佐藤四郎 忠信。  
 ○伊勢三郎 義盛。  
 ○鷲尾 鷲尾三郎經春。

まかせよ。侍どもは皆々宿々に歸れ。」と宣ひければ、各宿所へぞ歸りける。判官は、終日の酒盛に酔ひ給ひて、前後も知らず臥したまふ。其の頃判官は、靜といふ遊女を召し置かれたり。賢々しきものにて、これ程の大事を聞きながら、かやうに打ちとけ給ふも、御運の末やらんとおもひ、はした者を一人、土佐が宿所へ遣はして、「氣色を見てまるれ。」と有りければ、はした者行き見て見るに、たゞ今兜の緒をしめ、馬ひつ立て、既に出でんとす。猶も立入りて奥にて見すまし申さんとて、ふるひく入るほどに、土佐がしもべどもこれを見て、「此處なる女は、たゞ者ならず。」と申しければ、「さも有らん召捕れ。」とて、かの女をとらへ、上げつ下しつ拷問す。暫くは落ちざりけれども、あまりにつよく責められて、ありのまゝにぞおちにける。かやうの者をゆるしては悪しかるべしとて、やがて刺し殺してすてにけり。土佐が勢百騎、白川のいんぢ五十人、相かたらひ、京の案内者として、十月十七日の丑の刻ばかりに、六條堀川におしよせたり。かくて堀川の御所には、今宵は夜も更け、何事もあらじと、各宿へ歸る。武藏坊、片岡兩人は、六條なる女の許へ行きてなし。佐藤四郎、伊勢三郎は、室町なる女の許へ行きてなし。根尾、鷲尾は、堀川の宿へ行きてなし。其の夜は、下部に、喜三太と申す者許りぞ候ひける。判官も、其の夜は更くるまで酒もりして、前後も知らず臥し給ひける。かかる處に、土佐が大勢押寄せ、関をどつとつくる。靜はときの聲におどろき、判官殿をおしうごかして、「敵の寄せたる。」

○唐櫃 脚のついた櫃。  
 ○きせなが 大将のきせなが。  
 ○香ぬぎ 家の戸口の櫃物をぬぐ所。  
 ○左右なく 容易にたやすく。  
 ○雨 風雨を防ぎ日除まして用ゐる横戸。  
 ○待ちつけよ 待つてゐて出遇へ。  
 ○大引兩の直垂 背から袖にかけて大筋を引いた直垂。  
 ○逆澤瀉の腹巻 澤瀉を逆にした編の腹巻。  
 ○出居 客に應接する座敷。  
 ○白笹 矢柄の塗り又は焦しなごせぬもの。  
 ○くつきき 鏝をさしこんだ鑿口に細い糸を巻いた所。  
 ○白木の弓 漆を塗らず藤巻をひき鳴らすこと。  
 ○弦打 弦をひき鳴らすこと。  
 ○養由 養由基。周代の弓術家。楚の太子。柳葉を百歩に射て百發百中といふ名人。  
 ○貫の木 門戸を鎖し固める横木。

と申せども、前後も知らず臥し給ふ。唐櫃のふたをあけて、御きせながを取り出し、御身に投げかけたりければ、かつばと起き給ひ、「何事やらん。」と宣へば、「敵の寄せて候ぞ。」と申しければ、「あはれ女の心ほど、けしからぬ物はなし。思ふに土佐めこそ寄せつらん。人は坐せぬか。あれ追ひはらへ。」と宣ひけり。「侍一人もなし。宵に御いとま給はりて、皆々宿へ歸り給ひぬ。」と申しければ、「さぞ有らん。さるにても、男はなきか。」と仰せられければ、女房達走り回りて、下部に喜三太許りなり。「喜三太參れ。」と召されければ、南面の杓ぬぎに、畏まつてぞ候ひける。「近う參れ。」と召しけれども、日頃參らぬ所なれば、左右なく參り得ず。「彼奴は何とて參らぬ。」と仰せければ、部の際まで參りたり。「義經が出でんほど、汝鎧著て、出で向ひて、義經を待ちつけよ。」と仰せられける。「承り候。」とて、大引兩の直垂に、逆澤瀉の腹巻著て、長刀ばかりをおつ取り、下へ飛んで下りけるが、「あはれ御出居の方に、御弓の候らん。」と申せば、「入りて見よ。」と仰せける。走り入りて見れば、白笹に鶴の羽を以てはきたるくつききの上十四束に拵へて、白木の弓、握り太なるを添へてぞ置きたる。あはれものやおもひて、出居の柱におしあてて、えいやと張り、鐘を撞くやうに、弦打ちやうくとして、大庭にぞ走り出でけり。下藤なれども弓矢取る事は、純友、將門、養由にも劣らぬほどの上手なり。四人張りに十四束をぞ射ける。我が爲にはよしと悦びて、門外に出で向つて、貫の木を外し、戸びらの片方おし開き見ければ、



○矢つぎ早 矢を續けて射るこゝの早わざ。  
 ○金覆輪 數の前輪後輪を金色に縁まつたもの。  
 ○征矢 戰陣に用ゐる矢。  
 ○重藤 弓の幹を藤で繁く巻いたもの。  
 ○鞆のか、り 鞆物をする場所の垣に植ゑた木。  
 ○はぶくらせめて 矢に矧いた矢羽までにせまつて。  
 ○かいかたぐり 荒ら、かに引きのけてをめていて わめいて。  
 ○諸手 兩手。  
 ○平首 馬の頭の側面。

限なき月に、兜の星もきら／＼として、内兜すきて、射よけにこそ見えたりける。片膝つき矢つぎ早に、指しつめ引きつめ、さん／＼に射る。土佐が眞先かけたる郎等、五六騎射おとし、矢庭に二人ぞ失せにける。土佐、叶はじと思ひけん、さつと引きにけり。「土佐きたなし。かくて鎌倉殿の御代官はするか」とて、戸びらの陰にひかへたり。土佐これを聞き、「かく宣ふは誰人ぞ。名乗り給へ。かく申すはず、き黨に、土佐坊昌俊なり。鎌倉殿の御代官と名乗りけれども、下臈なれば、敵のきらふ事もありなん。」と音もせず。かくて判官は、大黒といふ馬に、金覆輪の鞍おかせて、赤地の錦の直垂に、緋緘の鎧著、鉄形打つたる白星の兜の緒をしめ、金作の太刀はいて、切斑の征矢おひて、重藤の弓の真中にぎり、馬引きよせ、召して大庭にかけ出で、鞆のか、りにて、喜三太を召しければ、喜三太申しけるは、「下なき下郎の、今夜のさきがけ承りて候なり。生年二十三。我と思はん者は、よりにて組め。」とぞ申しける。土佐、これを聞きて、安からず思ひければ、戸びらの隙より狙ひよりにて、十三束よつびき、ひやうと射る。喜三太が弓手の太刀打を、はぶくらせめてつと射通す。かいかたぐりて棄て、喜三太、弓をがはと投げすて、大長刀の真中取つて、戸びらを左右へおし開き、「よれや者ども。」と待つ所に、敵轡を並べて、をめてかけ入る。諸手開いて、さん／＼に斬る。馬の平首、胸板、前の膝をさん／＼に斬られて、馬倒れければ、主はさかさまに落つる所を、長刀をおつ取りのべ、すんど切つてぞ落

○大事の手 重い手負。重傷。  
 ○左右なく たやすく。  
 ○しほし休らふ 暫くためらふ。  
 ○さね 草又は鐵の小さな板綴り合せて鏝にする。  
 ○大御門 大門。正門。  
 ○貫の木 門を鎖す極木。  
 ○六種震動 佛語。佛入胎の時、出胎の時、出家の時、成道の時、法輪を轉じた時入滅の時の六時に大地が震動したといふ。  
 ○大黒 義經の乗馬の名。  
 ○馬ぞひ 乗馬に附きそふ従者。  
 ○唯一騎 判官たゞ一騎。  
 ○あはや 危急な時驚き發する聲。

しける。其の外向ふ者共、重手を負ひて引き退く。されども大勢にて攻めければ、走り歸りて、御馬の口にすがる。さしのぞき御覽すれば、胸板より下は、血にぞなりたる。「おのれは手を負うたるか。」「さん候。」と申す。「大事の手ならば、退け。」とおほせられければ、「合戦の庭に出でて、死するは弓矢の面目なり。」と申しければ、「彼奴は健氣者。」と宣ひける。「何ともあれ、おのれと義經とだにあらば。」とぞ、仰せられける。されども、判官も、かけ出で給はず、土佐も左右なくかけも入らず、兩方しばし休らふ所に、武藏坊、六條の宿所に臥したりけるが、今宵は何とやらん、夜こそ寢られね。さても土佐こそ、京に有るぞかし。殿の方覺束なし。めぐりて歸らばやと思ひければ、草摺のしどろなるひやうし、鎧のさねよきに、太刀はき棒打ちつきて、高足駄はきて、殿の方へからり／＼としてぞ参りける。大御門は貫の木さ、れたりと思ひて、小門よりさし入り、御馬屋の後にて聞きければ、大庭に馬の足音、六種震動の如し。あら心憂や、早敵のよせたりけるものと思ひて、御馬屋にさし入りて見れば、大黒はなし。今宵の戦に召されけると思ひて、東の中門につと上りて見れば、判官、喜三太許り御馬ぞひにて、唯一騎ひかへ給へり。辨慶、これを見て、「あら心安や。さりながら、憎さも憎や。さしも人の申しつるを聞き給はで、肝つぶし候はん。」とつぶやき言して、縁の板ふみならし、西へ向きて、どう／＼と行きける。判官あはやと、思召して、さしのぞき見たまへば、大の法師の、鎧著たるにぞありける。



○さしはけて 矢をつがへて。  
 ○さうなく云々 たやすくは裏へ矢が通るまいぞ。  
 ○打物 殿へ打った刀物。刀鎧鎧刀など。  
 ○榎崎張良 漢高祖の臣。  
 ○苗裔 子孫。  
 ○御内 旗下に属する家臣。  
 ○左右なく 事もなく。たやすく。  
 ○きやつはら 彼奴ら。  
 ○しやつ そやつの轉彼奴罵つていふ。  
 ○六條殿 六條堀川殿。義經の邸。

土佐めが、後より入りけるかとて、矢さしはけて馬打ちよせ、「あれに通る法師は誰なるらん。名のれ、名のらで過失せられ候な。」と仰せられけれども、札よき鎧なりければ、さうなく裏はかかじとおもひて、音もせず。射損ずることも有りとおほしめし、矢をば籠にさし、太刀のつかに手をかけ、すはとぬいて、「誰ぞ、名のらで斬らるゝな。」とて、やがて近付きたまへば、此の殿は、打物取つては、樊噲、張良にも劣らぬ人ぞと思ひて、「遠くは音にも聞き給へ。今は近し、目にも見給へ。天兒屋根の御苗裔、熊野別當辨せうが嫡子に、西塔の武藏坊辨慶とて、判官の御内に、一人當千の者にて候。」とぞ申しける。判官、「興ある法師のたはぶれかな。時にこそよれ。」とおほせられける。「さは候へども、仰せ蒙り候へば、爰にて名乗り申すべき。」と猶も戲言をぞ申しける。判官、「されば土佐に寄せられたるぞ。」辨慶、「さしも申しつることを、聞召し入れたまはで、御用心も候はで、左右なくきやつばらを門外まで、馬の蹄を向けさせぬこそ、安からず候へ。」と申しければ、「いかにもして、きやつを生取りて見んずる。」と仰せられければ、「唯置かせ給へ。しやつがあらん方に、辨慶向ひて、つかんで見参に入れ候はん。」と申しければ、「人を見て、人を見るにも、辨慶が様なる人こそなけれ。喜三太めに、軍させたる事はなけれども、軍には誰にも劣らじ。大將軍は御邊に奉るぞ。軍は喜三太にさせせよ。」と仰せられける。喜三太は、櫓に上りて大音あけて申しけるは、「六條殿に夜討入りたり。御内の人々はなきか。在京の人はな

○與黨 與する黨類なから。  
 ○片岡八郎 弘常。  
 ○伊勢三郎 義盛。  
 ○龜井六郎 重清。  
 ○御不審 嫌疑を蒙るこころから轉じて勅氣を蒙るこころ。  
 ○首の骨の中せめて 首の骨の中に通つて貫いた。  
 ○はけたる矢 弓につがへた矢。  
 ○大事の手云々 重傷を負うてもう臨終と存じます。  
 ○淺ましげに 肝つぶれるほかりに。  
 ○黒つばの矢 黒羽の矢。  
 ○おびたし 非常な。  
 ○御不審 御不機嫌御勅氣。  
 ○黄泉 冥土へ行く路。冥途。

きか。唯今参らぬ輩は、明日は、謀叛の與黨なるべし。」と呼ばはりける。こゝに聞き付け、かしこに聞き付け、京白川一つになりて騒動す。判官殿の侍共を初めとして、此處彼處より馳せ来る。土佐が勢を中にとり籠めて、散々に攻む。片岡八郎、土佐が勢の中にかかりて、首一つ、生捕三人して見参に入る。伊勢三郎、生捕二人、首三つ取つて参らする。龜井六郎、備前平四郎二人うちて参る。彼等を初めとして、生捕、ぶん取り、思ひ思ひにぞしける。その中にも軍のあはれなりしは、江田源三にてとゞめたり。宵には御不審にて、京極にありけるが、堀川殿に軍有りと聞きて、馳せまゐり、敵二人が首取りて、「武藏坊、明日見参に入りて給ひ候へ。」といひて、また戦の陣に出でけるが、土佐が射ける矢に、首の骨の中せめてぞ射られける。はけたる矢をうち上げて、引かんくとしけるが、唯弱りにぞ弱りける。太刀を抜き杖につき、はふく参りて、縁へ上らんとしけれども、上りかねて、「誰か御渡り候。」と申しければ、御前なる女房立出でて、「何事ぞ。」と答へければ、「江田源三にて候。大事の手負うて、今を限りと存じ候。見参に入れてたび候へ。」と申しければ、判官、これを聞きたまひて、淺ましげに思召して、火をともし差上げて御覽すれば、黒つばの矢の、おびたしかりけるを、射立てられてぞ伏したりける。判官、「いかに人々。」と仰せられければ、息の下にて申すやう、「御不審蒙りて候へども、今は最期にて候。御赦免蒙り、黄泉を心安く、参り候はばや。」と申しければ、「もとより汝久しく



○むけなる事 甚だつまらぬこと。  
 ○和殿 御身。  
 ○一期の面目 一生涯の言葉。  
 ○かまへて きつこ  
 ○承るご申し 承知しましたご申して。  
 ○常の仰せ云々 母に對して平素御言葉をかけて下されたい  
 ○高聲に申し 聲高く念佛申し。

勘當すべきや。たゞ一旦のこをこそいひつるに。」と仰せられて、御涙にむせび給へば、源三よに嬉しげに打領きたり。鷲尾七郎、近くありけるが、「いかに源三、弓矢取るもの矢一筋にて死するは、むけなる事ぞ。故郷へ何事も申し遣はさぬか。」といひければ、返事にも及ばず、「和殿の枕におはしまし候は、君にて御座候。」と申しければ、源三息の下より申しける。「まさしく君の御膝もとにて死に候へば、一期の面目なり。今は何事をおもひ置くことの候べき。なれども過ぎにし春の頃、親にて候者の、信濃へ下りしに、かまへて暇申して、冬の頃は下れと申し候間、承ると申して候ひしに、下人が空しき骨を持ちて下り、母に見せて候はば、さこそ悲しみ候はん、つらくこれをこそ、不便におもひ候へよ。君都におはしまさんほどは、常の仰せを蒙りたく候へ。」と申せば、「それ心やすく思ひ候へ。常々問はする。」と仰せられければ、よに嬉しげにて、涙を流しける。限りと見えしかば、鷲尾よりて、念佛をす、めければ、高聲に申し、君の御膝の上にして、生年二十五にて失せにけり。判官、辨慶、喜三太を召して、「軍はいかやうにしながらぞ。」と仰せられければ、「土佐が勢は、二三十騎許りこそ。」と申せば、「江田を打たせたるが安からぬに、土佐めが一人も洩らさず、命な殺しそ。生捕りてまるらせよ。」と仰せられる。喜三太申しけるは、「敵射ころすこそ安けれ。生きながら取れと仰せ蒙り候こそ、もつての外大事なれ。さりながらも。」とて、大長刀を持ちて、走り出でければ、辨慶、「あはや、彼奴

○ついで通りて つき通つて。  
 ○泉殿 池水に臨んで造つた殿。  
 ○黄月毛 馬の毛色月毛の黄色を帯びたもの。  
 ○弓杖 弓を杖にすること。  
 ○歩ませ 馬を歩ませ。  
 ○馬の鼻云々 馬の頭を後向にし方向を轉じて逃げて行く。  
 ○揉めども 馬を駆けさせようといらたちあせつたが。  
 ○からすがしら 馬の後脚の外部に面した節。  
 ○伏綱目の鏡 白薄葉紺の三筋折れ曲つた様になつた革で織した鏡。  
 ○さんづ 馬の響びやく糸のうしろ。  
 ○るのめ 鏡の頭の彫りこみ。  
 ○上帯 鏡の腰の邊に懸ふ帯。

に先せられてかなはじ。」と、鉞ひつさけて飛んで出づ。喜三太は、卯の花垣のさきをついで通りて、泉殿の縁のきはを西をさしてぞ出でける。こゝに黄月毛なる馬に乗つたる者、馬に息をつかせて、弓杖にすがりてひかへたり。喜三太はしりよりて、「爰にひかへたるは誰。」と問ひければ、「土佐が嫡子、土佐太郎、生年十九。」と名乗つて歩ませむかふ。「これこそ喜三太よ。」とてつとよる。叶はじと思ひけん、馬の鼻を返して落ちけるを、餘すまじとて追つかけたり。早打の長馳したる馬の、夜もすがら軍にはせめたりけり。揉めどもめども、一所にて踊るやうなり。大長刀をもつて開いて丁ど斬る。左右のからすがしら、つと斬る。馬さかさまに轉びければ、主は馬より下にぞしかれける。取りておさへて、鎧の上帯解きて、疵一つもつけず、搦めて参るを、下部に仰せて、御馬屋の柱に、立ちながら結びつけさせられる。辨慶、喜三太に先をせられて、安からず思ひて、走りまはる所に、南の御縁に伏綱目の錯著たる者、一騎ひかへたり。辨慶はしりよりて、「誰。」と問ふ。「土佐がいとこ、いほうの五郎盛直。」とぞ申しける。「これこそ辨慶よ。」とてつとよる。叶はじと思ひけん、鞭を當ててぞ落ちける。「きたなし餘すまじ。」とておつかけ大まさかりをもつて開いて丁ど打つ。馬のさんづにのめの隠る、程打ちこみ、えいとひひてぞ引きたりける。馬こらへずしてどうど臥す。五郎を取つて押へ、上帯にてからめて参りける。土佐太郎と、一所につなぎ置く。昌俊は、身方の打たれ、或は落ち行くを見て、我は太



- 別當 鞍馬寺の別當。
- 衆徒 僧徒。
- 鞍馬百坊 鞍馬寺の配下にある數百の僧舎。
- 無下なる者 甚だつまらぬ者。
- 堀川殿 義經の邸。
- 貴船の大明神 山城國鞍馬村大字貴船にあつて延喜式に名神大社に列してある。
- うつろ 空洞。
- 伏木 地に倒れてある木。
- 三段 一段は六間。
- そば 岨。山の峻しい所。
- 忠信 佐藤四郎忠信。

郎五郎を捕られて、生きて何かせんとやおもひけん、其の勢十七騎にて、思ひ切つて戦ひける。叶はじとや思ひけん、徒武者かけちらして、六條河原まで打つて出で、十七騎が十騎は落ちて、七騎になる。鴨川を上りに、鞍馬をさして落ち行く。別當は、判官殿の御師匠、衆徒は、契りふかくおはしければ、後は知らず。判官殿の思召す處もこそあれとて、鞍馬百坊おこつて、追手と一つになりて尋ねけり。判官「無下なる者どもかな。土佐めほどの者をにがしける無念さよ。しやつを逃すな。」と、仰せられければ、堀川殿をば、在京の者どもに守護させて、判官の侍一人も残らず、追ひかけける。土佐は、鞍馬をもおひ出されて僧正が谷にぞこもりける。大勢ついで攻めければ、鎧をば貴船の大明神にぬぎて參らせ、主は太木のうつろに逃げ入りける。辨慶、片岡、土佐を失ひて、「何ともあれ、これを逃しては、君の御氣色もいかゞ。」とて、此處彼處を尋ねありく程に、喜三太は、「むかひに見え候伏木に、上りて立ちたり。鷲尾殿の立ちたまへる後の太木のうつろに、物ははたらくやうに候こそ、あやしく覺え候。」と申せば、太刀打振りて見れば、土佐は、叶はじとや思ひけん、木のうつろよりつと出て、真下にくだる。辨慶これを見て、大手を廣げ、「いかに土佐、何處まで。」とて追つかくる。土佐もきこゆる足早きものなれば、辨慶より三段許りさきだつ。はるかなる谷の底にて、「片岡こゝに待つぞ。たゞ追ひ下せ。」と申しける。此の聲を聞きて、かなはじとやおもひけん、そばをかい回りて上りけるを、忠信が

- 大腹股 腹股の鎌を矢柄につけた矢。
- さしはけて さしつかへて。
- 下り矢先 矢先を下けて。
- 小引に引きて 弓を少し引きかけて。
- さうなく さかくの事なくたやすく。
- 起請 神佛に誓ひを立てて偽りのない事を記した書き物。
- 六條河原 六條通りにあたる加茂川の河原。

大腹股をさしはけて、あますまじとて下り矢先に、小引に引きてさしあてたり。土佐は、腹をも切らずして、武藏坊にさうなく取られにけり。さて鞍馬へ具して行き、東光坊より大衆五十人付けてぞ、送られける。「土佐を搦めて參りて候。」と申しければ、大庭に引きすゑさせ、縁に出でさせ給ひて、「いかに昌俊、起請は書くよりして、しるし有るものを、何しに書きたるぞ。生きて歸りたくば、歸さんするぞ。如何。」と仰せられければ、頭地に付けて、「狸々は血を惜しむ、犀は角を惜しむ。日本の武士は名を惜しむと申す事の候。生きて歸りて侍共に二度面をむくべしとも覺え候はず。唯御恩には、疾く／＼首を召され候へ。」とぞ申しける。判官聞召して、「土佐は剛の者にて有りけるや。さてこそ鎌倉殿の頼み給ふらめ。大事の囚人を切るべきやらん、切るまじきやらん。それ武藏はからへ。」と仰せられければ、「大力を獄屋に籠め置きて、ふみ破りては詮なし。やがて斬れ。」とて、喜三太に繩どりさせて、六條河原に引き出し、駿河次郎は太刀どりにて、斬らせけり。相摸八郎、同太郎は十九、いほうの五郎は三十三にて斬られけり。打ち洩らされたる者ども、下りて鎌倉殿に參りて、「土佐は仕損じ、判官殿に斬られ參らせ候ひぬ。」と申せば、「頼朝が代官に上せたる者を、押へて切るこそ遺恨なれ。」と仰せられければ、侍ども、「斬り給ふこそことわりよ。現在の討手なれば。」と皆人々申しける。



五 義經都落ちの事

とにもかくにも、討手を上せよとて、北條四郎時政を大將軍にて都へのほる。畠山は辭退申したりけれども、重ねて御説有りければ、武藏七黨を相具して、尾張國熱田の宮に馳せむかふ。後陣は山田四郎與政、一千餘騎にて關東を門出すと聞えけり。十一月一日大夫判官、三位をもつて院へ奏聞せられるは、「義經命を棄てて、朝敵を退治仕り候ひしは、先祖の恥をきよめんとする事にて候へども、逆鱗を休め奉らんがためなり。然れば朝恩として抽賞をも行はるべき處に、鎌倉の源二位、義經に野心を存するによつて、追討の爲に官軍をはなち遣はす由承り候。所詮相坂の關より西を賜はるべき由をこそ、存じ候へども、四國九國ばかりを賜はりて、罷り下り候はばや」と申されける。これによつて、理なるてうしなるべき間、公卿會議あり。各申されけるは、「義經が申す所も不便なれども、これに宣旨を下されば、源二位の憤り深かるべし。また宣旨を下されずば、木曾が都にてふるまひし如く義經がふるまはば、世は代にても候まじ。所詮、とても源二位討手を上せ候なる上は、義經に宣旨を賜び下して、近國の源氏どもにおほせ付けて、大物にて討たせらるべく候や」と各申されければ、宣旨を下されけり。かかりければ、判官は西國へ下らんとて、出で立ちたまふ。折ふし西國の兵ども、其の數おほく上りたりける中にも、

- 緒方三郎維義 豊後の人。壽永二年院宣によつて九州に在る平氏を討つた。
- 猛勢なること 勢ひの強いこと。
- 矢種 射るべき矢のありたけ。
- 國人 領主が領地へ行くこと。
- 尋常に 立派に。
- 白拍子 白拍子といふ舞をする遊女。
- 狩裝束 狩に出で立つ時の裝束。狩衣行脚袴圍笠などを著る。
- 小具足 鎧の小手、馬當脇指を著用して
- 尾がみ 馬の尻尾
- 毛つがへ 馬の毛色を揃へること。

緒方三郎維義がのほりけるを召して、「九國を賜はりて下るなり。汝たのまれてや」と仰せられければ、維義、申しけるは、菊池次郎折節上洛仕りて候なれば、定めて召され候はんすらん。菊池を誅せられれば、仰せに隨ひ申すべきよし申す。判官は、辨慶伊勢三郎を召して、菊池と緒方と、いづれにて有らん」と仰せられければ、「とりぐにこそ候へども、菊池こそ、猶も頼もしき者にて候へ。但し猛勢なることは、緒方こそまさりて候らん。」と申しければ、「菊池頼まれよ」と仰せられければ、菊池次郎申しけるは、「尤も仰せにしたがひ参らせたく候へども、子にて候者を關東へ参らせて候間、父子兩方へまゐり候はん事、いかゞ候べきや」と申しければ、「さらば討て」とて、武藏坊、伊勢三郎を大將軍にて、菊池が宿所へ押寄せける。菊池は、矢種あるほど射盡して、家に火をかけて自害してけり。さてこそ、緒方三郎参りけれ。判官、叔父備前守を伴ひて、十一月三日に、都を出でたまふ。「義經が國入りの初めなれば、引きつくりへ」とて、尋常にこそ出で立たれけれ。其の頃、世にもてなしける磯の禪師が娘に、靜といふ白拍子を狩裝束せさせてぞ、召し具せられける。我が身は、赤地の錦の直垂に、小具足ばかりにて、黒き馬の太く逞しきに、尾がみ飽くまでたゝひたるに、白覆輪の鞍置きてぞ乗り給ふ。黒絲をどしの鎧著て、黒き馬に白覆輪の鞍おきて、乗りたる者五十騎、萌黄緘の鎧に、鹿毛なる馬に乗つたる者五十騎、毛つがへに其の數うたせて、其の後は打ちこみに百騎二百騎うちける。以上其の勢一萬五



○伊勢をの海士云々  
後撰集伊尹「鈴鹿  
山伊勢をのあまのす  
て衣しほなれたりミ  
人や見るらむ」  
○藻刈舟 藻を刈る  
ための舟。

○こがれ行く 清き  
ゆくに焦れを言ひか  
けてある。

○そんじやうその國  
何それの國。

○へいた 舳板。舟  
の舳に板を互して  
糊したものを、踏立  
板。

○つたつて つゝ立  
つてであらう。

○自然に 萬一に。  
若しも。

千餘騎なり。西國に聞えたる月丸といふ大船に、五百人の勢を取りのせて、財寶を積み、二十五疋の馬ども立てて四國路を心ざす。舟の中、波の上のすまひこそ悲しけれ。伊勢をの海士のぬれ衣、ほす隙もなきたよりかな。入江々々の葦の葉に、繋ぎおきたる藻刈舟、荒磯かけて漕ぐときは、渚々に鳴く千鳥、折知りがほにぞきこえける。霞へだてて漕ぐときは、沖に鷗のなく聲も、敵の鬨の聲かと思ひける。風にまかせ、潮にしたがひてこぐほどに、弓手は、住吉明神ありがたしとふしをがみ、右手を見れば、西の宮、蘆屋の里、生田の森をよそになし、和田の岬をこぎ過ぎて、淡路の瀬門も近くなる。繪島が磯を右手になして、こがれ行く程に、時雨の隙より見給へば、高き山のかすかに見えければ、そんじやうその國の山とまうせども、委しくは知りたる人もなし。武藏坊は、船ばたを枕にして臥したりけるが、がはと起きて、舟のへいたにつたつて、たゞ一目見て申しけるは、「遠くもなかりけるものを、遠き様に見なし給ひけり。あれこそ、播磨國書寫の嶽の見えるや。」とぞ申しける。山は書寫の山なれども、義經心にかゝることのあるは、此の山の西の方より黒雲の俄に、山上へきれてかゝる。日も西にかたぶき候はば、定めて大風吹くべしとおほゆるぞ。自然に風落ち來らば、いかなる島かけ、荒磯にも、舟を馳せあけて、人の命を助けよ。」とぞ仰せられける。辨慶申しけるは、「此の雲のけしきを見候に、よも風雲にては候まじ。君

○わたらせ給ふまじ  
御生存あるまじ。  
○採鳥帽子 兜の下  
に著る鳥帽子。溜壺  
にせず採み柔らめて  
綴のあるもの。  
○白笠 矢柄を塗り  
も焦しめぬ矢。  
○くひの羽 鶴の  
羽根。  
○かきくぎきて 切  
に意中を誦へいふ。  
○天神七代 國常立  
尊、國狹穂尊、豐野  
尊、大戸之道、大  
戸開尊、面垂、根  
尊、伊弉諾伊弉册  
尊。  
○地神五代 天照大  
神、天忍穗耳尊、彦  
火々瓊杵尊、彦火  
火出見尊、鸕鷀草薙  
尊。  
○四十一代 御門  
であるか或は持統天皇  
天武天皇の時からの  
つもりか。  
○鎮西八郎 爲朝、  
張る時に五人が、り  
のをいふ。  
○たまらじ 我が矢  
先には堪へられまい

はいつの程に思召し忘れ給ひて候ぞ。平家を攻めさせ給ひしとき、平家の公達、多く波のそこに屍を沈め、苦の下に骨を埋み給ひしとき、仰せられ候ひしことは、今のやうにこそ候へ。源氏は八幡の護りたまへば、ことに重ねて、日にそへ安穩ならんと仰せられし。いか様にも、これは君の御爲、悪風とこそ思ひ候へ。あの雲くだけて御舟にかゝらば、君もわたらせ給ふまじ。我等も二度故郷へ歸らん事、不定なり。」とぞ申しける。判官、これを聞召して、「何かさることのあらん。」とぞ仰せられける。辨慶申しけるは、「君は、度々辨慶が申す事を、御用る候はで、御後悔候へ。さ候はば見參に入れ候はん。」とて、採鳥帽子引きこうで、太刀長刀は持たざりけり。白笠にくひの羽にて作きたる矢に、白木の弓取りそへ、舟の舳に突立つて、人に向つて物を云ふ様に、かきくぎきて申す様、「天神七代、地神五代は神の御世、神武天皇より、四十一代の御門より以來、保元平治とて兩度の合戦、知らずこれら兩度にも、鎮西八郎御曹司こそ、五人張に十五束を射たまひ、名をあげ給ひし。それより後は絶えて久しくなりたり。さては源氏の郎等の中に、辨慶こそかたの如くも、弓矢取つて人数にいはれたれ。風雲の方へさ、へて射んずる程に、風雲ならば、射るとも消えうせじ。天の政にてある間、平家の悪靈ならばよもたまらじ。それにしるしなくば、神を崇め奉り、佛を尊み參らせて、祈り祭もよもあらじ。源氏の郎等ながら、俗姓正しき侍ぞかし。天兒屋根の御苗裔、熊野別當辨せうが子に、西塔の武藏坊辨慶。」と名